

博 多 110

—博多遺跡群 第149次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第940集

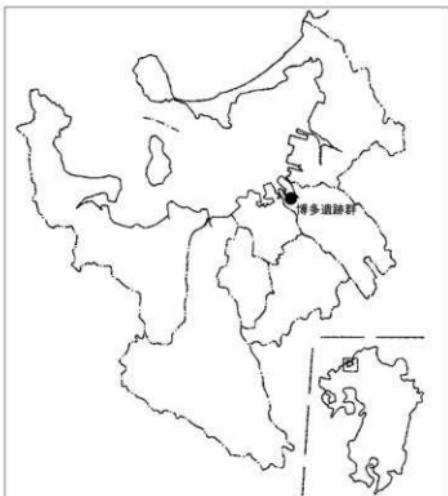
2 0 0 7

福岡市教育委員会

博 多 110

—博多遺跡群 第149次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第940集



調査番号 : 0475
遺跡名号 : HKT-149

2 0 0 7

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる私たちの重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成16・17年度に実施した共同住宅建設に伴う博多遺跡群第149次調査の成果を報告するものです。博多遺跡群は、古代から中世を通じて、中国・朝鮮との貿易で繁栄した都市遺跡です。古くからアジアの拠点都市としての役割も果たしてきました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が博多区上呉服町116,117,118番におけるビル建設に伴い、発掘調査を実施した博多遺跡群第149次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は星野恵美、名取さつきが行った。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は名取、遠藤茜、楠瀬慶太、星野が行った。
4. 本書に掲載した遺構・遺物写真の撮影は星野が行った。
5. 本書に掲載した挿図の製図は名取、山崎加代子、星野が行った。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
7. 遺構の呼称は井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、その他の遺構をSXと略号化した。
8. 本書で記述する輸入陶磁器、国産陶器の分類、説明については以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』(太宰府市の文化財第49集) 2000年
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年
小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No2 1982年
9. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
10. 本書の鋳造関連遺物・金属器・ガラスの保存科学的分析は福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎、片多雅樹が行った。
11. 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
12. 本書の執筆は付編を除いて星野が行った。
13. 付編として同文化財部 山崎純男による炭化種子の報告を掲載している。
14. 本書の編集は星野が行った。

遺跡調査番号	0475		遺跡略号	HKT-149	
地番	博多区上呉服町116,117,118番		分布地図番号	千代博多 48	
開発面積	314m ²	調査対象面積	250m ²	調査面積	110m ²
調査期間	平成17年1月11日~4月28日				

本　文　目　次

I.はじめ	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	5
1. 調査の方法と経過	5
2. 調査の概要と基本層序	5
3. 遺構と遺物	8
IV.まとめ	82
付　編	

福岡市博多遺跡群第149次調査出土の炭化種子について

(福岡市教育委員会文化財部 山崎 純男)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

2004年3月26日、株式会社エバーライフ（現 ウェルホールディングス）より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に博多区上呉服町116,117,118番（面積：314m²）におけるビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け埋蔵文化財課では、書類審査を行った結果、南側で第84次調査、第104次調査が行われており、良好な遺存状況で遺跡が残っていることがうかがえた。両者で協議を行った結果、建物建築部分の210m²を対象として記録保存のための発掘調査を実施することになった。博多遺跡群第149次調査は2005年1月11日から4月28日まで行った。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社 エバーライフ（現 ウェルホールディングス）

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第1課）

調査総括：文化財課長（現 埋蔵文化財第1課長）山口謙治

同課調査第2係長（現 埋蔵文化財第1課調査係長）池崎謙二（前任）山崎龍雄（現任）

調査庶務：文化財整備課管理係（現 文化財管理課管理係）鈴木由喜

事前審査：同課事前審査係長（現 埋蔵文化財第1課事前審査係長）濱石哲也

同係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）主任文化財主事 吉留秀敏

同係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）文化財主事 本田浩二郎

調査担当：同課調査第2係（現 埋蔵文化財第1課調査係）文化財主事 星野恵美

調査作業：石橋テル子 近藤澄江 村田敬子 浦伸英 長野嘉一 本郷満子 関哲也 尊田綱代
宗像正勝 宮川ヤエ子 前田勉 中村桂子 徳山孝恵 富永美樹 山崎えい子 遠山歎
原勝輝 黒木三千男 更級成人 片岡博 三浦まり子 芹川淳子

整理作業：馬場イツ子 桥口三恵子 西島信枝 松尾真澄 木本恵利子

調査・整理協力：比佐陽一郎 片多雅樹

発掘調査から報告書作成に至るまで株式会社ウェルホールディングスをはじめとして、多数の関係者の皆様には多大なご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は地理的にみると、博多湾に面した砂丘列の上に立地している。西を博多川、東を石堂川に、南は那珂川に流れ込む旧比恵川に挟まれ、地理的にも独立した一角をなしていた。この砂丘は繩文海進以降に形成されたもので、3つの砂丘列からなり、内陸側の2つの砂丘は「博多濱」、博多濱側の砂丘は「息濱」と呼ばれている。今回の調査地点は「博多濱」の北東縁にあたる地点である。

博多は古来より対外交渉の拠点として発展してきた町である。その中心は海岸線の後退や人工的な干拓によって、「博多濱」から「息濱」へと括がっていったことが、発掘調査等により確認されている。「博多濱」では夜臼式土器が包含層から出土しており、この頃から人々の痕跡がうかがえる。弥生時代中期になると竪穴式住居や甕棺墓などが営まれ、古墳時代前期には方形周溝墓、中期には前方後円墳も造られている。しかし、これらの時期のものは「息濱」では確認されていない。「息濱」で確認されている遺構は古く遡っても11世紀である。鎌倉時代の13世紀後半、2度にわたる元寇で、博多の街は焼かれ、「息濱」には元寇防壁が築かれる。発掘調査では焼土層が多く見られ、その一つとして1333年の鎮西探題襲撃が挙げられる。この乱の鎮圧の恩賞として大友貞宗が建武政権から「息

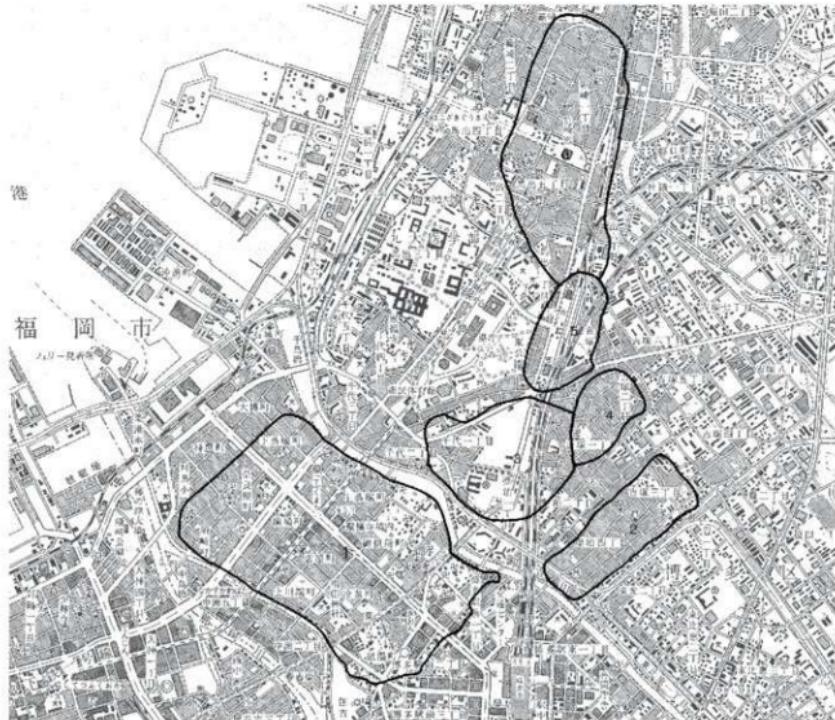


Fig.1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)

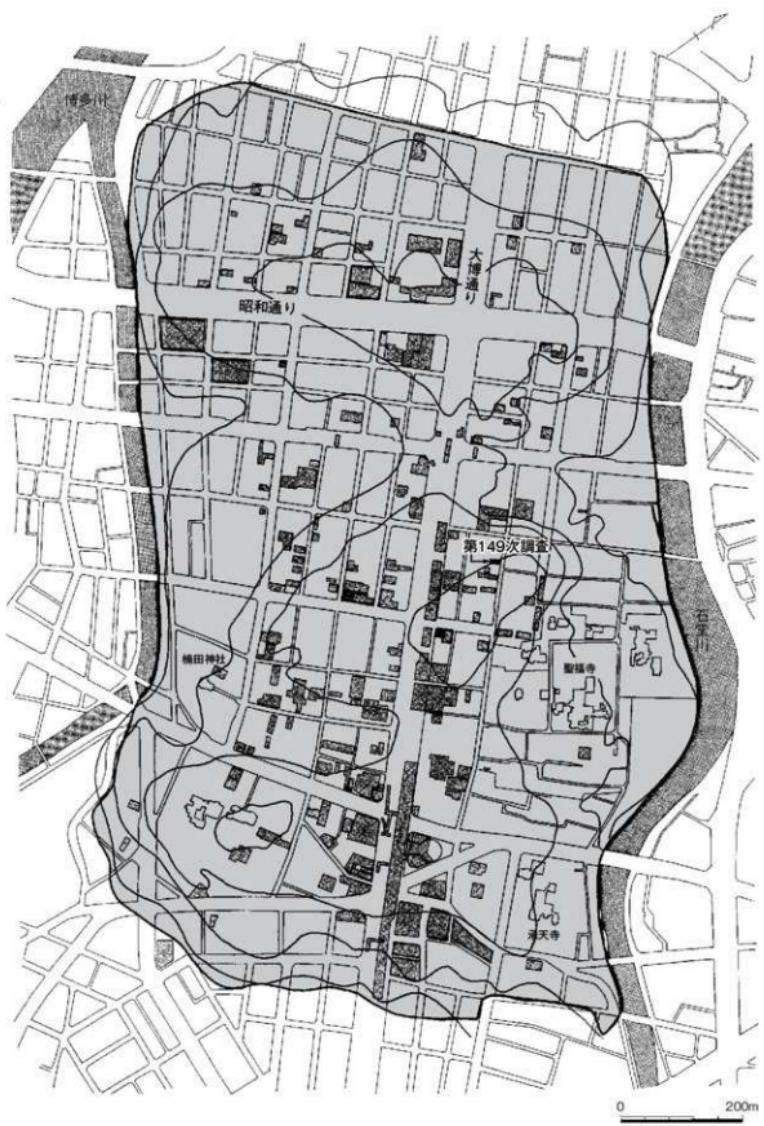


Fig.2 博多遺跡群内調査区位置図（1/8,000）

濱」を与えられている。その後、1348年、室町幕府は博多を官領所在に指定し、九州の在地勢力を抑え、1371年、今川了俊が鎮西探題として赴任する。しかし、1395年、了俊は解任され、渋川満頼、義俊父子が探題となる。父子は1420年朝鮮使節を迎えるにあたって、市街整備を行い、博多の道路を整備する。しかし、鎮西探題も長続きせず、1429年までに、「息濱」は再び大友氏の支配となる。大友氏は「息濱」を拠点に、朝鮮との貿易を積極的に繰り広げ、莫大な利益を得るが、博多の入港公事に関する権利は筑前守護の大内氏が持っていた。そのためこの権利を巡って、大友氏と大内氏は度々対立し、1532年、戦火を交え、大内氏が「息濱」を奪っている。「息濱」は勘合貿易によって大きな利潤を産み出す地域であったため、戦国時代になると諸大名の争奪の的となる。当時の博多は商人達による自治都市が形成され、繁栄を極めていたと伝えられる。しかし、度重なる戦火の末、1586年立花城を攻めあぐねた島津氏が博多の町を焼き払ってしまう。この博多の町が復興するのは、翌年の豊臣秀吉による九州制圧後である。博多商人の神屋宗湛、島井宗室らの手によって新しい町割りが作られる。17世紀初めには、「息濱」と「博多濱」を隔てていた湿地が埋め立てられ、博多は近世都市として誕生する。

今回の調査地点の北西側では76次調査、南東側では第84・104次調査、南西側では26・35次調査が行われている。これらの調査から本調査地点周辺の遺構の初現が6世紀後半であり、8世紀には集落が営まれていること、また、11世紀後半以降、急速に遺構の密度が増え、14世紀前半には道路が整理され、16世紀末まで整地によるかさ上げを繰り返しながら繁栄するが、15~16世紀には道路に面して掘立柱建物が閑散と存在した様相となる状況がうかがえる。また、約60m南東側には安国山正福寺があり、調査区一帯は正福寺の寺内町であったと推測される。それは中世文書や築地遺構（第76次調査）などからもうかがうことができる。

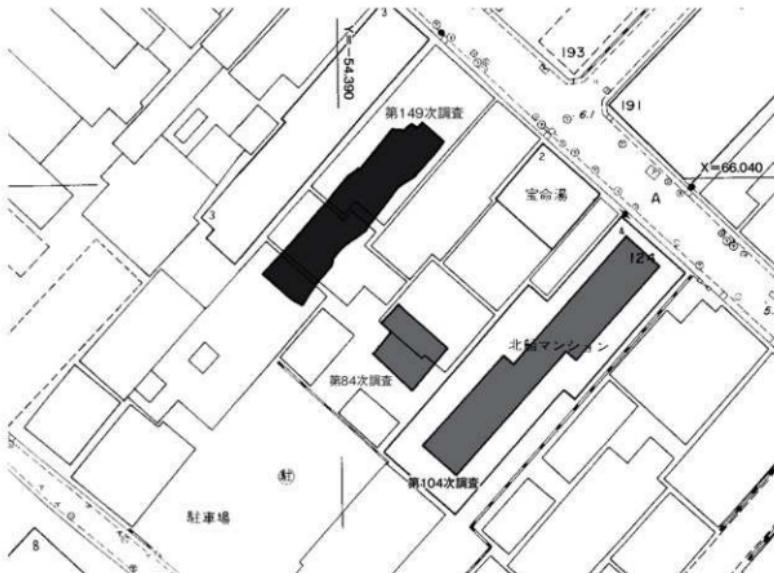


Fig3 第149次調査区位置図 (1/500)

III. 調査の記録

1. 調査の方法と経過

調査に先行して、事業主による矢板設置と同時に表土の掘取りを行った。また、先行してコンクリート杭も打ち込まれた。表土掘取りによる廃土は場外搬出を行っている。現地表面は標高約6.8mを測る。まず、隣接する84次調査成果から、現代の整地層、搅乱層を重機で除去した。廃土置き場の関係上、一度に全面を調査することができないため、先に調査区西側部分をI区として調査を行った。第1面（標高5.8～6.0m）の調査時に井戸の掘削を行い、土層を確認したが、地山までは第1面から約2.4mあり、その間にオリーブ灰色粘土の整地層や焼土層、炭化物層が幾重にも重なっている様子を観察した。それを基に検出面を決め、10面の調査をおこなった。地山までは手掘り掘削である。I区の調査時に生じた廃土は場外へ搬出し、東側部分（II区）の調査へと移った。時間の制約があり、第1面は大半が近世から現代の遺構であったためII区では省力した。よって、東側は第2面からの調査を行った。概ね、I区の面に沿って調査を行う予定であったが、整地面や焼土層が調査区全体に整然と広がっていないために面を正確に追っていくことができなかつた。一部、同じ遺構でも面の食い違いが生じてしまった。II区の廃土はI区に山積みし、地山までの調査をおこなつた。第1面の省力のため、II区は9面の調査となつた。調査対象面積は250m²であったが、矢板設置に伴う掘削や法面掘削のため、実際の調査区下場での面積は110m²であった。

2. 調査の概要と基本層序

本調査地点は博多遺跡群を構成する3列の砂丘のうち、中央の砂丘に位置し、「博多濱」の北東縁に立地する。本調査区は良好な状況で遺存していた。Fig4・5の土層図はI区とII区の境界部分（土層①）と調査区北壁（土層②③）、南壁（土層④）の土層である。北壁土層は、第1面から基盤の砂層までもので、上層の現地表面から第1面までは矢板の設置を行つた関係から土層図の作成は行えなかつた。また、I区とII区の境界部分の土層は、II区の1面を先行して、掘削してしまつたため、土層図に記録することができなかつた。現地表面は標高約6.8mを測り、第1面までの約1mまでは暗褐色土を基調とした現代の盛土が続く。

調査を行つた第1面の層はにぶい黄褐色土の層である。炭化物を多く含む層で、多くの遺構が切り込んでいる。西側で標高5.8m、東側はやや高く6.0mを測る。検出した主な遺構は井戸、石敷遺構、土坑で、時期は19世紀が主体である。1～2面の包含層中からは、肥前系陶磁器が最も多く、中国の染付や少量ではあるが、龍泉窯系青磁、白磁が出土する。また、るっぽや羽口類も多く見られる。第2面はI区で標高5.4mを測るオリーブ灰色粘質土の整地層と焼土層を鍵層とした。これはII区では続かなかつたため、標高5.5mを測る灰色土を遺構面とした。I区とII区の境に道路状遺構を検出し、これは第6面まで存続する。主に17・18世紀の井戸、石積遺構、土坑を検出した。2～3面の包含層では、肥前系陶磁器の割合が減り、かわりに龍泉窯系青磁や白磁（IX類）が多くなる。他に中国の染付、朝鮮時代の粉青沙器や白磁、瀬戸美濃焼、滑石製品が出土する。また、カリウム鉛ガラスの小玉と容器の小片が出土した。第3面はI区では、標高5.0m地点でオリーブ灰色粘質土の縮まりのない整地層と焼土層を再度検出したため遺構面とした。これは2面同様、II区まで広がつていかないため、標高5.0mを測る灰色土を遺構面とした。13～16世紀の土坑、溝が主体で、近世の井戸、石積遺構も検出した。3～4面の包含層からは龍泉窯系青磁（III類）と白磁（IX・VII類）が主体を占める。同安窯系青磁が少量であるが出土する。また、焼土層からは粘土塊が多く出土する。第4面はI区で、新たな遺構を検出する灰色粘質土（標高4.6m）を遺構面とした。同レベルで、にぶい褐色シリ

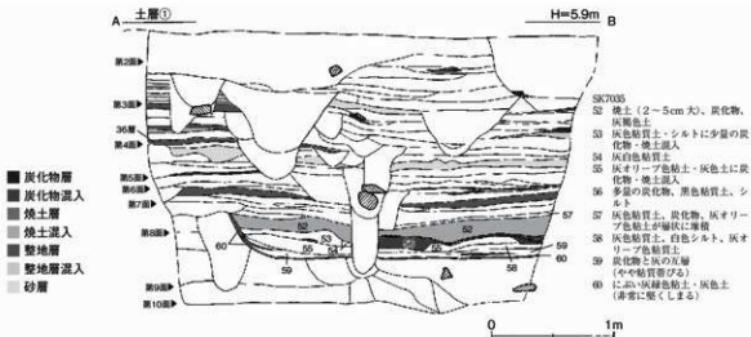


Fig.4 第149次調査区中央南北土層実測図（1/40）

ト層や褐色砂が部分的に広がる。II区では一部オリーブ灰色粘質土の整地層（標高4.7m）があり、これを遺構面とした。I区同様、褐色砂も広がる。13世紀後半～14世紀前半の溝、土坑を検出した。4～5面の包含層出土遺物は上層出土の遺物と大差なく、土器ではへそ皿が出土した。第5面はI区で、焼土層の広がりと中央部分にオリーブ灰色粘土の整地層を確認したため、遺構面（標高4.5m）とした。II区ではI区とほぼ同じ高さの標高4.5m付近で、焼土層を確認したためこれを遺構面とした。13世紀～14世紀前半の溝、土坑を検出した。5～6面の包含層出土遺物も上層と大差ないが、白磁・青白磁の合子や龍泉窯系青磁の香炉等が出土する。第6面はI区で、中央部分にオリーブ灰色粘土の整地層（標高4.4m）が広がったため、遺構検出を行った。この整地層は西側へは続かず、西側では継まりのない黒色土が堆積し、その上面では遺構は確認できなかった。また、整地層の下には砂層が広がり、新しく柱穴を確認した。II区はほぼ同じ標高の4.3mで新しい遺構を検出したため遺構面とした。13世紀後半を主体とした溝、柱穴を検出した。6～7面の包含層出土遺物も上層と大差ないが、青白磁・白磁の合子や龍泉窯系青磁の双唇碗等が出土した。第7面I区は標高4.3mの焼土層を遺構面とし、II区では4.2mのにぶい褐色土を遺構面とした。第7面では整地がみられなくなり、道路状遺構も検出できなかった。13世紀中頃～後半の井戸、土坑を検出した。また、7～8層の包含層出土遺物でも変化が見られ、白磁（IX類）が減少し、かわって（IV・V・VII類）が増加する。また、龍泉窯系青磁も減少傾向にある。国産では、瓦器碗が見られ、中には楠葉型のものもある。また、凸面に繩目叩きをもつ瓦が多く出土する。第8面I区は、標高4.1mの灰褐色粘質土・シルト、II区は標高4.0mの灰黒色土・シルトを遺構面とした。13世紀代の溝、土坑を検出した。8～9面の包含層出土遺物は、白磁（IV・V類）が主体となり、越州窯系青磁もみられる。土器では壺の大半がヘラ切り底となり、甕も増加傾向にあり、黒色土器A類、綠釉陶器が出土する。また、上層では少量であった土鍤・石鍤が出土する。第9面I区では、標高3.7mの褐色シルト・黄褐色砂、II区では3.6mの黄褐色シルトを遺構面とした。上層で明確に確認できなかった井戸や11世紀後半～12世紀の井戸、土坑を検出した。9～10面の包含層からは陶磁器がほとんど見られなくなり、かわって須恵器が多く出土する。土器も甕が多く、他には黒色土器A・B類、綠釉陶器が出土する。また、焼塙壺・土鍤・石鍤、移動式竈が出土する。第10面はI区・II区ともに地山である黄褐色砂を遺構面とした。標高はI区で3.5m、II区で3.4mを測り、ほぼ平坦である。8～9世紀の柱穴を多数検出した。

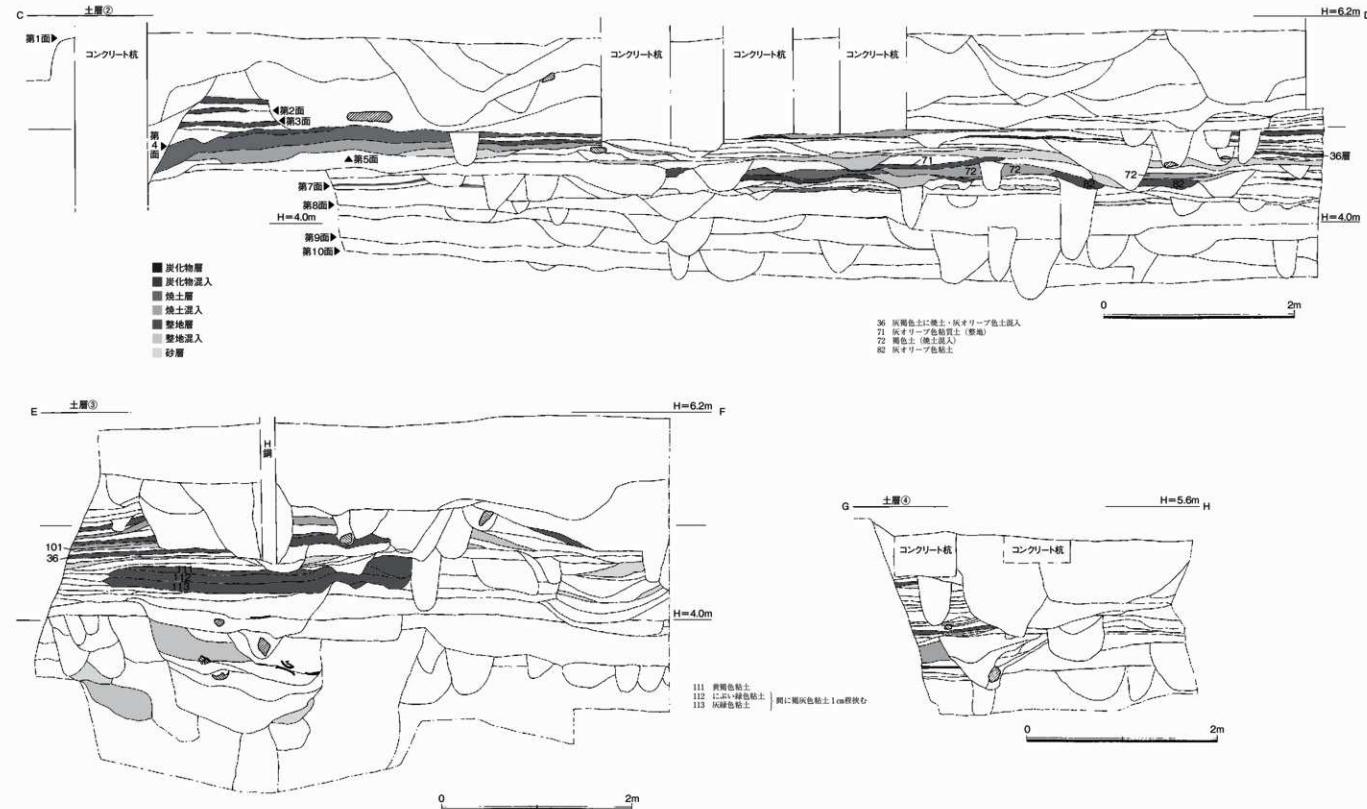


Fig.5 第149次調査区北壁・南壁土層南北土層図 (1/40)



Ph.1 中央土層（西から）



Ph.2 北壁 I 区東側土層（南東から）



Ph.3 北壁 I 区土層（南から）



Ph.4 北壁・中央土層（南から）



Ph.5 北壁 I 区中央土層（南東から）



Ph.6 北壁 II 区土層（南東から）

3. 遺構と遺物

1) 第1面の調査 (Fig6 Ph.7・8)

第1面はにぶい黄褐色土層の上面、標高5.9mに設定した。検出した主な遺構は井戸1基、石敷き1基、土坑14基、柱穴である。土坑には多量の遺物が廃棄されており、覆土は主に灰褐色土で炭化物や灰を含んでいた。検出した遺構の時期は主に19世紀以降から現代までである。

SX1018 (Fig7 Ph.9) I区西側で検出した石敷きの遺構で、遺構の南東端はSK1015で壊される。反対側の北西端も石列が乱れており、破壊されたものと考えられる。石敷きの規模は幅0.75m、長さは現存で3.3mを測る。石は拳大から頭大の川原石で、乱雑ではあるが、一段、一部二段積みで構築する。掘り方は確認できなかった。石の隙間には、軒丸瓦、肥前陶磁器が出土し、備前焼の播鉢、龍泉窯系青磁碗も混入する。時期は18~19世紀と考えられる。

出土遺物 (Fig7) 1は備前焼の鉢の口縁部片である。色調は赤褐色を呈する。2は龍泉窯系青磁碗で、見込みには凸凹があり、スタンプの可能性もあるが、不明瞭である。3はるつば片である。

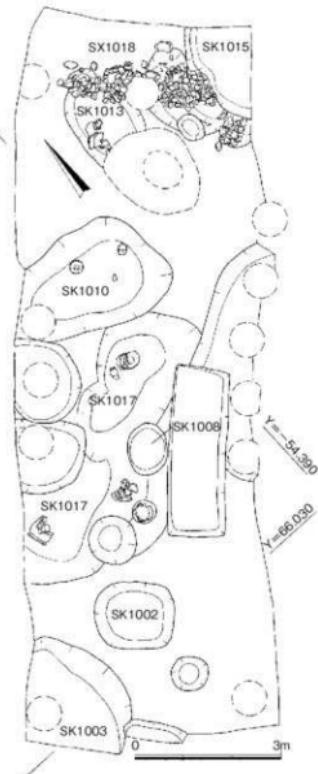


Fig.6 第1面全体図 (1/100)



Ph.7 第1面 I区全景 (南西から)



Ph.8 SX1018周辺 (南東から)

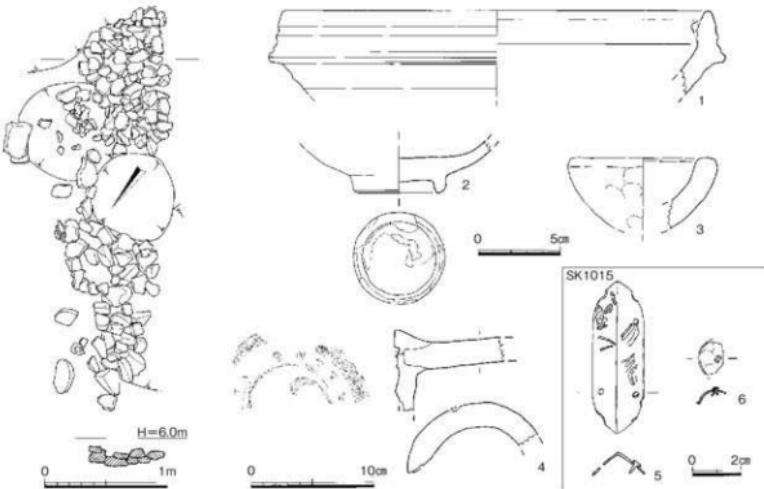


Fig.7 SX1018 (1/40) およびSK1015・SX1018出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/2)



Ph.9 SX1018 (南東から)

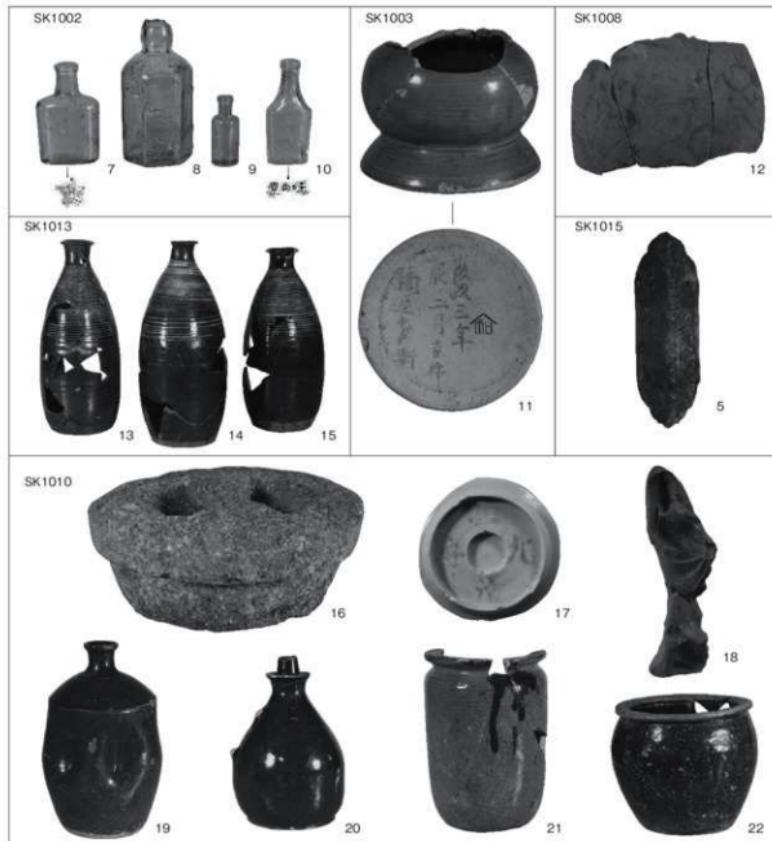


Ph.10 SK1010 (北東から)

未使用と思われ、口縁部上端は灰色、内外面は橙色を呈する。内面は横ナデ、外面は指押さえで調整される。4は三巴文の軒丸瓦で、内区との間には圓線が巡る。

SK1010 (Fig.6 Ph.10) I区中央部で検出した。北西側は一部調査区外へと延びる。現存長3.1m、幅1.6~2.2m、深さは90cmを測り、不定型な隅丸方形を呈する。覆土は灰褐色土で多量の炭化物や灰を含む。大量に遺物が廃棄されており、肥前系陶磁器、瓦質土器の釜、瓦、土製の人形の型、羽口、石製品の蓋、硯が出土する。時期は19世紀と思われる。

出土遺物 (Ph.11) 16は花崗岩の石製品である。蓋の形状を呈し、上面の直径26.3cm、下面の直径20cm、高さ10.3cmを測り、断面は台形状を呈する。下面中央部は凸凹状で、黒く汚れる。重さは18.96kgである。上部には摘み状に2箇所凹みを作っているが、3cmと浅い。17は蛇の目凹形高台を持つ白磁の底部片である。露胎部分に文字（北清舟）が書かれるが1文字は不明である。18は土製の人形の型である。長さは15.2cmを測る。19は陶器の筒形の瓶で、鉄軸がかかる。高さは24cmを測り、体部は4箇所凹状に窪む。20は陶器の注口付き小型の瓶（油注）である。



Ph.11 SK1002・1003・1008・1010・1013・1015出土遺物

高さは18.2cmを測り、鉄軸がかかる。把手が欠損する。21は筒型の体部をもつ陶器の壺で、口径13.2cm、高さ18.3cmを測る。オリーブ黄灰色の釉がかかる。22は小型の陶器の壺で、口径15.5cm、高さ13.8cmを測る。胎土には白色砂粒を多く含み、オリーブ灰色の釉がかかる。

SK1017 (Fig.6 Ph.12) 1区中央で検出した不定形な土坑である。最も深い部分は12mを測る。遺物が大量に投棄される。覆土には炭化物を多量に含み、肥前系陶磁器、瓦質・土師質土器の火舍や釜、鉢とともに土製の人形の型、銅錢が出土する。時期は18世紀後半～19世紀と思われる。

出土遺物 (Ph.13) 23は土製のお多福の型の完形品である。長さ22.2cm、最大幅18.3cmを測る。内面には輪郭が鮮明に残っており、外面の整形は指ナデで行っている。24は肥前系の染付の碗で、見込み中央にはコンニャク印判による五弁花文を有する。その周囲の釉を輪状に搔き取る。25は陶器の土瓶で、黄灰色の釉がかかる。26は陶器の注口付き小型の瓶（油注）である。高さは14cmを測り、



Ph.12 SK1017遺物出土状況(南西から)

鉄軸がかかる。27は染付の油壺である。高さは11.9cmである。28は陶器の鉄絵緑彩松樹文甕で、口径28cm、高さ33.5cmである。29は陶器の底部片で、外面に「桶」の墨書きを有する。30・31は片口の陶器の擂鉢で、全面に擂り目を施す。30は高台を有し、口径37.5cm、高さ16.8cmを測る。31は小型のもので、口径23cm、高さ10.4cmを測る。32は陶器の花器で、口縁部を欠損し、現存で23.5cmを測る。33は素焼きの花器で、アンフォラ形を呈し、高さ18.2cmを測る。



Ph.13 SK1017出土遺物

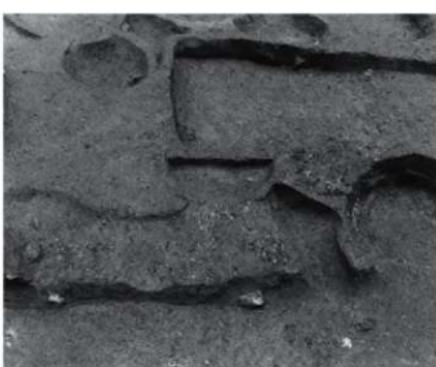
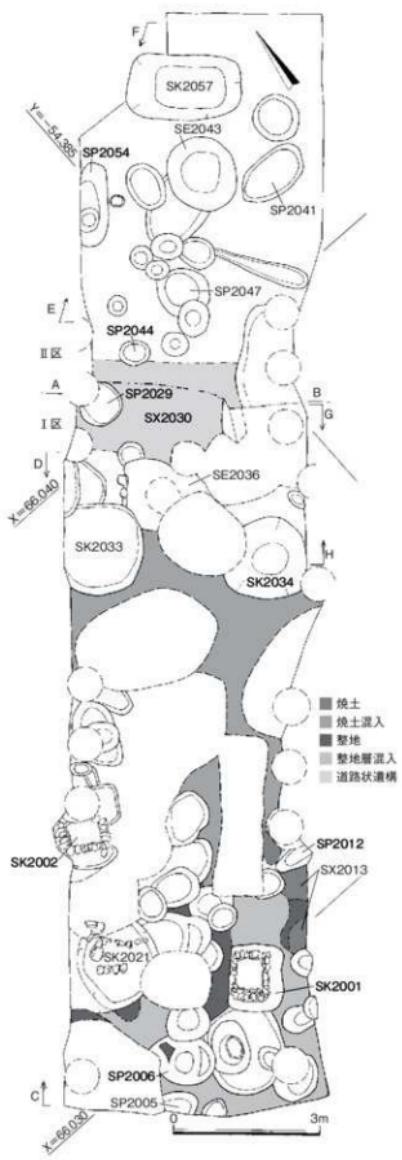
器壁は0.28cmと薄い。尖底で、体部内面には細かい布目が残る。口縁部は強く外側に押しだし、注口とする。34・35は鉄軸がかかる陶器の壺である。34は口径41.8cm、高さ51.5cmを測り、口縁部内面と体部外面の底部付近にスタンプを有する。35は口径39cm、高さ53cmを測る。36は無軸の三耳壺で、肩部に沈線が3条巡る。口径18.5cm、高さ60.5cmを測る。37は瓦質の火舎で、口径30.5cm、高さ22.8cmを測る。体部外面には扇形、脚部外面には龍の文様が施される。

その他の出土遺物 (Fig.7 Ph.11) 5・6はSK1015出土の銅製品である。5は飾り金具で、細かい文様が施され、金箔が貼られる。4箇所に鋲孔を持ち、1箇所には鋲が残る。裏面には布の付着があり、漆塗りの箱の縁飾りの可能性がある。6は鈴で上部のみの遺存である。7~10はガラスの小瓶で、SK1002出土のものである。7は高さ9.3cmで、底部に☆とその内部にHの文字を有する。8は現存で高さ13.2cm、体部に「JOCKEY CLUB BLAND」「OLD SPECIALLY WHISKY」「TN&CO」とある。9は高さ6.3cmと小さく、オリーブがかかったガラスである。10は高さ9.5cmを測り、底部には「味の素」とある。SK1002からは他に陶器製のヒューズの蓋が出土する。表面には「特許」「10AMP.250V.」、裏面には「山口式陶器閉鎖新窯登録三〇五五〇号」とある。11はSK1003出土の陶器の花器である。底部には「安政三年 辰ノ二月吉祥 楠屋中兵衛」と墨書がある。「楠」という文字は他の陶器にも書かれていた。12はSK1008出土の土師質土器の体部片で、墨で絵が描かれる。13~15はSK1013出土の陶器の瓶である。瓶子形の体部に小さい口縁部が付く、高さ26.7~27.7cm、口径4.5~4.8cm、底径8.8~9.0cmを測り、ほぼ同じ規格である。また、底部には墨書を有するものがあるが、不明瞭である。赤褐色の胎土に茶褐色、黄色の釉がかかっている。

2) 第2面の調査 (Fig.8 Ph.14~16)

第1面を約50~70cm（標高5.4~5.28m）掘削するとⅠ区西側で、オリーブ灰色粘質土の整地層を検出した。整地は薄く、厚さ3~5cm程度である。この整地層の西側と南側では整地として使用されているオリーブ灰色粘質土と灰褐色土がブロック状に堆積した状況であった。また、南東側は焼土を多量に混入した土壤であった。特に焼土が厚く集中して検出されたのは南側のSX2013である。整地層を挟んで、西側は3cm、東側は6cmと厚く堆積していた。SX2013からは青磁と白磁の細片が出土する。Ⅱ区では整地層や焼土層がみられなかったため、Ⅰ区とほぼ同レベルの灰色土（5.5m）を遺構面とした。検出した遺構は近世の井戸2基、石積遺構2基、土坑7基、柱穴である。また、Ⅰ区とⅡ区の境にあるSX2030は道路状遺構と考えられる。SE2036より東側、幅約2mほどの比較的の少ない箇所があり、黄褐色土、橙色土と炭化物層が細かく堆積している。ただし、道路状遺構の幅は土層③ (Fig.5) で確認できるように東側も西側も新しい遺構に削平されているため不明である。調査区の境界部で検出したため、調査時は道路状遺構と認識できなかった。この時期より道路状遺構は存在し、方位は異なるが、第6面まで続く。道路に付属する側溝などの施設は確認できなかった。また、第1面のSX1018もほぼ同位置に位置する。第2面の主要な時期は17・18世紀である。

SK2001 (Fig.9 Ph.17) Ⅰ区西側中央部分で検出した長辺1.05m、短辺0.8mの石積み遺構である。南側が最も遺存状況がよく、高さ50cmを測る。北側に向かって削平されており、北側は基底面の石1段が遺存する。石を置きながら裏込めの土を充填したと思われ、下段に比べ上段の石が開いている。断面図からも外側に傾いていることが見て取れる。石積みは扁平な石を用いて構築している。石の面は規則性がなくねじは通っていないが、面は意識していると思われ、揃っている。石材には砂岩、花崗岩、片岩が用いられる。石材として石臼、砥石（遺物番号 46~48）も用いられる。掘り方は石積みの基底面付近で確認した。長辺1.15m、短辺0.67m、深さ10cmであるが、基底面の石が浮くため、掘りすぎの可能性がある。肥前系陶磁器小片、朝鮮時代の粉青沙器、備前焼の擂鉢、石臼、砥



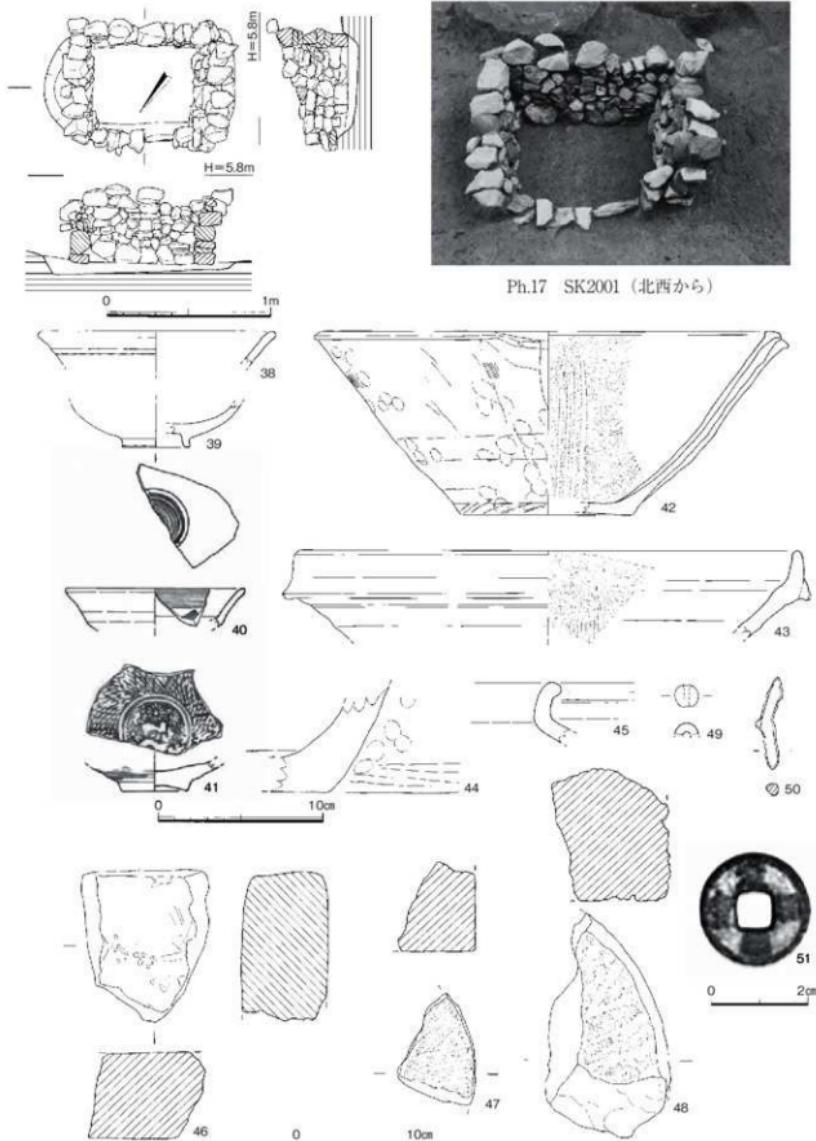
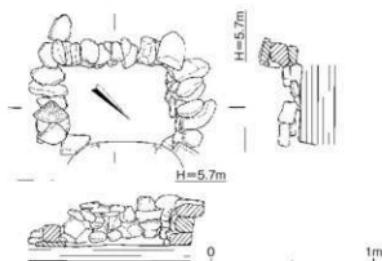


Fig.9 SK2001実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3・1/4・1/1)



Ph.18 SK2002 (北西から)

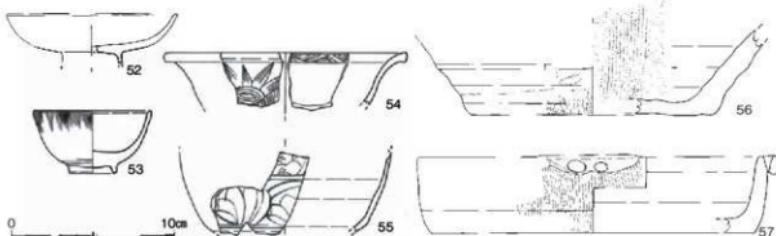


Fig.10 SK2002実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

石が出土し、混入品もみられるが、石積み構造の時期は18世紀前半と思われる。

出土遺物 (Fig. 9) 38・39は肥前系陶磁器の碗である。38は白磁で口縁部下に1条の突帯を巡らす。胎土は黒色粒を多く含み、釉はやや青みがかった白色釉である。39は陶器で、胎土には粗い砂粒を多く含む。高台内は赤褐色を呈する。40・41は朝鮮時代の陶磁器である。40は粉青沙器の皿で、体部内面に刷毛で白化粧土を施す。41は粉青沙器の碗の底部片である。見込みに印花文、体部内面には兩点点を白土で施す。外面には刷毛目が残る。胎土は砂粒を含み、赤褐色を呈する。全面に施釉される。42は瓦質土器の片口の擂鉢で、4条のすり目が見込みの際まで施される。43は備前焼の擂鉢である。すり目は9条を1単位とする。白色砂粒を多く含み、胎土は赤褐色を呈する。44は備前焼の底部片である。胎土、色調は43に類似する。平底を呈し、器壁は2.5~3.3cmと厚い。45は陶器の甕の口縁部片である。口縁部は折り返して作られた玉縁状を呈し、胎土は白色砂粒を含み、赤褐色を呈する。器面の色調は灰色である。46は細粒砂岩製の砥石である。よく研磨され、滑らかである。47・48は石臼である。47は变成岩が使用され、細い目をもつ。48は気泡を多く含んだ凝灰岩製で、太い目を有する。49はガラスの丸玉で、色調は薄い灰緑色を呈する。半分欠損し、0.68gを量る。50は鉄釘、51は北宋代の銅錢、「元祐通寶」(初鑄年: 1093年)である。

SK2002 (Fig.10 Ph.18) I区中央北側で検出した。北東側は一部コンクリート杭で壊されるが、長辺1.1m、短辺0.7mの石積み構造である。南西側は遺存状況が良好で、高さ30cm程残る。SK2001とはほぼ同じ規模であるが、SK2001より大きめの石材を用いている。SK2001と同じ構築と思われ、下段に比べ上段の石が開くことから石を置きながら裏込めの土を充填したと思われる。また、同様に石材として石臼を用いる。掘り方は確認することができなかった。肥前系陶磁器、土師質土器の

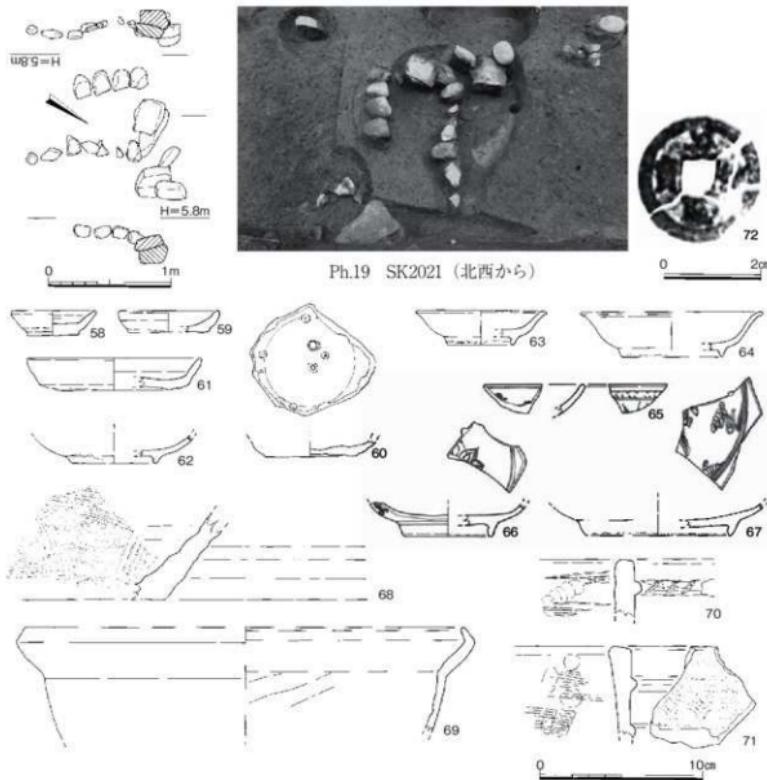


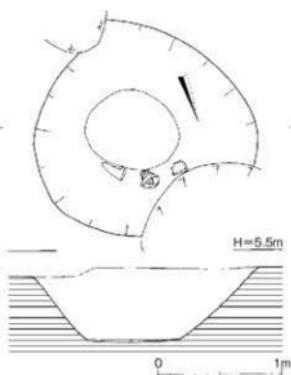
Fig.11 SK2021実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/1）

火舎、備前焼の擂鉢が出土し、時期は18世紀前半である。

出土遺物（Fig.10） 52～55は肥前系陶磁器である。52は白磁の皿で、高台を欠損する。53は染付碗で、口縁部外面には雨降り文が描かれる。54は染付碗で、強く口縁が外反する。外面には花文が描かれる。55は陶器の体部片である。灰色の胎土に化粧土が施され、白色、黄色、青緑色の色絵が残る。内面は灰緑色を呈する。56は備前焼の擂鉢である。一単位12本のすり目が見込み際まで入る。胎土は白色砂粒を含み、にぶい赤色を呈する。57は土師質土器の焰烙である。

SK2021 (Fig.11 Ph.19) I区西側で、石材16個を検出した。一見、規則性をもって並んでいるようにも見られるが、基底面は不規則である。石は長辺1.1m、短辺0.75mを測り、北西側には遺存しない。周辺からは15世紀後半から16世紀と思われる明代の染付、白磁の皿、土師器の壺・皿、瓦質土器の鍋・火舎が出土する。

出土遺物（Fig.11） 58～61は回転糸切り底の土師器である。58・59は小皿で、口径5.4cm、6.4cm、器高1.6cm、1.4cmを測る。60は底部に5mm程の穿孔を内面から施しており、貫通するものとしない。



Ph.20 SK2034 (南東から)

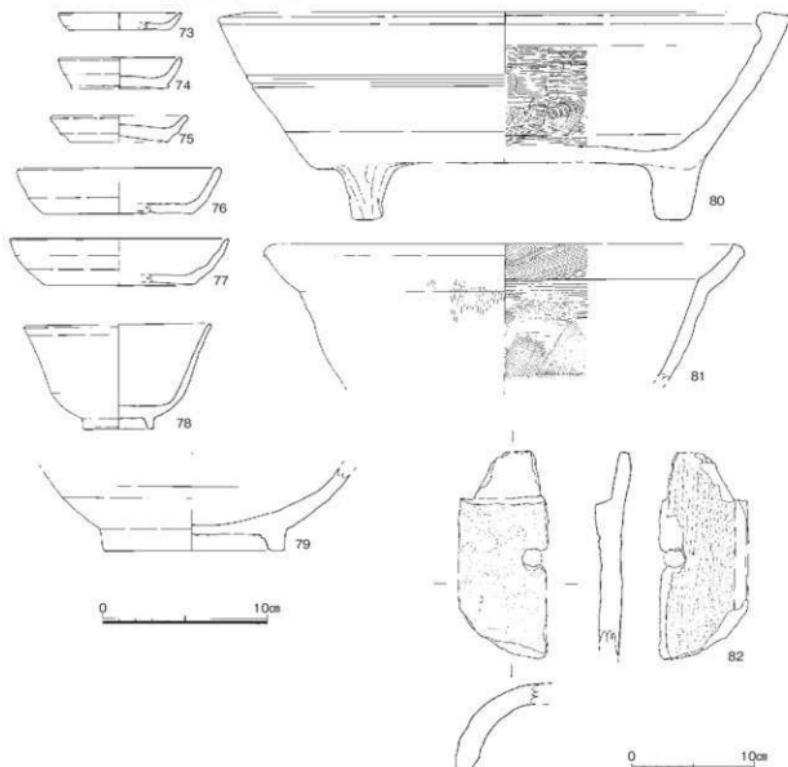


Fig.12 SK2034実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/4)

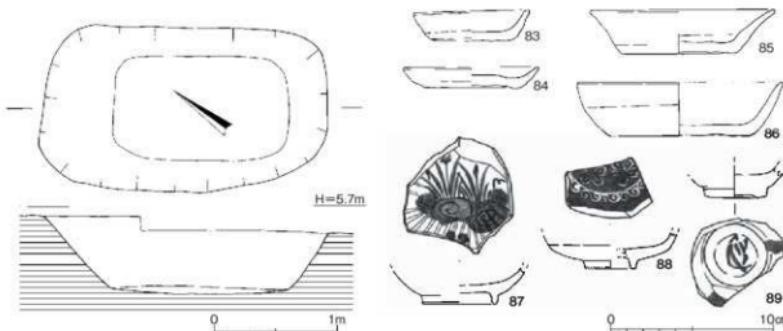


Fig.13 SK2057実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

ものがある。61は壺で、口径11.1cm、器高2.1cmを測る。62は龍泉窯系青磁の底部片である。63・64は白磁の外反口縁皿で、腰部に棱を持たず以て丸みをもって立ち上がる。65～67は明代の染付である。65は染付皿C群、66は染付碗D群、67は染付皿B群である。68は備前焼の擂鉢で、内面には縦方向、斜方向のすり目が入る。69は瓦質土器で、防長系の足鍋、器面の磨減が著しい。70・71は瓦質土器の火舍である。70は口縁部外面に粘土帯を付し、刻み目を施す。71は口縁下に2条の粘土帯を貼り付け、その間にスタンプを施す。72は銅鏡で、「□□□寶」である。

SK2034 (Fig.12 Ph.20) I区東側で検出した。北側をSE1011、南側をコンクリート杭で壊される。平面プランはほぼ円形を呈し、直径約1.4m、深さ0.6mを測る。覆土は自然堆積を呈しており、灰褐色土、炭化物、灰色シルトが堆積する。出土遺物は土師器の壺・皿が多く、他に肥前系陶磁器、瓦質土器の火舍、土師質土器の鍋、丸瓦、鐵滓が出土する。特筆すべき遺物として解体痕をもつイルカの環椎が出土する。時期は17世紀前半である。

出土遺物 (Fig.12) 73～77は回転糸切り底の土師器である。73～75は小皿で、口径7.4～8.3cm、器高1.1～1.9cmを測る。76・77は壺で、口径12.0cm、13.2cm、器高はともに2.8cmである。78は陶器の碗である。胎土は砂粒を含み、黒色、茶色の釉を全面に施釉し、疊付だけ搔き取る。79は肥前系陶器の底部片である。胎土は明橙色を呈し、白化粧を刷毛目で施す。外面は露胎である。80は瓦質土器の火舍である。外面には2本の沈線が巡り、内面には細かい刷毛目調整が残る。81は土師質土器の鍋で、外面には多量の煤が付着する。内面には刷毛目調整を施す。82は瓦質の丸瓦である。

SK2057 (Fig.13) II区東側で検出した土坑である。平面プランは長方形を呈し、長辺2.3m、短辺1.35m、深さ0.5mを測る。壁面は大きく傾き、断面は逆台形を呈する。覆土は灰褐色土である。肥前系陶磁器、土師器が出土し、時期は17世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.13・14) 83～86は回転糸切り底の土師器である。83・84は小皿で、口径7.2cm、8.3cm、器高1.9cm、1.3cmを測る。85・86は壺で、85は口縁が強く外反する。口径11.4cm、12.6cm、器高2.7cm、3.3cmを測る。83・86は底部に板状圧痕を有する。87・88は肥前系陶磁器である。87は染付の碗で、草花文が描かれる。88は陶器の碗で、内面に花文が象眼される。胎土は赤色を呈し、灰緑色の釉がかかる。89は天目碗の底部片である。高台内には墨書が残る。109は唐代の銅鏡、「乾元重寶」(初鑄年: 758年)である。

その他の出土遺物 (Fig.14) 90～95はSE2043出土である。90は回転糸切り底の土師器の小皿であ

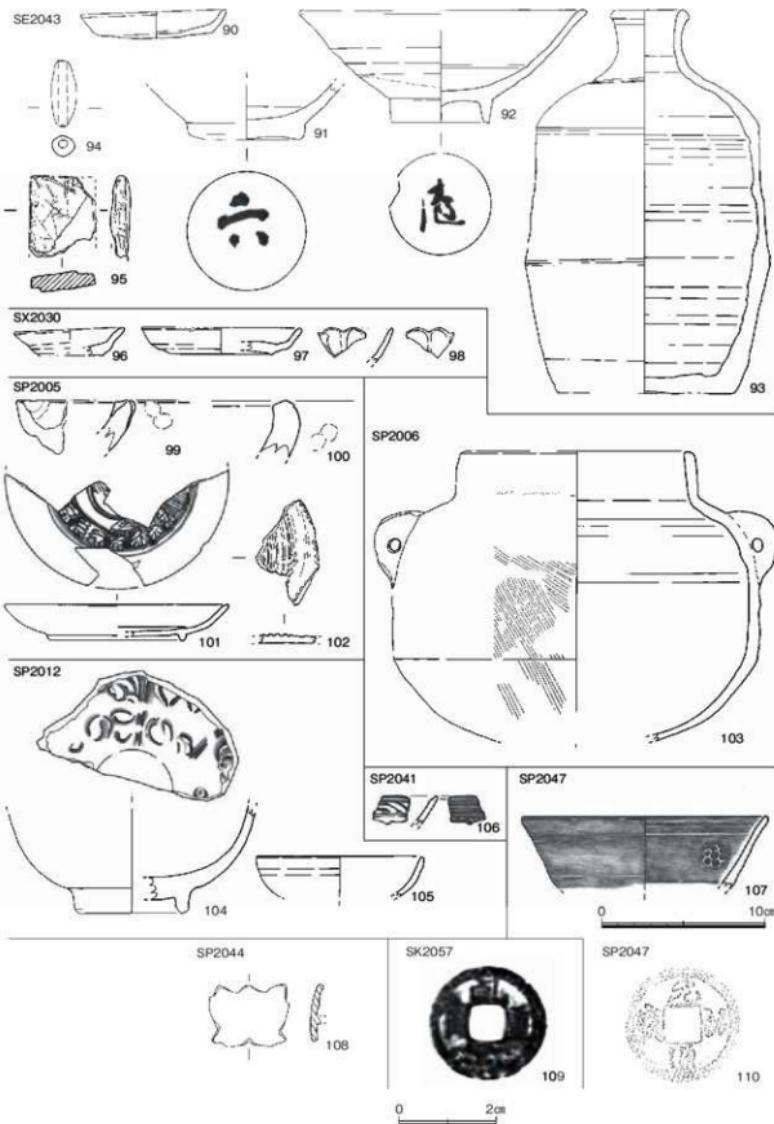


Fig.14 SE2043・SX2030・SK2057・第2面SP出土遺物実測図 (1/3・1/1)

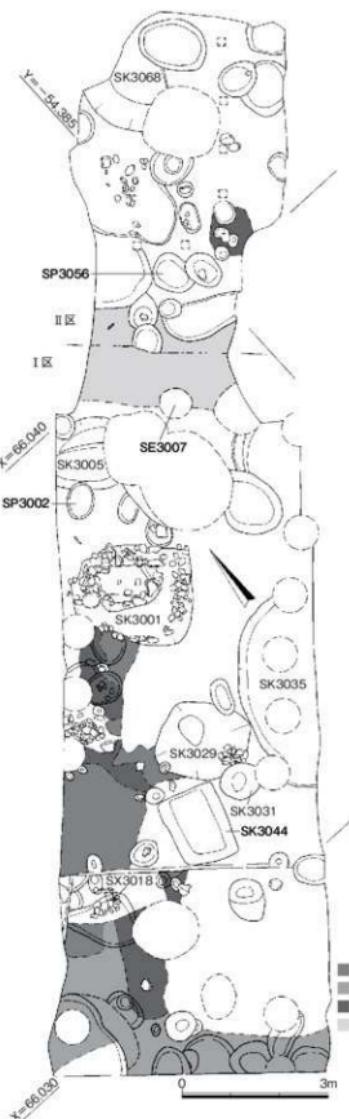
る。口径8.2cm、器高1.5cmを測る。91は白磁碗IV類の底部片で、高台内に「六」の墨書がある。92は白磁碗V類で、高台内に墨書が残る。93は肥前系陶器の瓶である。筒型の体部に小さい口縁が付く。赤色の胎土に黄灰色の釉がかかる。94は土錐で、重さは6.17gを測る。95は滑石の砥石である。砥面には細かい擦痕が残り、溝状の凹みがある。重さは32.27gである。96~98は道路状遺構の可能性があるSX2030出土である。96・97は回転糸切り底の土師器である。96は小皿で、口径6.7cm、器高1.5cmを測る。97は壺で、口径9.8cm、器高1.6cmを測る。98は青磁の菊皿である。99~102はSP2005出土である。99・100はるつぼ片である。99は片口を呈し、100は赤色、緑色の付着物がある。101は染付の皿である。102は瓦質を呈した板状のもので、表面には5本の粘土帯が弧を描き、その周間に幅2mm程の凹みが巡る。裏面にはナデで調整する。103はSP2006出土の瓦質土器の湯釜である。外面には多量の煤が付着する。外面は粗い刷毛目、内面は強い横方向のナデで調整される。104・105はSP2012出土である。104は元末の龍泉窯系青磁碗である。105は白磁皿の口縁部片である。106(SP2041出土)・107(SP2047出土)は朝鮮時代の粉青沙器である。内外面ともに白土で象眼される。108はSP2044出土の銅製の飾り金具である。裏面中央に鉄の痕跡がある。110はSP2047出土の北宋代の銅錢、「元祐通寶」(初鑄年:1093年)である。

3) 第3面の調査 (Fig.15 Ph.21~23)

第2面の整地層と焼土層を30cm程剥ぐと、I区中央付近で、新たな遺構を検出した。また、西端では、40cm(標高4.95m)程剥いた段階で、新たな焼土層とやや縦まりのない整地層が広がったため、遺構面とした。整地層混入の層は厚さ15cmと厚く、焼土面はこの北側と西側に広がる。覆土に焼土を混入する柱穴も見られる。この整地・焼土層はSK3044付近で、一旦途絶えるが、再びSK3001付近まで同じ高さで焼土層が広がる。焼土層の間には、オリーブ灰色粘質土がブロック状に混入する。II区では南側にオリーブ灰色粘質土は一部みられるが、整地層・焼土層は確認できなかったため、標高5.0mを測る灰色土を遺構面とした。I区の焼土層、II区の灰色粘質土からはともに白磁(IX類)、龍泉窯系青磁が出土し、粘土塊も多く出土した。検出した遺構は近世の井戸1基、溝2条、石積み遺構1基、土坑13基、柱穴である。また、この面でもI区とII区の境に道路状遺構を確認した。II区では道路状遺構の面で、SDやSPも検出されたが、いずれも浅く、道路状遺構の堆積土を掘削した可能性が大きい。道路状遺構は、ほぼ第2面と同規模であった。この面で小刀が1本出土した。また、柱穴の底や遺構面からは根石と思われる石も出土するが、建物を見いだすことはできなかつた。第3面の主要な時期は13~16世紀であり、一部近世が残る。

SK3001 (Fig.16 Ph.24・25) I区中央部分で検出した石積み遺構である。北西側はコンクリート杭に一部壊される。遺構検出面での平面プランは北側が一部、削平を受けるが、本来は長方形であったと思われる。長辺2.45m、短辺2.0mを測り、床面にさらに長方形の掘り込みをもち、2段掘りを呈している。テラスの幅は均一でなく、40~60cmと北東側が最も狭く、北西側が広くなっている。一段目のテラスまでの深さは10~15cmを測る。このテラス上からは拳大の川原石が検出されたが、乱雑に置かれていた。中央部分の掘り込みの平面プランは隅丸方形を呈し、長辺1.65m、短辺1.05m、高さ10cmを測る。西側以外の3壁には頭大の石が並べられる。西側は石が置かれていらないが、かわりに青灰色粘土で壁を構築しており、石と粘土で隅丸方形を成している。さらに中央部分は船底状に10cm程窪んでいる。西側壁面の役割を果たしている青灰色粘土はテラスの床面にも一部見られる。肥前系陶器、瓦質土器の火舎、黒の墓石、るつぼが出土し、時期は18世紀前半と思われる。明代の白磁が混入する。

出土遺物 (Fig.16) 111は回転糸切り底の土師器の壺である。口径9.0cm、器高1.6cmを測る。112



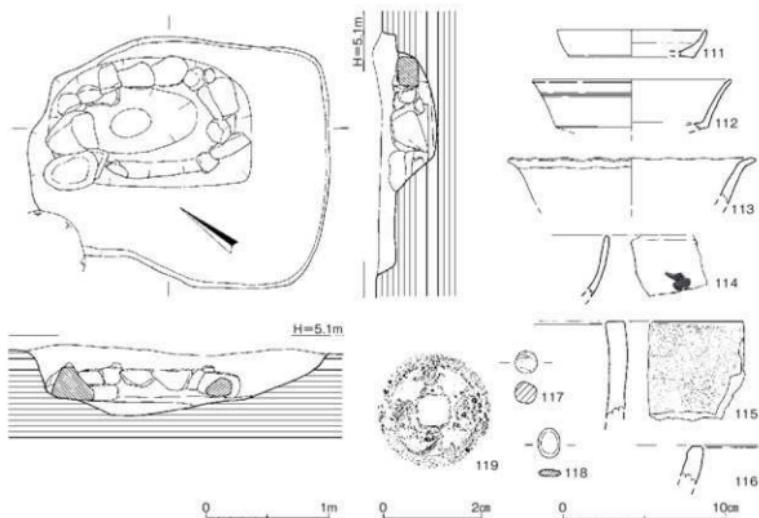


Fig.16 SK3001実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/1)



Ph.24 SK3001小礫検出状況 (北西から)



Ph.25 SK3001最下層検出状況 (北西から)

は明代の枢府系の白磁の壺である。高台付壺で、口縁部は外反し、体部外面上位に2本の沈線が巡る。113・114は肥前系陶磁器で、113は白磁の碗、114は染付碗である。115は火舍で、外面に花文がスタンプされる。116はるつ片である。117は鉄砲の玉で、素材は真鍮である。約1.4cmの球形で、滑らかに仕上げられる。重さは12.43gである。118は黒の碁石で、4mmと薄く、重さは1.64gを量る。119は北宋代の銅錢、「景德元寶」(初鋤年: 1005年)である。

SK3005 (Fig.17 Ph.26) I区東側で検出した。北西側は調査区外へ延び、南東側はSE2036、西側はSP3002に削平される。平面プランは揃円形を呈すると思われ、幅1.48m、現存長1.2mである。北東側にテラスをもち、底面は平坦である。深さは80cmを測る。覆土は灰褐色土に焼土・炭化物がブロック状に含まれる。大量の土師器の皿・壺、白磁(IX類)、龍泉窯系青磁、粘板岩の砥石、滑石片、鉄釘、銅錢1枚(不明)が出土する。他に肥前系陶磁器も出土する。

出土遺物 (Fig.17 Ph.27) 120~129は回転糸切り底の土師器である。120・122~128は底部に板状圧痕を有する。120~126は小皿で、口径7.7~8.2cm、器高1.3~1.5cmを測る。127~129は壺で、口径11.2~11.6cm、器

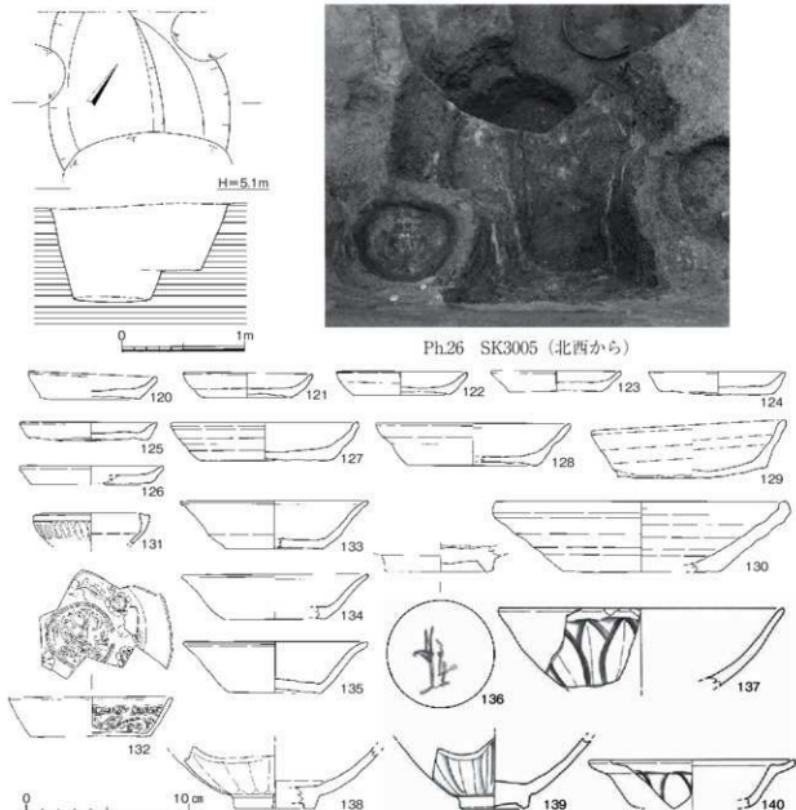


Fig.17 SK3005実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

高2.3~3.6cmを測る。130は瓦質土器の壊である。回転糸切り底を有し、体部は強い回転ナデで調整する。131・132は青白磁で、型押しによる施文を行う。131は合子の身で、立ち上がりの内外面は釉を削りとり、底部付近は露胎である。132は口禿げの皿である。133~136は白磁である。133~135は皿IX - 1 d類、136は碗Ⅸ類で、高台内に墨書がある。137~140は龍泉窯系青磁である。137・138は碗II - b類、139は皿III - 2 C類で、高台疊付の平坦面が広く角高台である。140は壊III - 4類である。

Ph.27 SK3005出土遺物

SK3031 (Fig.18) I区中央部分で検出した遺構である。南東側は

コンクリート杭に削平されるが、平面プランは直径0.75mを測る円形を呈する。床面は平坦で、深さは40cmを測る。覆土は灰褐色土である。明代の染付、朝鮮時代の粉青沙器、肥前系陶器の擂鉢、丸

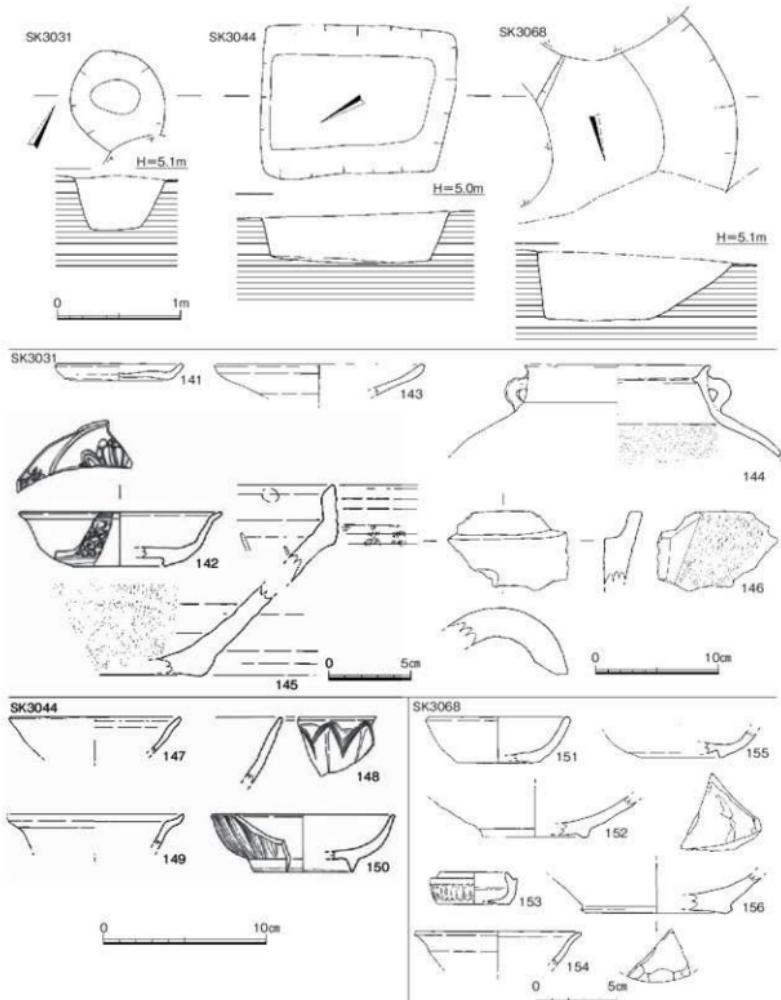


Fig.18 SK3031・3044・3068実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3・1/4)
瓦、土師器が出土し、時期は16世紀後半と思われる。

出土遺物(Fig.18) 141は回転糸切り底の土師器である。口径7.5cm、器高1.1cmを測る。142は現代の染付で、基盤底の底部に端反りの口縁部を有する。143は陶器の皿で、口縁部は内湾気味に開く。胎土は砂粒を多く含み、両面ともに化粧土を施す。144は陶器の壺の口縁部片である。145は肥前系陶磁器の擂鉢である。一単位は7本以上のすり目を有し、見込み際まで入る。146は丸瓦である。

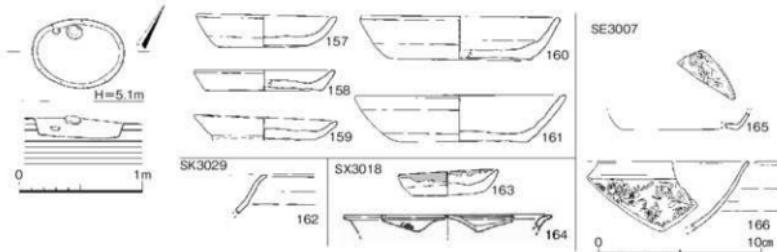


Fig.19 SP3002実測図 (1/40) およびSP3002・SE3007・SK3029・SX3018出土遺物実測図 (1/3)



Ph.28 SP3002 (北西から)

出土遺物 (Fig.18) 151は回転糸切り底の土師器の小皿である。身は深く、口径8.9cm、器高2.8cmを測る。152は瓦器碗の底部片である。低い高台を有し、内面は研磨調整される。153は青白磁の合子の身で、型押しによる施文を行う。立ち上がりの内面は釉を削りとり、底部付近は露胎である。154は白磁碗Ⅹ類、155は龍泉窯系青磁の盤で、底部は基筒底を呈する。156は越州窯系青磁碗Ⅱ-2類である。

SP3002 (Fig.19 Ph.28) I 区東側で検出した遺構である。平面プランは楕円形を呈し、長辺0.75m、短辺0.55m、深さ15cmを測る。覆土は灰色土である。土師器の皿・壺、白磁IV類、青磁小片、鉄釘が出土し、時期は13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.19) 157-161は回転糸切り底の土師器である。胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、全て橙色を呈する。157-159は小皿で、口径8.3~8.6cm、器高は1.2~2.0cmを測る。159は底部に板状圧痕を有する。160・161は壺で、口径11.8cm、12.8cm、器高2.6cm、2.9cmを測る。

その他の出土遺物 (Fig.19) 162はSK3029出土の綠釉陶器の口縁部片で、口縁部は緩やかに外反する。胎土は精良で、灰色を呈する。明緑色の釉がかかり、斑点状に明橙色を発する。163・164は石が群集するSX3018出土である。163は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径6.0cm、器高1.6cmを測り、口縁部には煤が付着する。灯明皿として使用される。164は外反する口縁部をもつ染付の碗である。165・166はSE3007出土の青白磁で、型押しによる施文を行う。165は皿の底部片、166は口禿げの碗の口縁部片である。



Fig.20 第4面全体図 (1/100)

4) 第4面の調査 (Fig.20 Ph.29~34)

第3面を30cm程掘削した標高4.6m付近で、I区中央部分に灰色粘質土を検出したため、この面を第4面として調査した。また、部分的に褐色砂の広がりがみられた。II区ではほぼ同じ標高で、オリーブ灰色粘土の集中を北側部分で検出した。また、II区でもI区と同様の褐色砂がみられる。遺構面には、SX4054・SX4080等の石が集中する箇所を検出した。これらの遺構からは回転糸切り底をもつ土師器や白磁碗Ⅸ類、龍泉窯系青磁が出土することから13世紀後半のものと思われる。また、I区中央付近では、根石と思われる扁平な石を検出した。検出した遺構は溝2条、土坑7基、柱穴である。第4面の主要な時期は13世紀後半から14世紀前半である。道路状遺構は上面に引き続き検出した。路面上のI区では小ピットを砂上で確認し、掘削したが、しみ状のものが多く、柱穴ではないと思われる。また、II区北側にオリーブ灰色粘土(36層)(Fig.5 土層③)で厚さ5cm程、整地(SX4068)がされていた。東側は新しい遺構で削平されているため、現存で幅1.7mを測る。この層を剥ぐとI区と同じ砂の層が広がる。この砂層は土層③から上層の道路状遺構よりも1mほど東側に延びていた。

SD4075 (Fig.20) II区北側で検出した細長い溝である。幅は25cmを測り、深さは15cm、方位はN-60°-Eである。この溝の西側にSD4073が走る。方位はやや北側に振っている(N-54°-E)が、幅20cm、深さ11cmを測る。本来は同じ溝で、中間にH鋼が入ったために乱された可能性がある。SD4073からは土師器の小片しか出土しておらず、時期は不明である。覆土は灰色砂質土である。出土遺物は白磁碗Ⅸ類、土師器、中国陶器、鉄釘、白の碁石が出土する。土坑の時期は13世紀後半と考えられる。

出土遺物 (Fig.21) 167・168は回転糸切り底の土師器である。167は小皿、168は壺で、口径7.8cm、11.6cm、器高1.1cm、2.8cmを測る。細かい金雲母、赤褐色粒を含み、橙色を呈する。169は白磁碗Ⅸ類の口縁部片である。170は白の碁石で、長さ1.2cm、幅0.8cm、厚さ0.7cmを測り、重さは2.35gである。

SK4014 (Fig.21) I区中央部北側で検出した土坑で、北西側は調査区外へと延びる。深さは25cmを測り、覆土は灰褐色土を呈する。土師器、龍泉窯系青磁、中国陶器、鉄製の刀子、粘土塊が出土し、遺構の時期は13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.21) 171は回転糸切り底の土師器の小皿



Ph.29 第4面Ⅰ区全景（南西から）



Ph.30 第4面Ⅰ区中央（南東から）



Ph.31 第4面Ⅰ区東側（南から）



Ph.32 第4面Ⅱ区西側（南東から）



Ph.33 第4面Ⅱ区全景（北東から）



Ph.34 第4面Ⅱ区西側（南東から）

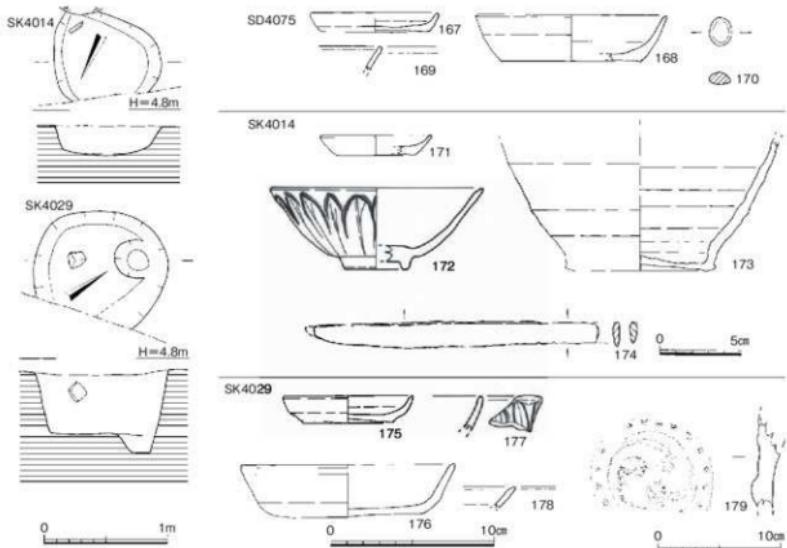


Fig.21 SK4014・4029実測図 (1/40) およびSD4075・SK4014・4029出土遺物実測図 (1/3・1/4)

である。口径は6.6cm、器高1.2cmを測り、底部端部には指頭痕が残る。胎土は黒色粒、赤褐色粒を含み、明橙色を呈する。172は龍泉窯系青磁小碗II-b類である。173は無釉陶器の底部片である。胎土は白色砂粒が多く含み灰緑色を呈する。174は鉄製の刀子で、基部と刃部の先端を欠損する。木質は確認できない。

SK4029 (Fig.21) I区西側で検出し、南側は調査区外へと延びる。平面プランは円形を呈し、直径1.06mを測る。深さは50cmを測り、床面北側にピットを有する。床面ピットは直径約30cm、深さは10cmである。覆土は灰色土で、拳大の石が1石投入されていた。龍泉窯系青磁、白磁Ⅸ類、土師器、瓦が出土する。時期は13世紀後半と考えられる。

出土遺物 (Fig.21) 175・176は回転糸切り底の土師器で、175は底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を多量に含み、橙色を呈する。175は小皿で、口径7.9cm、器高1.6cmを測り、体部中位で屈曲し、口縁部へと至る。176は坏で、口径13.1cm、器高3.3cmを測る。177は龍泉窯系青磁小碗II-b類の口縁部である。178は白磁Ⅸ類である。179は軒丸瓦で、三巴文の軒丸瓦で、太目の頭部を有する巴文は界線に接する。

SK4055 (Fig.22 Ph.35) I区西側で検出した土坑である。長径47cm、短径36cmの楕円形を呈する深さ5cmの掘り込みに拳大の石を敷いたものである。根石になるような石はみられない。回転糸切り底をもつ土師器の小片が出土する。

SK4061 (Fig.22 Ph.36) I区西側で検出した土坑で、東側を一部ピットに削平される。約1m東側にSK4055が位置する。SK4061はSK4055よりやや大きく、長径68cm、短径52cmを測る楕円形プランの掘り込みである。深さは8cmを測り、やや南側寄りに石が集中して詰められる。明代の染付、白磁小片、青白磁片が出土する。時期は15世紀後半から16世紀後半と思われる。

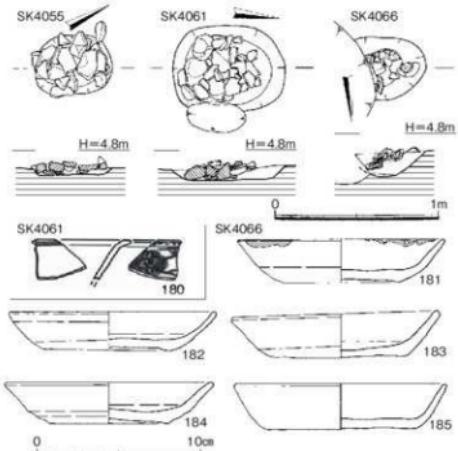
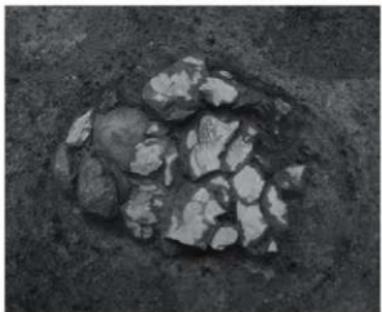


Fig.22 SK4055-4061・4066実測図(1/30)および出土遺物実測図(1/3)



Ph.35 SK4055 (西から)



Ph.36 SK4061 (東から)

出土遺物 (Fig.22) 180は明代の染付皿B群で、端反りの口縁部を有し、口縁部内面に界線が巡る。

SK4066 (Fig.22 Ph.37) II区北側で検出した土坑である。東側はピットに削平される。平面プランは楕円形を呈すると思われ、現長35cm、幅38cm、深さ14cmを測る。内部には扁平な石とともに土師器が投入されていた。他は鉄釘が出土する。陶磁器は1点も出土しない。時期は13世紀後半から14世紀初頭と思われる。

出土遺物 (Fig.22) 181～185は回転糸切り底の土師器の坏である。181・183は底部に板状压痕を有する。口径は12.4～12.8cm、器高23～28cmを測る。181～184の口縁部は底部に比して大きく開く。また、181・184は体部中位で屈曲する。185はやや深く、口縁部は他に比して開きが小さい。181は口縁部内外面に煤が付着した灯明皿である。

SX4080 (Fig.20 Ph.38) II区北側でSX4069の整地層の南側に集中して石を検出した。散乱した状況であり、これに伴う掘り込み等も確認できなかった。周辺から出土した遺物は白磁X類、龍泉窯系青磁、土師器、瓦質土器の鉢、滑石片、鉄釘であった。これらの遺物は14世



Ph.37 SK4066 (東から)

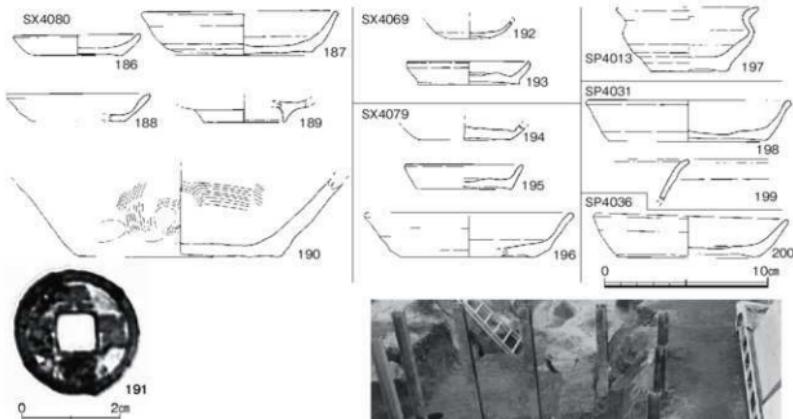


Fig.23 SX4069・4079・4080・第4面
SP出土遺物実測図 (1/3・1/1)

紀初頭のものであり、SX4080はこの頃のものと思われる。

出土遺物 (Fig.23) 186・187は回転糸切り底の土師器である。186は小皿、187は壺で、口径7.6cm、11.7cm、器高2.0cm、26cmを測る。186は底部に板状圧痕を有する。188は白磁皿IX-1a類、189は龍泉窯系青磁碗III類である。190は瓦質土器の鉢で、底部はナデと粗い刷毛目で調整する。内面は刷毛目がわずかに残るが、器面は滑らかであり、よく使用されている。191は北宋代の銅錢、「天聖元寶」(初鋸年: 1023年)である。

SX4069 (Fig.20) II区北側で検出した整地層である。大半は調査区外へと延びる。土層③ (Fig.5) 北壁では101層にあたる。オリーブ灰色粘土が3~5cm程の厚さで堆積し、上面はガチガチに硬化している。小片であるが、土師器、中国陶器が出土する。

出土遺物 (Fig.23) 192は中国陶器の底部片で、底径2.5cmと小型である。回転糸切り底で、内外面は回転ナデで調整される。器壁は0.13cmと薄く、体部は丸みをもって立ち上がる。胎土は粘質を帯びた褐色を呈し、茶褐色の釉がかかる。体部下半から底部は露胎である。193は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径7.3cm、器高1.4cmを測り、胎土に赤褐色粒を含み、橙色を呈する。

SX4079 (Fig.20) II区北側で検出し、整地層SX4069の北東側に広がる焼土層である。厚さは5~7cmで、褐色土に混入する。SX4080の石の底面から現れた。出土遺物は小片が大半であるが、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器、土師器、瓦質土器の鉢、鉄釘とともに粘土塊が大量に出土した。時期は13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.23) 194は白磁皿IX類の底部片である。195・196は回転糸切り底の土師器である。195は小皿、196は壺で、口径7.0cm、12.4cm、器高1.5cm、2.7cmを測る。195は金雲母、196は赤褐色



Ph.38 SX4080 (北東から)

粒を含み、橙色を呈する。

その他の出土遺物 (Fig.23) 197はSP4013出土の陶器の小壺である。回転糸切り底を有し、体部は外反味に立ち上がり、中位で内傾し、口縁端部は強く屈曲する。口径8.6cm、底径4.8cm、器高3.9cmを測る。胎土は金雲母を多く含み、明橙色を呈する。釉は施されていない。198・199はSP4031出土である。198は回転糸切り底の土器の坏で、口径12.3cm、器高2.5cmを測り、胎土に金雲母を含み、明橙色を呈する。199は白磁碗IX類の口縁部片である。口縁部は外反する。200はSP4036出土の回転糸切り底の土器の坏で、口径11.7cm、器高2.4cmを測り、口縁部はやや外側に開く。胎土に金雲母を含み、色調は淡橙色を呈する。

5) 第5面の調査 (Fig.24 Ph.39~44)

第4面を10cm剥いだ段階で、I区中央部に焼土層の広がりとオリーブ灰色粘土の整地層を確認したため、標高4.5mを第5面として調査を行った。II区でもほぼ同じ高さの標高4.5m付近で、整地層と焼土層が見られ、ほぼ連続する面と思われる。I区西側は中央部分と全く違った様相を呈しており、ヘドロ状の黒色土が堆積していた。第8面で幾つかのピットが確認できることから、生活の場として活用しようと試みた土地であったが、地盤は安定していなかったと思われる。第5面では遺構を確認することができなかった。これとは対照的にI区東側では堅緻な整地層が築かれている。土層② (Fig.5) 北壁では71層がこれにある。整地層は5cm程の厚さで、東側は7cm程高くなり、その下には焼土層(72層)が堆積する。この一部が第5面の遺構面で、整地層の北側と東側に現れる。焼土層は褐色土に3~5cm大の焼土が多く混入したものであり、締まりがない。一度火事等で消失してしまったが、ここで生活を営むために71層の整地を行ったと考えられる。遺物は白磁IX類、龍泉窯系青磁が主体であり、整地層と焼土層に大きな時期差は認められない。この整地層は、北側部分を新しい遺構に削平され、幅2m程で途切れる。ここでは灰褐色粘質土が堆積する。II区でも標高4.55mで整地層 (Fig.5 土層③) を確認した。厚く堆積しており、3層に分かれる。上層は黄緑色粘土(111層)、中層はにぶい緑色粘土(112層)、下層は灰緑色粘土(113層)である。長さは現存で3.2mを測る。北側は調査区外へと延び、東側は

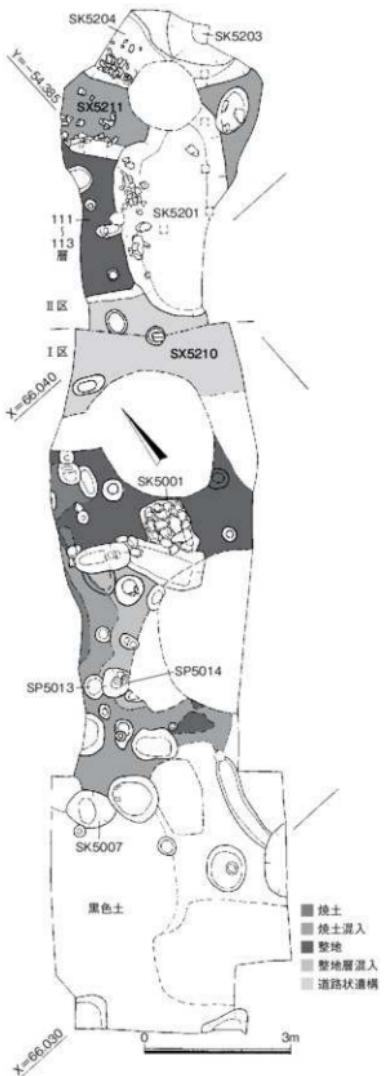


Fig.24 第5面全体図 (1/100)



Ph.39 第5面Ⅰ区全景（南西から）



Ph.40 第5面Ⅰ区中央（北西から）



Ph.41 第5面Ⅰ区中央貼床除去後（南東から）



Ph.42 第5面Ⅰ区焼土除去後（南から）



Ph.43 第5面Ⅰ区焼土除去後（南西から）



Ph.44 第5面Ⅱ区全景（南東から）

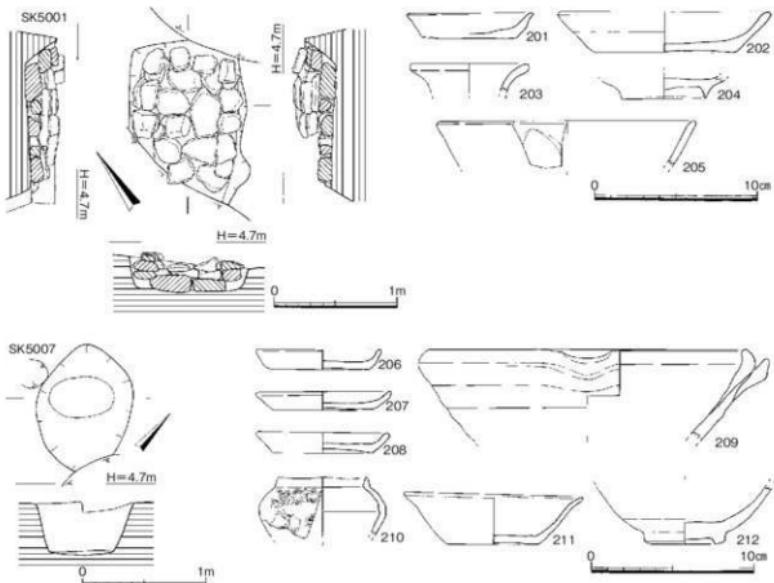


Fig.25 SK5001・5007実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.45 SK5001（南西から）



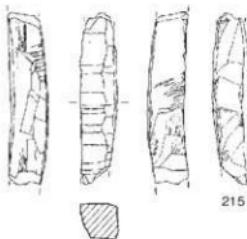
Ph.46 SK5001完掘状況（南西から）

SK5211、南側はSK5201に削平を受けており、どの程度の広がりをもっていたかは不明である。この整地と整地の間は幅3m程の空間があり、ほとんど遺構も確認できない。褐色粘土・褐色シルト・褐色砂・炭化物が厚さ1～5cmの細かさで堆積しており、この部分は道路状遺構であると思われる。検出した遺構は溝2条、土坑6基、柱穴である。第5面の主要な時期は13世紀から14世紀前半である。

SK5001 (Fig.25 Ph.45・46) I区中央部に位置し、南西側は溝に削平される。現存長1.35m、幅0.95m、深さ30cmの掘り込みの中に構築された石積み遺構である。基底面には幅0.9m、現存長1.15mの平面プランが長方形になるように、大振りの扁平な石を並べ、掘り方を基底面の石と同じ高さま



Ph.47 SK5201 (南東から)



-○-

216

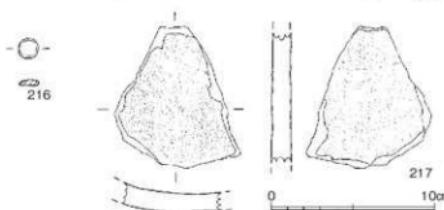
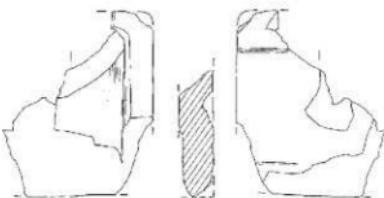
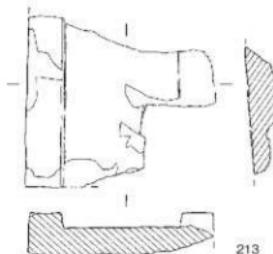
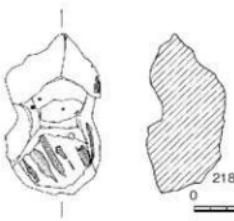


Fig.26 SK5201出土遺物実測図① (1/3・1/1)

で灰色土で埋めている。その後、基底面の外側に、壁のように石を積む。遺存状況が良好なところで3段、高さ30cmが残る。扁平な石を積んでいるため、壁面はやや雑な面となっている。土師器、龍泉窯系青磁、白磁碗V類の小片、瓦質土器の鉢、鉄釘等が出土する。時期は13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.25) 201・202は回転糸切り底の土師器である。201は小皿、202は壺で、口径7.7cm、13.0cm、器高1.6cm、2.5cmを測る。胎土は細かい金雲母を多く含み、にぶい橙色を呈する。203~205は龍泉窯系青磁である。203は壺の口縁部片と思われ、内外面に厚く釉がかかる。204は碗Ⅲ類の底部片で、疊付のみ露胎で、赤く発色する。205は碗Ⅱ-a類で、橙色の胎土に黄色味を帯びた釉がかかる。連弁は片彫りで描かれる。

SK5007 (Fig25) I区東側で検出した。南側は別の土坑に切られる。平面プランは梢円形を呈し、長径1.1m、短径0.78m、深さは40cmを測る。覆土は灰褐色土である。土師器、白磁皿Ⅸ類、須恵質土器の鉢、鉄釘、滑石片2点が出土する。出土遺物から13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig25) 206~208は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径は7.6~8.3cm、器高は1.1~1.2cmを測り、206は底部に板状圧痕を有する。206は口縁部が上方へ延び、他は外に開く。色調は206が明橙色、他は橙色を呈する。209は須恵質土器の片口の鉢である。胎土に黒色砂粒を含む。210は青白磁の袋合子で、型押しによる施文を行う。211は白磁皿Ⅸ-c類、212は龍泉窯系青磁小碗Ⅳイ類である。

SK5201 (Fig24 Ph.47) II区南側で検出した。南側は調査区外へ延び、東側はSE2043に削平される。平面プランはやや歪な隅丸長方形を呈し、長辺は現存で4.35m、幅は2.35m、深さは40cmを測る。覆土はやや粘質のある灰色土で炭化物を多量に含む。拳大から頭大の石とともに、大量の土師器と龍泉窯系青磁、白磁、青白磁とともに、瓦質土器、土師質土器、平瓦、石製硯、滑石製品、碁石、銅錢12枚、鉄釘、鉄塊系遺物、鉄滓、炉壁が出土する。SK7214-SK7215の窪地を廃棄場として利用したと思われる。時期は14世紀前半である。

出土遺物 (Fig26-27) 213・214は赤間石を用いた硯である。213は砥面が水平、214は緩やかな凸状を呈する。215は滑石石鍋の転用品である。216は黒の碁石で、丁寧に研磨され光沢を帯びる。直径1.6cm、厚さは0.45cmを測り、重さは1.94gである。217は平瓦で、凸面は繩目叩きを行った後、部分的にナデ、内面は布目が残る。218は銅滓で、表面は土砂の付着が著しく、部分的に緑青をふく。形状は椀状を呈しており、長さ9.8cm、幅5.8cm、厚さ4.85cmを測り、重さは221.49gである。木質、炭化物、土器をかんでいる。他にも大型の銅滓1点と小型の滓が出土する。219・220は銅錢である。219は唐代の銅錢、「開(元)通(寶)」(初鑄年:621年)である。220は、「□符□□」と遺存状況が悪い。銅錢は他にも10枚出土するが、判読できない。221~235は回転糸切り底の土師器で、222・228・229・231・233・234は底部に板状圧痕を有する。色調は229が明橙色を呈するが、他は橙色である。221~227は小皿で、221~226の口縁部は体部中位で屈曲するが、227は底部から口縁部へと直線的に開く。口径は7.8~8.5cm、1.1~1.4cmを測る。228~235は壺で、228~233は内湾気味に立ち上がるが、234・235は底径に比して口縁部が大きく、底部から直線的に開く。口径は11.3~12.8cm、器高2.4~3.6cmを測る。236・237は回転糸切り底をもつ高台付きの小皿と壺である。236は高台部が欠損し、壺部は口径7.5cm、器高3.0cmと深い。237は口径15.9cm、高台径6.0cm、器高7.3cmを測る。238・239は青白磁の底部片で、型押しによる施文を行う。238の高台内は露胎で赤く発色し、239は全面施釉される。240~243は白磁である。240は合子の蓋で、型押しによる施文を行う。241・242は白磁Ⅸ類、243は明代の白磁で、口縁部を体部からそのまま引き出し、体部は丸みをもつ。244~249は龍泉窯系青磁である。244は碗Ⅲ-1b類、245は碗Ⅱ-b類、246は碗Ⅱ-c類である。247は壺で、外面上位に稜線が入り、内面は劃花文が施される。248は壺の口縁部片で、白色の胎土に青緑色の釉がかかる。249は小壺の底部片である。疊付部の釉を削り取り、赤く発色する。灰色の胎土にかすんだ緑色釉がかかる。250は瀬戸美濃焼の鉢皿である。251・252は施釉陶器の底部片である。251は灰色の胎土に白色釉、252は灰色の胎土に茶褐色の釉がかかる。253は須恵質土器の鉢、254は瓦質土器の鉢、255は瓦質土器の捕鉢で、3条のすり目が見込み際まで入る。256・257は瓦質の火舍である。258は刀子で、基部と刃部の先端部がわずかに欠損する。基部には木質が付着し、目釘孔が残る。

SK5203 (Fig28 Ph.48) II区の東端に位置し、大半は調査区外へ延びる。深さは90cm以上あり、おそらく井戸と思われるが、完掘できなかった。土師器、白磁、龍泉窯系青磁、鉄釘、滑石小片

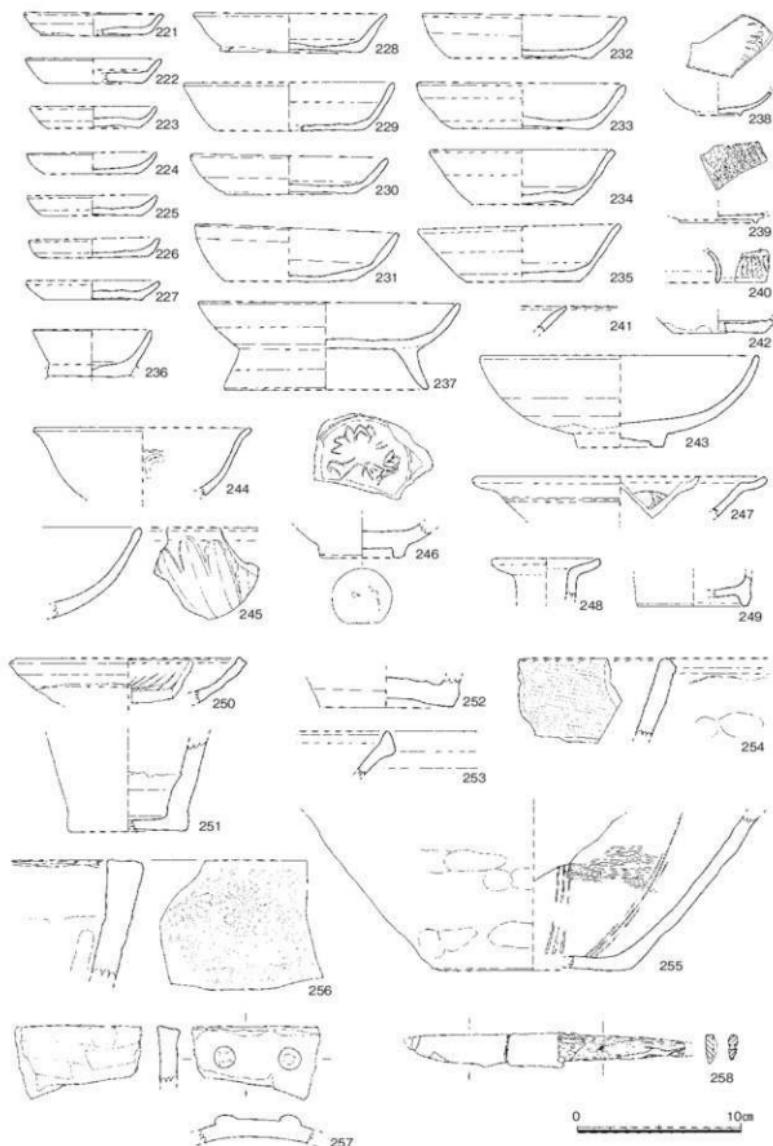


Fig.27 SK5201出土遺物実測図② (1/3)

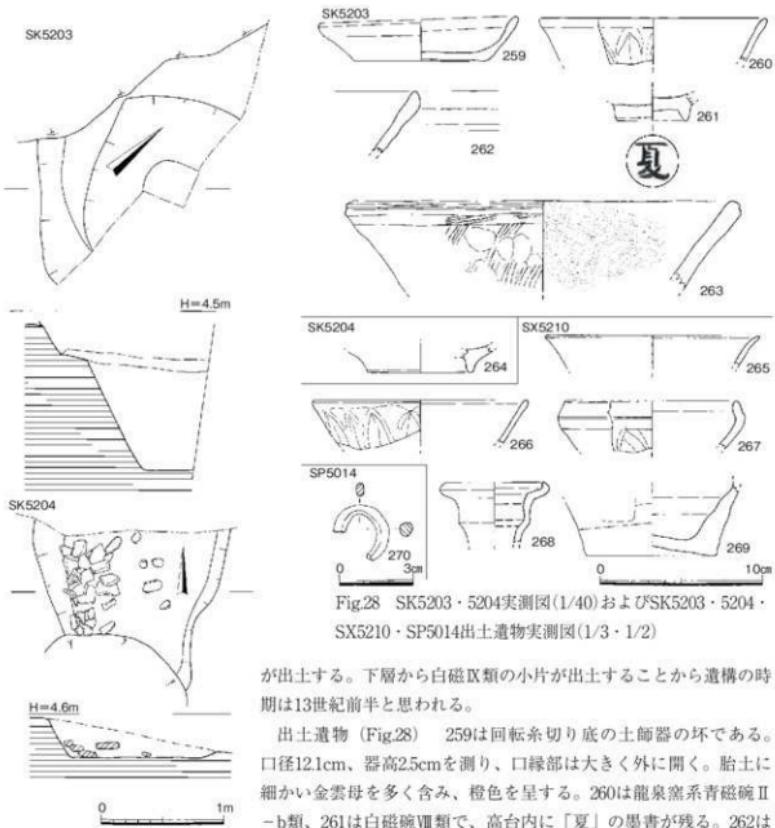


Fig.28 SK5203・5204実測図(1/40)およびSK5203・5204・SX5210・SP5014出土物実測図(1/3・1/2)

が出土する。下層から白磁Ⅸ類の小片が出土することから造構の時期は13世紀前半と思われる。

出土遺物 (Fig.28) 259は回転糸切り底の土器の坏である。口径12.1cm、器高2.5cmを測り、口縁部は大きく外に開く。胎土に細かい金雲母を多く含み、橙色を呈する。260は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類、261は白磁碗Ⅷ類で、高台内に「夏」の墨書きが残る。262は須恵質土器の鉢で、ナデで調整される。263は瓦質土器の鉢で、口縁端部には1条の凹線が巡り、外面は刷毛目調整の後、部分的にナデを施す。

SK5204 (Fig.28 Ph.49) II区東側で検出した土坑である。南側はSE2043に削平され、大半は調査区外へと延びる。現況で、幅1.6m、長さ13m、最深40cmを測る。土器器小片、龍泉窯系青磁、白磁小片、鉄釘、粘板岩製砥石、滑石小片が出土する。時期は13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.28) 264は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類の底部片である。全面施釉の後、疊付部の釉を搔き取る。露胎部分は赤く発色する。

SX5210 (Fig.24 Ph.50・51) I区とII区の調査区の境で検出した道路状造構である。道路状造構は土層① (Fig.4) では2面から6面まで存続する。標高4.3mから5.2mまで、約1mと厚く堆積する。黄褐色土、橙色土、シルト、粘質土、砂と炭化物層が細かな互層となっている。東側も西側も後世の造構に削平されており、道路幅、方位は不明である。2面から4面までは削平を受けていることにより幅2mほどしか遺存しないが、比較的造構の少ない箇所がある。4面から5面にかけては東側



Ph.48 SK5203（南東から）



Ph.49 SK5204（南から）



Ph.50 SX5210（南西から）



Ph.51 SX5210（北西から）

の道路が後世の削平を受けておらず、上面より東側に約1mほど長く幅3mほどであったことが土層③（Fig.5）からうかがえる。5面ではSX5210の道路状遺構を確認した。幅は約3mあり、その東側と西側はオリーブ灰色粘土で整地が行なわれている。また、側溝などの施設はSK3005が該当する可能性もあるが、道路状遺構に連続するような施設は確認できなかった。第5面の道路の時期は13世紀後半である。道路状遺構は13世紀後半から近世にかけて存続する。

出土遺物（Fig.28） 265は白磁碗Ⅸ類、266は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、267は龍泉窯系青磁束口碗Ⅱ類である。268・269は施釉陶器で、268は灰黒色の胎土に黒色の釉、269は灰色の胎土に茶褐色の釉がかかる。

その他の出土遺物（Fig.28） 270はSP5014出土の銅製の吊り金具で、一部欠損する。直径約3.4cmの円形を呈すると思われる。断面は直径8mmの円形を呈するが、上部の吊り部にあたる箇所は梢円形を呈する。

6) 第6面の調査 (Fig.29 Ph.52-53)

第5面を10~20cm剥いだ段階で、I区の中央部にオリーブ灰色粘土の整地層(82層)(Fig.5 土層②)を確認したため、標高4.4mを遺構面とした。この整地層(5~10cm)を剥ぐと褐色砂が調査区全体に広がり、新しく柱穴を確認した。また、第6面の西側は第5面同様、しまりのない黒色土が堆積し、遺構は確認できなかったため、調査対象から外した。I区とII区の境の道路状遺構は第6面でも確認できる。検出した遺構は溝1条とピットである。ピットの中には根石をもつものもみられた。第6面の主要な時期は13世紀後半である。

SD6209 (Fig.30 Ph.54) II区北側に位置する。上面のSK5204とはほぼ同位置であるが、新たな石が検出でき、間層も挟むことから、僅かであるが、時期差があるものと思われる。最深で約40cmを測る。土師器、瓦質土器の鉢、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器、鉄釘が出土し、時期は13世紀後半と思われる。

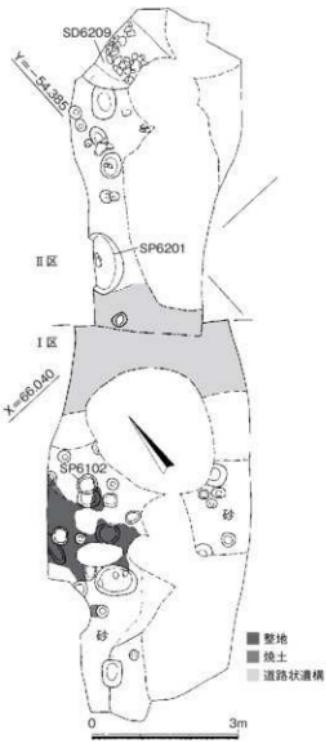


Fig.29 第6面全体図 (1/100)



Ph.52 第6面 I区全景 (南から)



Ph.53 第6面 II区全景 (北東から)

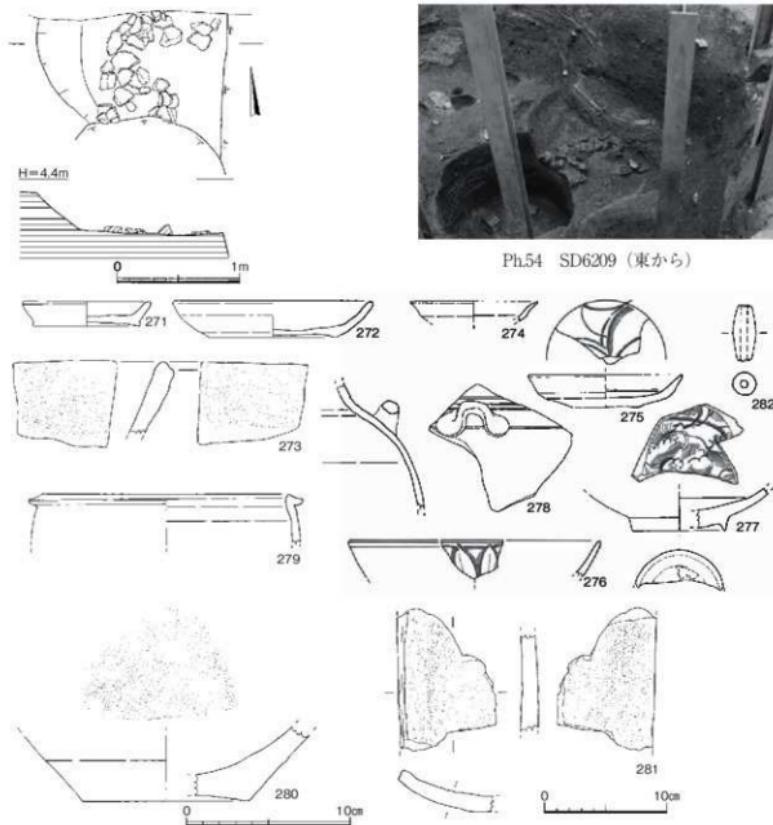


Fig.30 SD6209実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

出土遺物（Fig.30） 271・272は回転糸切り底の土師器で、胎土に細かい金雲母が多く含み、橙色を呈する。271は小皿、272は壺で、口径7.6cm、12.0cm、器高15cm、22cmを測る。273は瓦質土器の鉢で、口縁端部を凹状に窪ませる。外面は横方向の刷毛目その後、指ナデ、内面は横方向、斜方向の細かい刷毛目を施す。274は白磁皿Ⅸ類、275は白磁皿Ⅷ-2c類である。276は龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2c類である。277は青白磁の碗で、見込みにはヘラ描きの文様が施される。高台内は露胎である。278・279は施釉陶器で、278は四耳壺の体部片で、灰色の胎土に緑色の釉がかかる。279は口縁部片で、橙色の胎土に灰緑色の釉がかかる。280は陶器の擂鉢である。内面は全面にすり目が施され、よく研磨される。281は平瓦で、凸面は繩目叩き、凹面には布目が残る。282は完形の土錐で、重さは6.01gを量る。

SP6102 (Fig.31) I区中央に位置する。平面プランは直径約42cmの円形を呈し、深さは13cmを

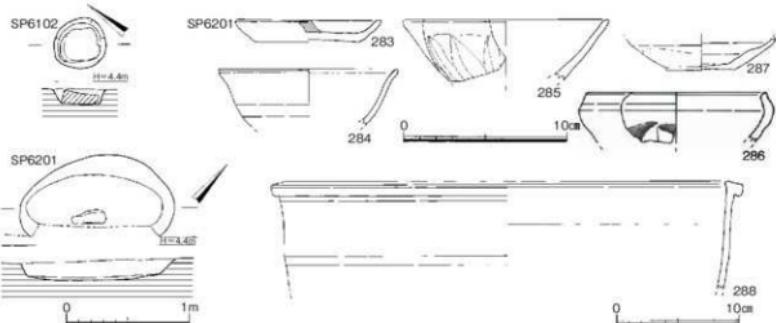


Fig.31 SP6102・SP6201実測図 (1/40) および第6面SP出土遺物実測図 (1/3・1/4)
測る。底面には扁平な石が置かれる。根石と思われる。土師器、黒色土器B類、陶器が出土する。

SP6201 (Fig.31) II区の西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.25m、幅0.6m以上を測る。深さは15cmを測り、土師器、白磁、龍泉窯系青磁、鉄滓1点が出土し、時期は13世紀後半である。

出土遺物 (Fig.31) 283は回転糸切り底の土師器の小皿である。灯明皿として使用されており、口縁部には煤が付着する。口径8.8cm、器高1.4cmを測り、底部に細かい板状圧痕を有する。284は白磁碗II類、285は龍泉窯系青磁碗II類、286は東口碗II類である。287は陶器の皿で、小豆色の胎土に茶褐色の釉が体部下位付近までかかる。288は陶器の口縁部片で、砂粒を多く含んだ胎土に黄灰色の釉がかかる。

7) 第7面の調査 (Fig.32 Ph.55~57)

第6面を10cm程掘削した標高4.3m付近で、I区中央部分に焼土層を検出した。この面で検出したピットの覆土は焼土が多く混入した灰褐色土である。また、I区とII区の境界に位置した道路状遺構はこの面では存在しない。かわりにSK7035の遺構が位置する。II区は4.2mのにぶい褐色土層を遺構面とした。検出した遺構は井戸1基、土坑4基、柱穴である。柱穴の中には根石をもつものがみられる。第7面の遺構の時期は大半が13世紀中頃から後半である。

SK7014 (Fig.33) I区西側で検出した土坑である。南東側は大半が調査区外へと延びる。現存で、南北方向は長さ3.25mを測る。南側は2段掘りとなっており、基底面までの深さは最も深いところで、43cmを測る。覆土は灰褐色土である。出土遺物は土師器、白磁II類、龍泉窯系青磁、瓦質土器、鉄釘が多数出土する。土坑の時期は13世紀後半と考えられる。

出土遺物 (Fig.33) 289は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径8.6cm、器高1.1cmを測り、胎土は金雲母、赤褐色粒を含んだ明橙色を呈する。290は白磁碗II類の口縁部片、291は白磁の壺である。底部は内部を抉り、低い高台状にする。壺付は露胎で、高台内は施釉されず、赤褐色に発色する。口縁部は底部から内清気味に立ち上げて、端部は丸くおさめる。細かい黑色粒を含んだ灰色の胎土にやや緑味がかった白色釉を施す。292は龍泉窯系青磁碗II-b類で、青緑色の釉がかかる。293は龍泉窯系青磁碗II-c類で、見込みには草花文を描き、淡く青みがかった釉が高台付近まで施釉される。294は白磁の合子の蓋で、灰白色の胎土に黄緑色釉がかかる。295は施釉陶器の壺の口縁部片で、黒色粒、白色砂粒を多く含んだ灰色の胎土に灰白色の釉がかかる。口縁部中位から内面にかけては露胎である。

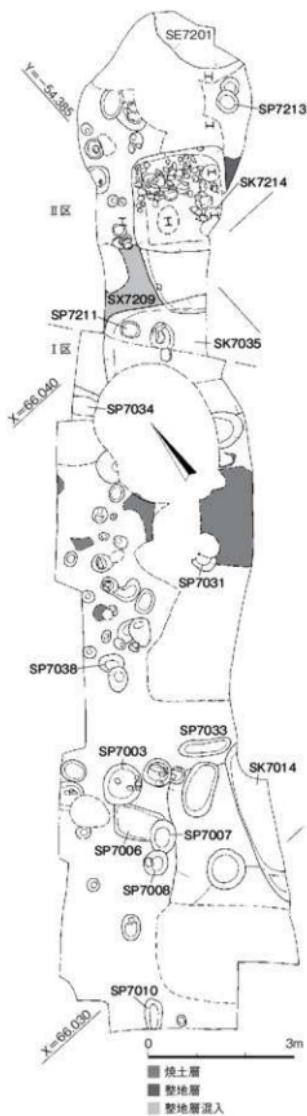


Fig.32 第7面全体図 (1/100)



Ph.55 第7面 I区全景 (南西から)



Ph.56 第7面 I区中央 (南東から)



Ph.57 第7面 II区全景 (北東から)

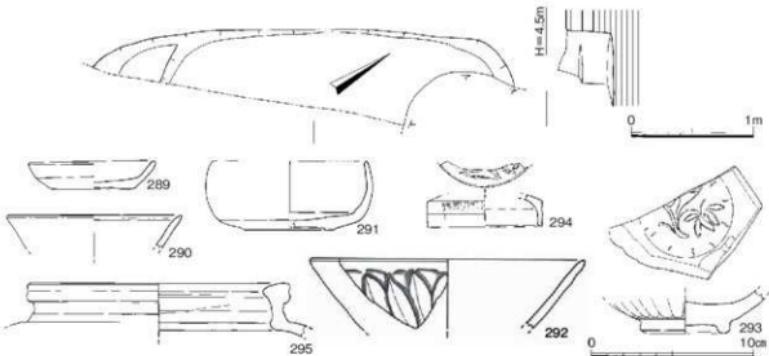
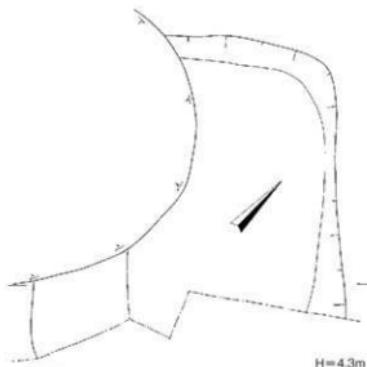


Fig.33 SK7014実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

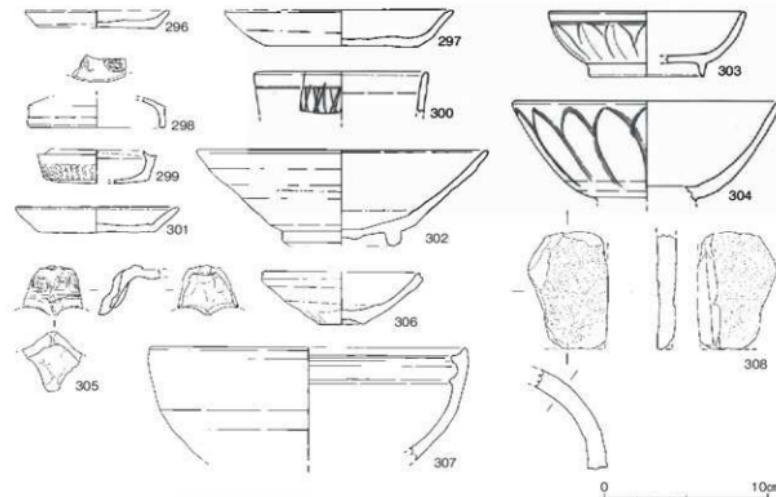
SK7035 (Fig.34 Ph.58) I区とII区の境界で検出した。平面プランは方形を呈し、南西側は井戸に削平され、南東側は調査区外へと延びる。東西方向は長さ2.55m、南北方向は現存で2.1m、最深部は50cmを測る。土層① (Fig.4-52~60層) で見られるように、最上層に2~5cmの焼土と炭化物を含んだ灰褐色土、その下に1cmほどの炭化物層が堆積し、灰色粘質土、多量の炭化物を含んだ層の下にオリーブ灰色粘質土が続く。このオリーブ灰色粘質土は10cmと厚く堆積するが、締まりが悪く、少量の炭化物や焼土を含む。その下には粘性を帯びた炭化物と灰が互層となって堆積する。最下層には1~2cmほどの厚さであるが、非常に硬くしまったオリーブ灰色粘土が壁面にまで、貼られており、床と壁を構築しているものと思われる。土師器、白磁、龍泉窯系青磁、中国陶器、瓦、滑石石鍋の小片、鉄釘が出土する。大量の遺物が出土したが、土師器等に比べ、陶磁器が多く、他に銅鏡3枚、多量の炉壁、粘土塊がある。出土遺物から遭構の時期は13世紀中頃から後半と思われる。

出土遺物 (Fig.34) 296・297は回転糸切り底の土師器である。296は小皿で、口径8.6cm、器高1.1cmを測り、底部に板状圧痕を有する。細かい金雲母を多く含み、橙色を呈する。297は壺で、口径13.8cm、器高2.4cmを測り、底部に板状圧痕を有する。胎土に白色砂粒を含み、明橙色を呈する。298~302は白磁である。298は合子の蓋で、橙色の胎土に緑味を帯びた釉がかかる。299は合子の身で、青みがかった白色釉が施釉され、体部外面下半は露胎である。300は口禿げの口縁部をもつ香炉で、外面は口縁下に沈線状の凹みを巡らせ、その下はジグザグ状に片彫りが施される。胎土は精良で、灰色を呈し、やや緑がかった釉がかかる。301は皿IX-1a類、302は碗Ⅱ-2類である。303・304は龍泉窯系青磁である。303は壺III-5b類、304は碗II-a類で、鎬のない連弁が片彫りされる。305は陶器の脚部片である。外面には雷文が施される。粘性を帯びた灰色の胎土に雷文付近は緑、他は黒く発色する。306は陶器の捏鉢である。砂粒を多く含む胎土である。308は平瓦で、外面は強いナデ、内面は細かい布目が残る。色調は褐色を呈する。309は北宋代の銅鏡、「治平元寶」(初鑄年: 1064年)である。310は北宋代の銅鏡、「元祐(通)(寶)」(初鑄年: 1093年)で、2/3が欠損する。他に1枚完形品が出土するが、鎬がひどく不明である。他に少量であるが、炭化米・オオムギ・タイの歯が出土する。

SK7214 (Fig.35 Ph.59~64) II区の中央部で検出した。平面プランは方形を呈し、南側は調査区外へと延びる。南北方向の長さは1.95m、東西方向は2.1mを測る。深さは最深部で45cmである。遭構内にはすでにH鋼が打ち込まれ、これによって乱されている。壁は木質が見られ、板が壁に沿って



Ph.58 SK7035 (北西から)



0 2cm



SK7214

Fig.34 SK7035実測図 (1/40) およびSK7035・7214出土遺物実測図 (1/3・1/1)

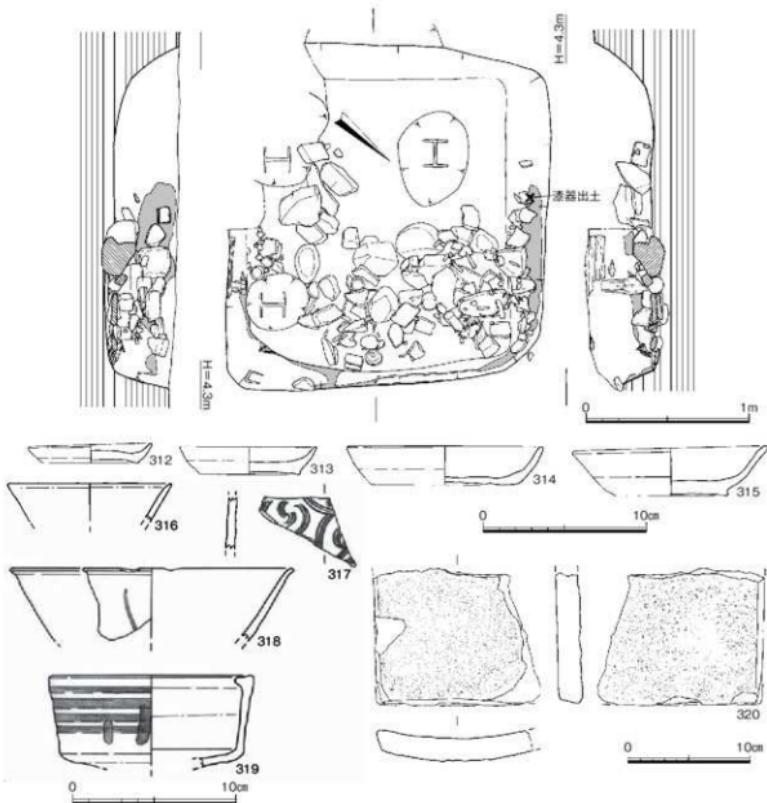


Fig.35 SK7214実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3・1/4)

立てられていたと思われる。内部では北東側に川原石が廃棄され、約80本の鉄釘が出土する。また、北西の壁際で、漆器が出土した。器の形状は留めていないが、被膜は良好に遺存していた。遺物量は少なく、他に土師器、白磁、龍泉窯系青磁、砥石片、魚骨、多量の粘土塊が出土する。他に炭化米・オオムギ・小さいオオムギ・マメ類・不明種子がある。時期は13世紀後半と考えられる。

出土遺物 (Fig.34・35 Ph.65) 311は唐代の銅錢、「開(元通)寶」(初鑄年: 621年)である。312～315は回転糸切り底の土師器である。312・313は小皿で、底部から外反気味に開き、口縁部は内湾する。口径7.6cm、8.3cm、器高1.1cm、1.7cmを測る。胎土は細かい金雲母を多く含み、312はにぶい橙色、313は橙色を呈する。314・315は壺である。314は口径12.0cm、器高2.4cmを測り、底部に板状圧痕を有する。底部から口縁部は内湾気味にそのまま開く。315は口径12.0cm、器高2.9cmを測り、底部から大きく外側に開く。ともに金雲母を多く胎土に含み、にぶい橙色を呈する。316は白磁碗Ⅸ類、317は青白磁の梅壺の体部片である。318は越州窯系青磁小碗Ⅲ-1b類で、輪花を有し、体部に箆押圧縦線文を施す。319は龍泉窯系青磁の香炉の体部片である。やや青みがかった釉がかかる。320



Ph.59 SK7214 (北西から)



Ph.60 SK7214 (南東から)



Ph.61 SK7214 (北から)



Ph.62 SK7214木質検出状況 (西から)

は軟質の平瓦で、土砂や鉄の付着が著しい。321は漆器である。被膜しか残っておらず、形態は不明である。地は柿渋を混ぜた黒漆を塗布し、文様は朱の赤漆で描く。文様は秋の草花を全面に描く。

その他の出土遺物 (Fig.36) 326・327はSE7201出土である。326は回転糸切り底の土師器の小皿で、底部に板状圧痕を有する。口径は8.4cm、器高1.7cmを測る。胎土は細かい金雲母を多く含み、暗橙色を呈する。327は白磁碗Ⅸ類の口縁部片である。328～332はSX7209出土である。328は回転糸切り底の土師器の小皿で、底部に板状圧痕を有する。口径9.2cm、器高1.3cmを測り、色調は明橙色を呈する。329は白磁碗Ⅸ類、330～332は龍泉窯系青磁の小碗で、青みのある釉がかかる。330の底部は欠損し、内外面は無文である。灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。331・332は小碗Ⅱ-b類である。333～338はSP7003出土である。333は白磁碗Ⅸ類、334・335は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類である。334は灰色の胎土に暗緑色の釉、335は灰黄色の胎土に黄味がかった緑色釉がかかる。336は回転糸切り底の土師器の坏である。体部は強い回転ナデを施しているため凸凹状を呈する。口径12.5cm、器高2.9cmを測り、色調は橙色である。337は瓦器碗の口縁部片である。内面には一部銀化した部分がみられる。また、暗文風に横方向、縦方向に磨く。338は施釉陶器の鉢の口縁部片である。口縁部は



Ph.63 SK7214漆器検出状況



Ph.64 SK7214漆器検出状況



321

Ph.65 SK7214出土漆器

玉縁状である。胎土は赤褐色を呈し、黄味がかった茶褐色の釉が施釉される。339～341はSP7006出土である。339は白磁皿Ⅶ-1'a類である。底部は施釉されず、墨書が残る。340は龍泉窯系青磁の束口碗Ⅱ-b類である。灰白色の胎土に青みがかった釉が施される。341は同安窯系青磁碗の口縁部片である。342・343はSP7008出土である。342は白磁皿Ⅸ類、343は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類である。344はSP7010出土の白磁皿で、体部下位の露胎部分に墨書を有する。345～347はSP7031出土である。345は白磁皿VI-2b類、346は白磁皿VI-2a類である。347は龍泉窯系青磁碗II-a類で、連弁文は鏽をもたず、片彫りで描く。348はSP7038出土の無釉陶器の脚部片であろうか。胎土は細かい砂粒を多く含み、黄橙色を呈する。脚部上位には波状文と凹線が巡る。349～351はSP7033出土である。349



322



323



324



Ph.66 包含層出土ガラス製品

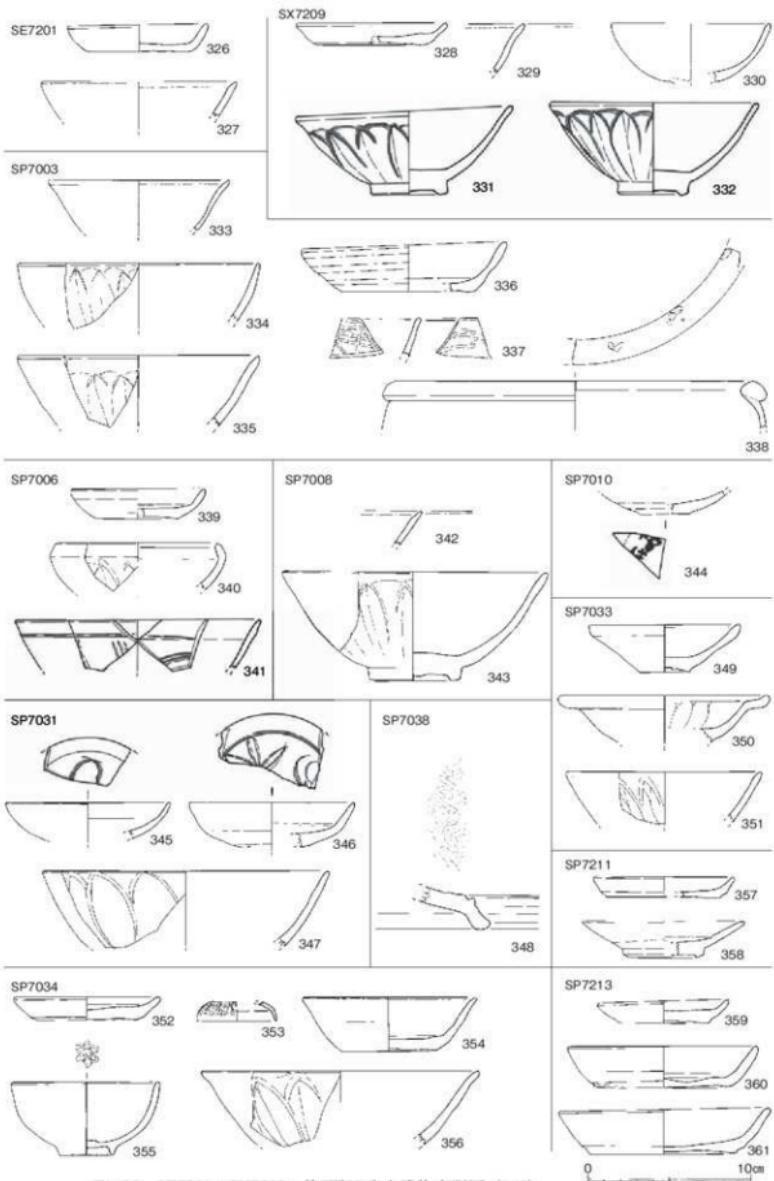


Fig.36 SE7201・SX7209・第7面SP出土遺物実測図 (1/3)

は陶器の皿で、赤褐色粒の胎土に茶褐色の釉がかかる。350は龍泉窯系青磁壺III-3b類、351は龍泉窯系青磁碗II-b類である。352~356はSP7034出土である。352は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径9.0cm、器高1.4cmを測り、細かい金雲母を含み、色調は橙色である。353は白磁の合子の蓋である。型押しによる施文を行う。354は白磁皿IX-1c類、355は龍泉窯系青磁小碗III-1Aa類で、見込みに花文のスタンプを有する。356は龍泉窯系青磁碗II-b類である。357・358はSP7211出土である。357は回転糸切り底の土師器の小皿で、底部に板状圧痕を有する。口径8.6cm、器高1.2cmを測り、色調は橙色を呈する。358は白磁皿III-1類である。359~361はSP7213出土の回転糸切り底の土師器である。359は小皿で、口径8.1cm、器高1.3cmを測る。細かい金雲母を多量に含み、暗橙色を呈する。360・361は壺で、口径11.6cm、13.0cm、器高2.6cm、2.8cmを測る。色調はともに暗橙色を呈し、361の底部に板状圧痕を有する。

8) 第8面の調査 (Fig.37 Ph.67・68)

I区は第7面を20cm程掘削した標高4.1mの灰褐色粘質土・シルト層で、新たな遺構を検出したため、遺構面とした。II区もほぼ同レベルの標高4.0mの灰黒色土・シルト層で遺構を検出した。上層で見られた、整地層・焼土面はこの面では一切みられない。検出した遺構は溝3条、土坑5基、柱穴である。柱穴の覆土は大半が灰色砂質土であるが、焼土、粘土塊が混入する覆土もみられる。I区東側で、完形の瓦器皿を検出した。第8面の遺構の時期は大半が13世紀代である。

SD8028 (Fig.37) I区中央で検出した溝である。南東側は柱穴や土坑に削平され、北西側は調査区外へと延びる。現存長1.2m、幅36cm、深さ16cmを測る。覆土は灰色砂質土である。遺物は白磁片、土師器小片が出土し、時期は13世紀前半頃と思われる。混入で、楠葉型の瓦器碗が出土する。

出土遺物 (Fig.44) 438は楠葉型の瓦器碗で、口縁部内面には沈線が巡る。内面と外面上位は口縁部に平行した圓線状の細いヘラ磨きを行う。外面口縁下は斜方向の磨きをやや雜に施す。

SD8201 (Fig.38 Ph.69) II区中央に位置し、N-42°-Wの方位に走る溝と思われる。南東側はSK8202に削平され、北西側は調査区外へと延びる。幅は1.5~1.7m、現存長1.0mを測る。深さは8~15cmで、西側はやや浅くなる。覆土は灰色土で、拳大の石が散在する。遺物は白磁(Ⅷ・IX類)、龍泉窯系青磁、施釉陶器、土師器、須恵質土器、滑石石鍋の小片、鉄釘がある。他に少量であるが、炭化米・炭化したマメ類・不明種子が出土する。遺構の時期は13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.38) 362は白磁皿III-1類、363は白磁碗IX類、364は龍泉窯系青磁碗II-b類である。365は常滑焼の甕の口縁部片である。胎土には黒色粒、白色砂粒を含み、灰色を呈する。

SK8001 (Fig.39 Ph.70~74) I区中央で検出した。平面プランは長方形を呈すると思われる。土坑の南東側と南西側は調査区外へと延びる。現存長、南北方向3.5m、東西方向2.0mを測る。深さは60cm、床面は平坦であり、壁は直に立たず、緩やかに立ち上がる。床面はオリーブ灰色粘質土、灰色粘質土で構築されていることが、南側の土層図からうかがえる。床面上には炭化物層があり、その上に焼土層、炭化物と焼土を多く含んだ灰黄褐色土が堆積する。炭化物は特に南西側と壁際(13層)に集中していた。また、少量ではあるが、上層からも出土する。炭化物は木片もみられるが、大半が種子であり、貯蓄としての土坑であった可能性がある。炭化種子はオオムギが最も多く、他にコメ・マメ類・丸い形状の不明種子がある(付編参照)。

遺物は最下層からは丸底壺等の土師器、瓦器、白磁(V類)が出土する。中層の焼土層からは、白磁(Ⅷ類)、繩目の叩きをもつ瓦、鉄釘、銅錢15枚が出土する。時期は13世紀中頃と考えられる。

出土遺物 (Fig.39・40) 366~369は回転糸切り底の土師器である。366は小皿で口径8.4cm、器高1.3cmを測り、橙色を呈する。367・368は壺で、口径13.4cm、器高2.4cm、2.7cmを測り、368は底部

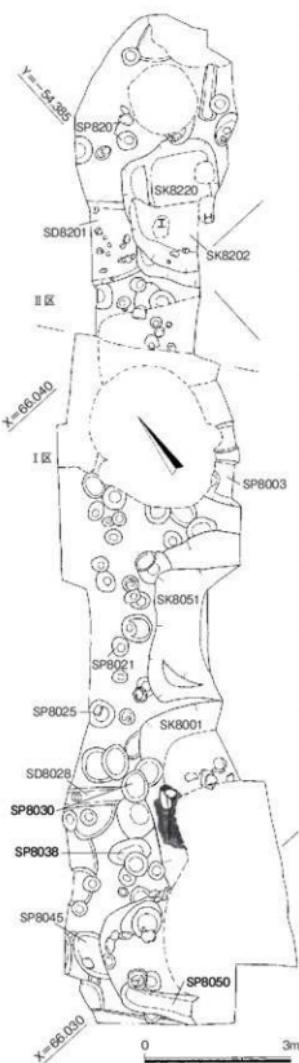


Fig.37 第8面全体図 (1/100)

に板状圧痕を有し、口縁部内外面に煤が付着する。369は底部片で、板状圧痕を有し、内外面に墨書が残る。370は黒色土器B類で、口縁部は緩やかに外反する。371～375は白磁で、371は皿IX-1c類、372は碗VII類、373・374は碗V-4類、375は低い角高台をもち、高台際まで釉がかかる。内面の見込みは広く、体部との境に凹状の沈線を巡らす。376は越州窯系青磁碗I-27類、377は同安窯系青磁碗である。378～381は龍泉窯系青磁である。378は碗II-a類、379は碗II-b類、380は坏III-3a類、381は皿I-1b類である。393



Ph.67 第8面Ⅰ区全景（南西から）



Ph.68 第8面Ⅱ区全景（北東から）

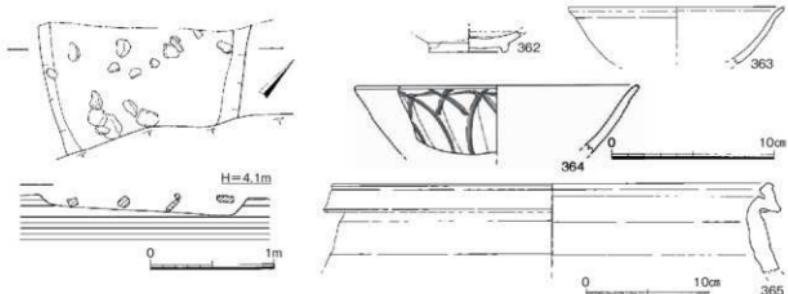


Fig.38 SD8201実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3・1/4)



Ph.69 SD8201 (南東から)

は磁灶窯系陶器の盤である。見込みと底部外
面に墨書きが残る。394は陶器の盤である。口
縁部内外面の上半に軸はかけられ、下半は露
胎である。砂粒を多く含む明橙色の胎土であ
る。382～392は銅錢である。382は唐代の
「開元通寶」(初鑄年: 960年)、383は北宋代
の「景德元寶」(初鑄年: 1005年)、384は北
宋代の「天禧通寶」(初鑄年: 1018年)、385
は北宋代の「天聖元寶」(初鑄年: 1023年)、
386は北宋代の「皇宗通寶」(初鑄年: 1039
年)、387は北宋代の「熙寧元寶」(初鑄年:
1072年)、388は北宋代の「元豐通寶」(初鑄
年: 1078年)で星孔を有する。389は北宋代
の「紹聖元寶」(初鑄年: 1094年)、390は北宋代の「聖宗元寶」(初鑄年: 1101年)、391は2枚が銅着
したまままで、1枚は北宋代の「政和通寶」(初鑄年: 1111年)、392は南宋代の「淳熙元寶」(初鑄年:
1174年)である。また、387、390、391は6枚で銅着していた。計15枚の銅錢が出土したが、他は判
読できない。

SK8051 (Fig.41 Ph.76) I区の中央で検出した。この遺構は2面から確認していたが、8面で
ようやく平面プランを検出できた遺構である。平面プランは方形を呈し、南側は調査区外へと延び
る。東西方向の長さは3.4m、南北方向の長さは現存で1.7mである。床面は調査区内では検出できず、
深さは1.5m以上を測る。深さから井戸である可能性も
考えられる。明代の染付、朝鮮時代の白磁、瓦質土器
の火舟、滑石製品、羽口、るつぼ、鉄釘が出土する。
時期は16世紀である。



Ph.70 SK8001土層 (北西から)

出土遺物 (Fig.41 Ph.75) 395・396は明代の染
付碗B群である。397・398は龍泉窯系青磁碗である。
397は口縁部外面に雷文を施す。398は碗II-b類であ
る。399は白磁皿区-II類で、体部下位から底部にか
けては施釉されない。400は朝鮮時代の軟質白磁で、

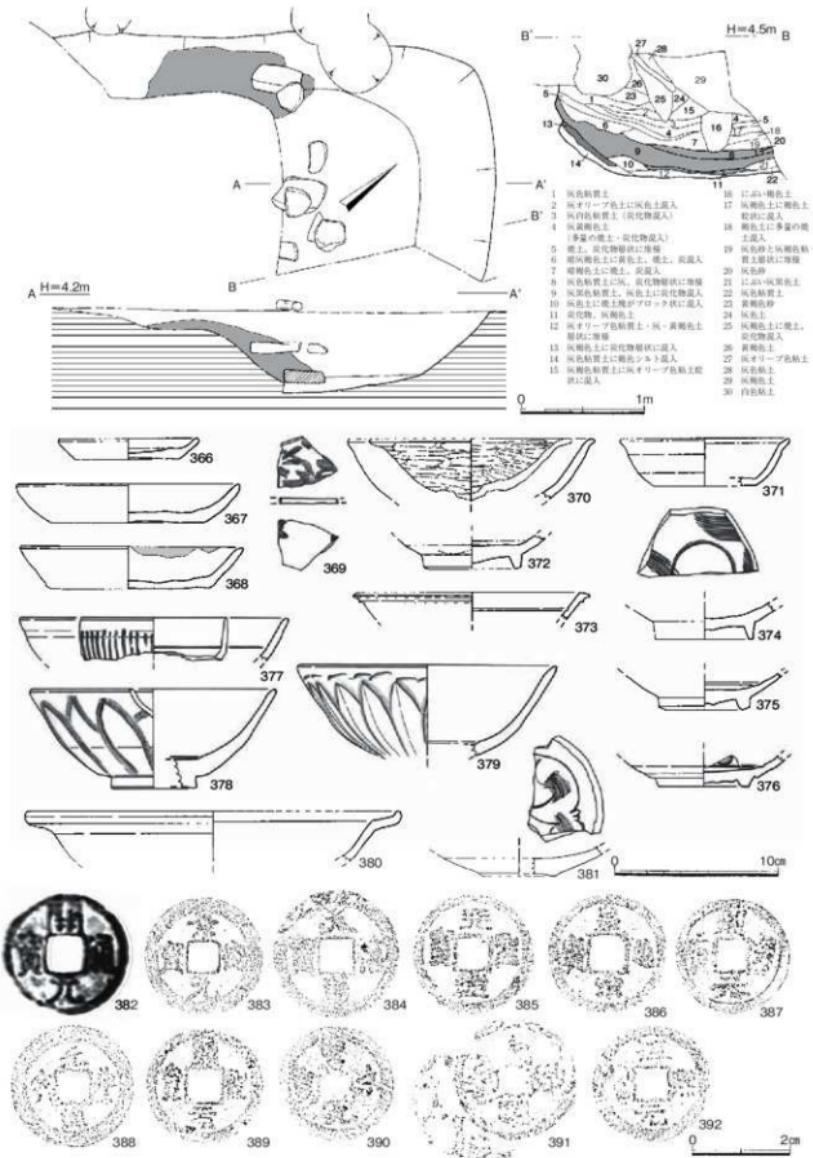


Fig.39 SK8001実測図(1/40)および出土遺物実測図①(1/3 · 1/1)



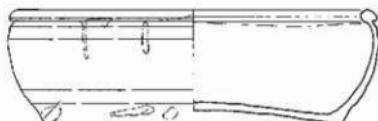
Ph.71 SK8001 (東から)



Ph.72 SK8001完掘状況 (北西から)



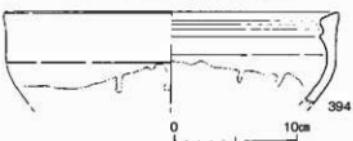
Ph.73 SK8001炭化物検出状況 (東から)



393



Ph.74 SK8001炭化物検出状況



0 10cm

Fig.40 SK8001出土遺物実測図② (1/4)



Fig.41 SK8051実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

Ph.75 SK8051出土遺物
 砂粒を多く含む乳白色の胎土に青みを帯びた釉が高台際までかかる。高台内は露胎である。401は陶器の蓋である。上面が凹状に窪んだ摘みがつく。内面には墨書が残る。402は瓦質土器の火舍である。403は羽口片の先端部付近で、強い被熱により黄橙色の胎土から明橙色、灰色へと変色する。表面にはガラス質滓が薄く付着する。404はるつぼ片で、胎土には粉が混入される。405は滑石の小容器で、2箇所円形に抉り、内部には粗い削りが残る。2つの抉りのうち、1つは底が抜けている。重さは22.12gである。

SK8202 (Fig.42 Ph.77) II区の中央部で検出した。北東側はSK7214に削平され、南側は調査区外へと延びる。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられ、現存長1.35m以上である。深さは32cmを

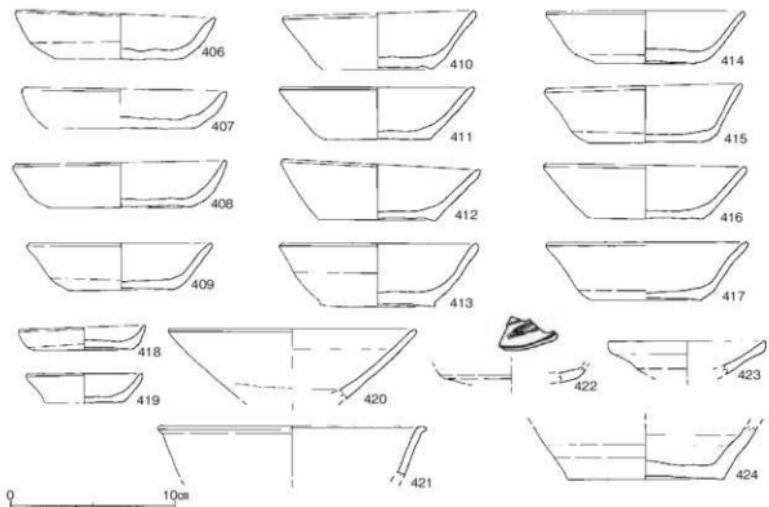
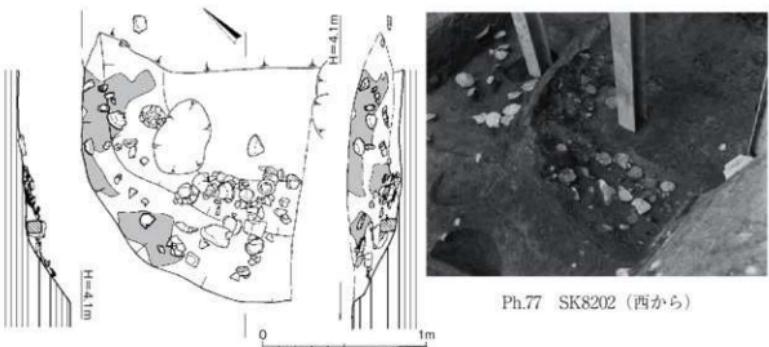


Fig.42 SK8202実測図 (1/30) および出土遺物実測図 (1/3)

測り、床面は平坦である。覆土には北西側に多く炭化物が混入する。拳大の石が少量投棄されており、大量の土師器が出土した。遺物は床面よりも壁際に集中して出土する。陶磁器は土師器に比べると少なく、白磁、同安窯系青磁、中国陶器、瓦器、鉄釘がある。他に少量であるが、炭化米・炭化したマメ類・不明種子が出土する。時期は13世紀中頃から後半と考えられる。

出土遺物 (Fig.42) 406~419は回転系切り底の土師器である。406~417は壺で、406~408は内済気味に口縁が立ち上がり、409~417は底部から直線的に、または外反して開く。後者は口径に比して底径が小さい。前者は口径が12.0~12.8cm、底径7.8~8.8cm、器高は2.6~3.0cm、後者は口径が11.0~12.2cm、底径6.2~7.2cm、器高は2.9~3.9cmを測る。胎土に細かい金雲母を多く含み、407はにぶい橙色、それ以外は橙色を呈する。406、408~414は底部に板状压痕を有する。418・419は小皿で、口径

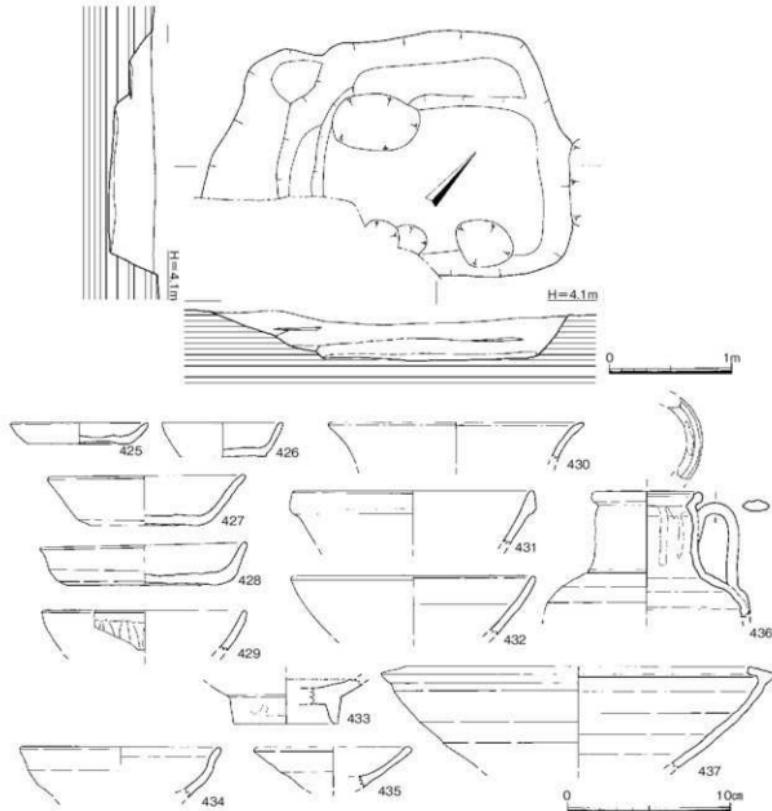


Fig.43 SK8220実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)



Ph.78 SK8220 (北西から)

は7.8cm、7.0cm、底径5.8cm、4.8cm、器高は1.5cm、1.9cmを測る。418は壺の前者、419は壺の後者と形態は類似する。胎土に金雲母を多く含み、418はにぶい橙色、419は橙色を呈する。420・421は白磁である。420は碗Ⅶ-2類、421は碗V類である。422は同安窯系青磁皿、423は陶器の皿で、灰色の胎土に黒色釉がかかる。424は陶器の底部片で、白色砂粒を含む明橙色の胎土に赤褐色の釉がかかる。

SK8220 (Fig.43 Ph.78) II区の中央部で検出した。上層にSK7214、SK8202が重なっており、上部の大半はこれらの土坑に削平を受けている。平面プランは方形を

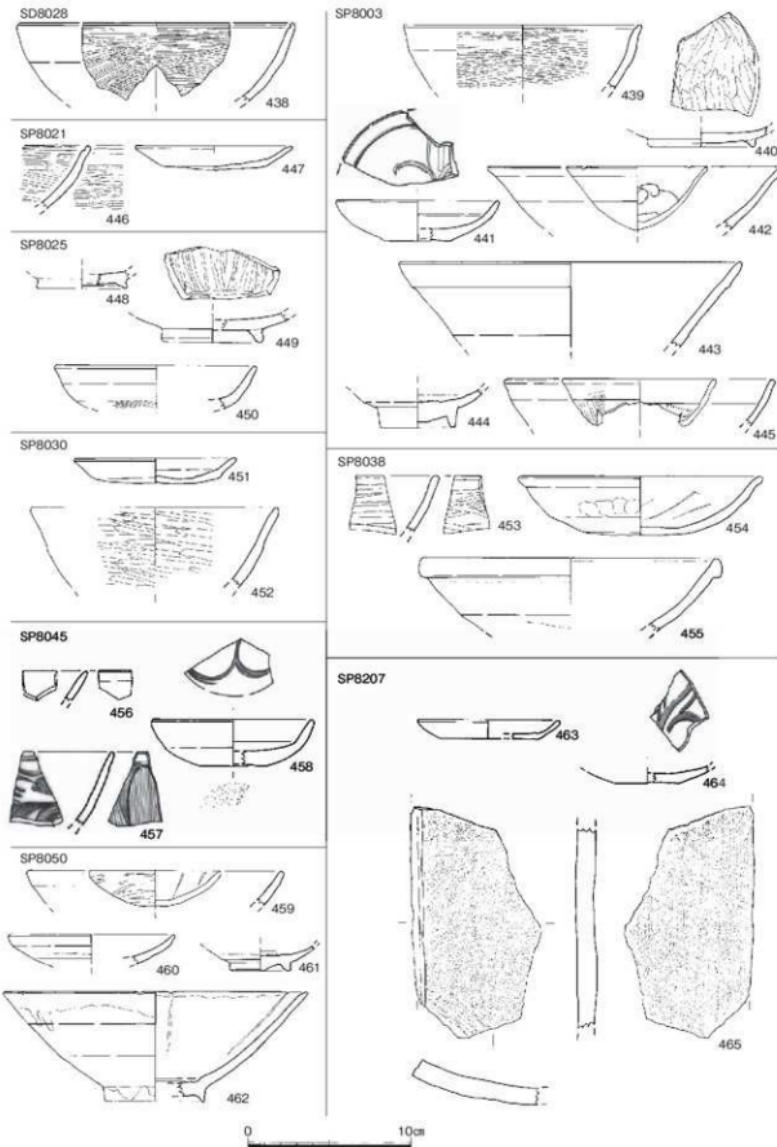


Fig.44 SD8028・第8面SP出土遺物実測図（1/3）

呈し、南側は調査区外へと延びる。長さは東西方向が2.1m、南北方向が2.0mである。北西側と南西側は2段掘りとなっており、床面は平坦で、深さは37cmを測る。覆土は灰色土である。陶磁器が多く出土し、龍泉窯系青磁、白磁、中国陶器、土師器、瓦器、繩目叩きの平瓦、滑石製石鍋の小片、粘土塊が出土する。時期は13世紀中頃と考えられる。

出土遺物 (Fig.43) 425～428は回転糸切り底の土師器である。425・426は小皿で、口径8.2cm、7.2cm、器高1.3cm、2.1cmを測り、425は底部に板状圧痕を有する。425は橙色、426はにぶい橙色を呈する。427・428は坏で、427は外側に大きく外反する口縁部をもち、橙色を呈する。428は上方に延びる口縁部で、底部に板状圧痕を有し、明橙色を呈する。429は龍泉窯系青磁小碗II-b類である。430～433は白磁である。430は碗IX類、431は碗IV類、432・433は碗V類である。434は天目茶碗で、体部上位で内湾し、口縁部は強く外反する。胎土は灰色を呈し、茶褐色の釉がかかる。435～437は陶器である。435は皿で、茶褐色の胎土に茶色の釉がかかる。436は水柱で、口縁部内面には胎土目が付く。白色砂粒を多く含んだ灰色を呈し、茶褐色の釉が薄くかかる。437は鉢で、口縁部は肥厚させ、「ハ」の字形に外側に開く。胎土は明橙色、灰色を呈し、釉がかかるが、二次加熱を受け、白色となる。

その他の出土遺物 (Fig.44) 439～445はSP8003出土である。439は楠葉型の瓦器椀で、口縁部内面には沈線が巡る。内面と外面上位は口縁部に平行した圓線状の細いヘラ磨きを行う。440は瓦器椀の底部片で、見込みには太い磨きが施される。441～444は白磁である。441は皿VII-1b類、442は碗VII-b類、443は碗IV類、444は碗VII類である。445は同安窯系青磁碗である。446・447はSP8021出土である。446は楠葉型の瓦器椀、447はヘラ切り底の土師器の小皿で、口径9.4cm、器高1.5cmを測り、底部に板状圧痕を有する。胎土は金雲母を含み、明橙色を呈する。448～450はSP8025出土である。448は綠釉陶器の底部片である。橙色の胎土に濃緑色の釉がかかる。高台内は回転糸切りが残る。449は黒色土器A類の椀、450は土師器の坏で、口縁端部はわずかに外反する。他に白磁、青磁の小片が出土する。451・452はSP8030出土である。451は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径9.8cm、器高1.6cm、色調は橙色を呈する。452は瓦器椀で、内外面を横方向に丁寧に磨く。453～455はSP8038出土である。453は瓦器椀の口縁部片で、横方向の粗い磨きを施す。454は丸底坏で、口縁端部は外反する。口径14.6cm、器高3.6cmを測り、丁寧なナナで仕上げる。455は白磁碗IV類である。456～458はSP8045出土である。456は白磁碗、457は龍泉窯系青磁碗I-6a類で、体部外面に綾の撋目を入れ、片彫りで連弁文、内面には片彫り草花文や撋目文を施す。458は龍泉窯系青磁皿I-3a類である。459～462はSP8050出土である。459は瓦器椀で、口縁部の内面に工具痕が残る。磨きは外面に粗く施す。460・461は白磁の皿で、461は皿III-1類である。462は白磁碗VII-a類である。463～465はSP8207出土である。463は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径は8.7cm、器高は1.2cmを測り、明橙色を呈する。464は白磁皿の底部片である。底部はやや上げ底気味の平底で、見込みには片彫りで文様が描かれる。465は須恵質の平瓦である。凸面は繩目叩き、凹面には細かい布目が残る。

9) 第9面の調査 (Fig.45 Ph.79・80)

I区は第8面を40cm程掘削した標高3.7mの褐色シルト・黄褐色砂を遺構面とした。II区は3.6mの黄褐色シルトで検出した。検出した遺構は井戸7基、土坑2基、柱穴である。井戸をこの面で7基検出したが、中には、上層より確認できていたものもあり、新しい時期のものも含まれている。また、柱穴の中には根石がみられなくなる。第9面の遺構の時期は11世紀後半から12世紀である。

SE9038 (Fig.46 Ph.81) I区の東側で検出した。掘方は南北方向が約2.0mとやや長い歪な円形を呈する。標高1mまで掘削したが湧水のため、完掘することはできなかった。標高1.5m付近で、覆土の違いから井側をほぼ中央に取り付けたことを確認できた。井側は直径75～85cmと思われる。木

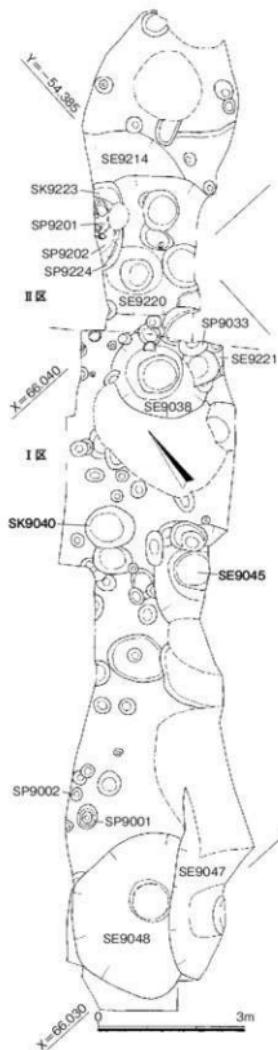


Fig.45 第9面全体図 (1/100)



Ph.79 第9面I区全景（南西から）



Ph.80 第9面II区全景（北東から）

質等は検出できなかった。井側内からは瓦質土器の鉢、土師器、白磁片、青磁片、鉄釘が出土する。掘り方からは龍泉窯系青磁が出土し、遺構の時期は13世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.46) 466は回転糸切り底の土師器の坏である。口径12.2cm、器高2.1cmを測り、底部に板状圧痕を有する。胎土は金雲母を含み、明橙色を呈する。467は白磁碗IX類、468は龍泉窯系青磁碗II-b類である。469は須恵質の平瓦で、2cmと厚く、凸面は繩目叩き、凹面は刷毛目で調整した後、部分的に工具でな

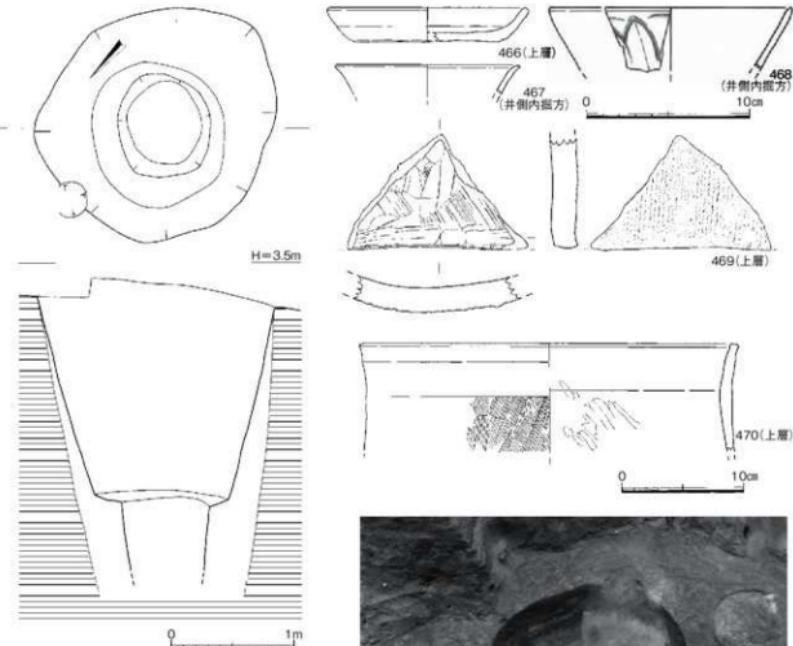
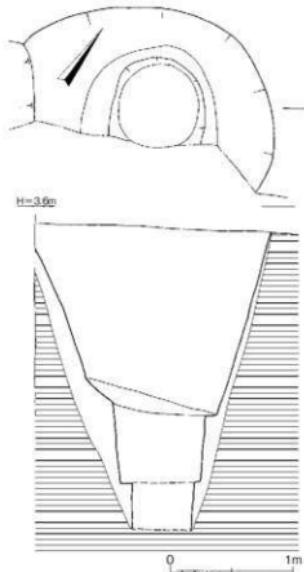


Fig.46 SE9038実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3・1/4)

である。胎土は白色砂粒を多く含み、色調はにぶい橙色を呈する。470は土師器の瓶と思われる。胎土に金雲母を多く含み、明褐色を呈する。体部外面は細かい斜方向の刷毛目、内面は指ナデで調整する。口縁上面は凹状に窪ませる。

SE9045 (Fig.47 Ph.82・83) I区の中央で検出した。南側の大半は調査区外へと延びる。掘方は東西方向が現存長2.0mとやや長い楕円形を呈すると思われる。覆土の違いから、井側はほぼ中央に取り付けられたことが、標高2.0m付近から確認できた。直径75cmの井筒と思われる。木質は確認できなかった。標高1.35m付近で、水溜と思われる曲物を検出した。横方向に走る木質がわずかに遺存する。曲物は直径42~50cm、高さ40cmを測る。湧水はなかった。井筒内からはヘラ切り底の土師器、白磁、中国陶器、鉄釘、鐵滓、掘り方からは他に須恵器の鉢が出土する。また上層からは白磁Ⅶ、龍泉窯系青磁等も出土する。遺構の時期は12世紀前半と思われる。

出土遺物 (Fig.47) 471~475は白磁である。471は碗V類、472は外面に櫛目、内面には細い片形りと櫛目が施される。473は碗IV類、474は碗VII類、475は碗IV類の底部片で、高台内には墨書が残る。



Ph.82 SE9045 (南東から)



Ph.83 SE9045 (北西から)

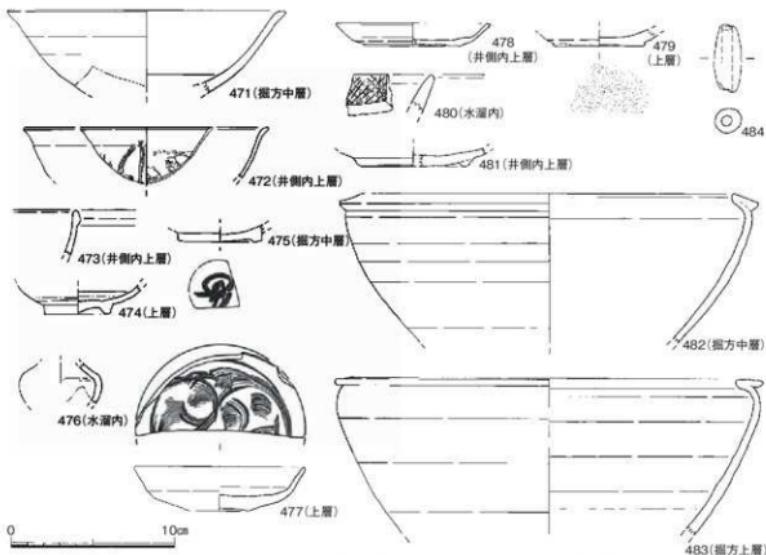


Fig.47 SE9045実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

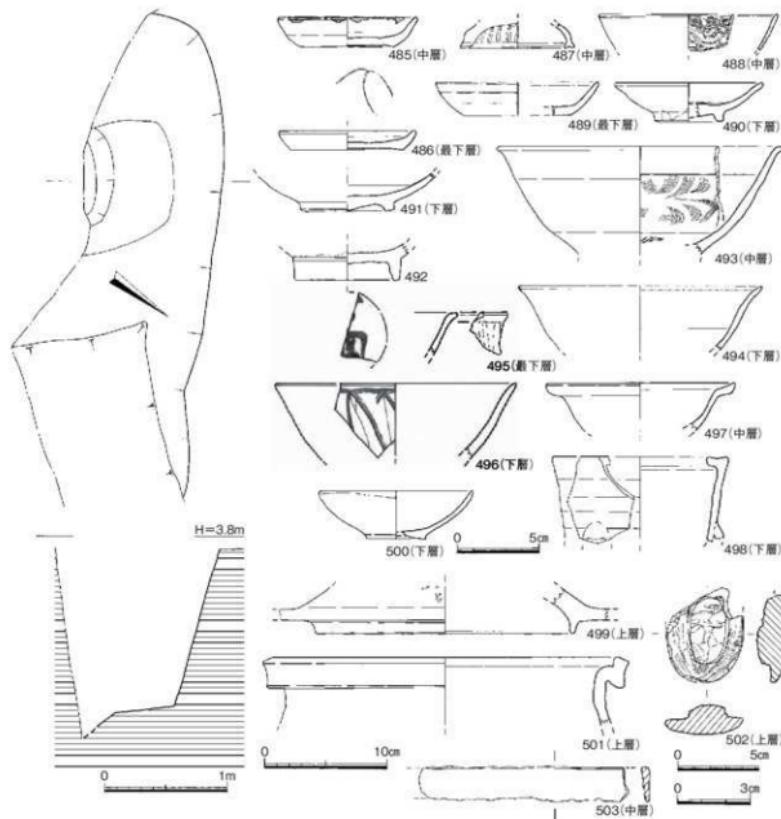


Fig.48 SE9047実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3・1/4・1/2)

476は青磁の小壺の肩部片、477は龍泉窯系青磁皿I-2c類である。478はヘラ切り底の土師器の小皿で、底部に板状圧痕を有する。口径9.4cm、器高1.4cmを測り、橙色を呈する。479は須恵器の椀の底部片で、回転系切り底である。480は土師器の口縁部片で、細い沈線で格子目を描く。481は瓦器椀の底部片である。482・483は施釉陶器の鉢である。484は完形の土錐で、8.17gを量る。

SE9047 (Fig.48 Ph.84) I区の西側で検出した。この遺構は7面から検出していたが、この面でようやくプランを確認できた遺構である。北東側はSK8001



Ph.84 SE9047 (南西から)

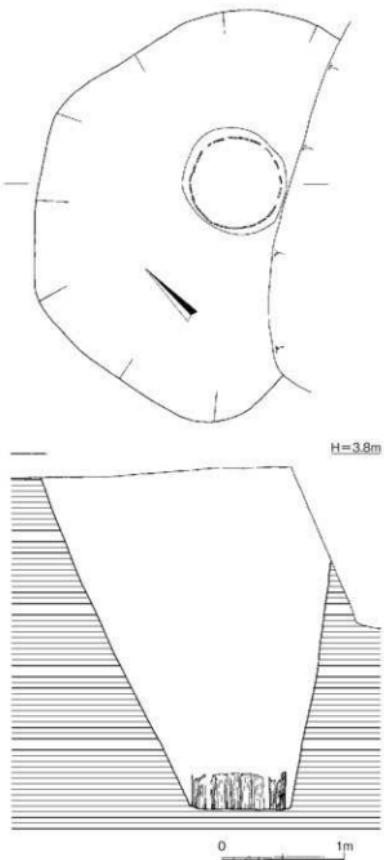


Fig.49 SE9048実測図 (1/40)



Ph.85 SE9048 (南西から)

に削平され、南東側は大半が調査区外へ延びる。掘方は東西方向が現存長4.0mを測るが、平面プランは不明である。標高2.3m付近まで掘削したが、井側は調査区外へ延びる。掘り方からは白磁、龍泉窯系青磁、土師器、滑石製石鍋の小片、滑石製品、鉄釘、粘土塊が出土する。遺構の時期は13世紀前半から中頃と思われる。

出土遺物 (Fig.48) 485・486は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径は8.6cm、8.4cm、器高1.8cm、1.2cm、485は灯明皿として使用される。486は底部に板状压痕を有し、底部内面には工具痕が残る。487は白磁の合子の蓋、488は青白磁の口縁部片である。489～494は白磁で、489は皿IX-1b類、490は皿III-1類、491は全面施釉された碗の底部片、492は碗皿類で高台内に墨書きを有する。493は碗V-4b類、494は碗IX類である。495～499は龍泉窯系青磁である。495は壺III類、496は碗II-2類、497は壺III-2類、498は香炉の口縁部片、499は大型の返りをもつ蓋と思われ。外面にはスタンプが施される。500・501は陶器で、500は緑色釉のかかる皿、501は茶褐色釉がかかることである。502は滑石製品である。スタンプ状のもので、梢円形に整形される。把手部分は低く、粗い整形である。下面は凸面を呈しており、擦痕は残るもの滑らかである。重さは509gである。503は刀子の刃部片である。本質等の付着はみられない。

SE9048 (Fig.49 Ph.85・86) I区の西側で検出した。南側はSE9047に削平される。掘方は



Ph.86 SE9048井側検出状況 (南西から)

東西方向が長さ3.4mとやや長い歪な楕円形を呈する。標高1.2m付近から直径75cmの井側を確認した。木質は縦方向に遺存しており、ほぼ全周する。桶を使用している。井側内からは白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、土師器、瓦器、繩目叩きをもつ瓦、滑石石鍋、土鍤が出土する。井戸の時期は13世紀前半と思われる。

出土遺物 (Fig.50・51) 504・505は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径8.4cm、8.7cm、器高1.1cm、1.0cmを測る。505は底部に板状圧痕を有する。506・507は土師器の坏で、506は内面に暗文風の磨き、外面も磨きで調整する。507は強い回転ナデで調整する。508はやや粗い磨きを横向方に施した瓦器椀である。509・510は楠葉型の瓦器椀で、510は見込みに暗文風の磨きを施す。511は耀州窯系青磁皿の底部片、512は青白磁の合子の蓋である。513～519は白磁である。513は碗II類、514は碗IX類、515は碗V類、516は碗V-4b類、517は碗V-4a類である。518は皿III-1類、519は皿VI-1a類である。520は灰色の胎土に緑色釉がかかった陶器の皿である。521～523は同安窯系青磁である。521は碗I-1c類、522は碗II類、523は小碗I類である。524は龍泉窯系青磁碗I-3a類である。525は明橙色を呈した平瓦である。526・527は土鍤で、4.76g、8.23gを量る。528・529は滑石石鍋で、外面と底部に煤が付着する。530～537は陶器である。530は四耳壺で、橙色の胎土に黄緑色の釉がかかる。口縁部に胎土目が付く。531は高台内に墨書きを有する。灰色の胎土に緑色釉が高台際までかかる。534・535は盤で534は灰色の粘性をもつ胎土に緑色釉がかかる。535は磁杜窯系の底部片である。536・537は鉢で、536は口縁部に胎土目が付着し、橙色の胎土に黄灰色の釉が施釉される。537は砂粒を含んだ明橙色の胎土に灰緑色の釉が内外面にかかる。

SE9214 (Fig.52 Ph.87・88) II区の中央で検出した。南西側はSE9220に削平され、北側の大半は調査区外へと延びる。掘方は東西方向が長さ1.65m、南北方向が現存で2.2mと長い歪な楕円形を呈すると思われる。遺存状況が良好である東側の掘り方は、遺構面から1m程オーバーハングをした状況であり、そこから井側までは緩やかに掘削されている。井側は南西寄りに取り付けられ、標高1.4m付近から直径60cmの井側を確認した。木質は縦方向に走り、高さ20cmほど残る。井側には桶を使用している。湧水はなかった。井側内からは白磁、ヘラ切り底の土師器、黒色土器、鉄釘が出土する。井戸の時期は12世紀前半と思われる。

出土遺物 (Fig.52 Ph.89) 538は回転糸切り底の土師器の坏である。539は青磁の壺で、丸みをもった体部から短い口縁が外反する。540～542は白磁である。540は小碗で、砂粒を含んだ胎土に灰白色の釉がかかる。541は碗の底部片である。低い角高台で、体部下位から高台際付近まで施釉される。542は碗V類の底部片で、「太」の墨書きが残る。543は無釉の陶器の鉢である。白色砂粒を多く含んだ茶褐色の胎土である。外面は叩きで整形され、内面は滑らかである。544は滑石製の樅である。長さ5.15cm、幅2.7cm、厚さ2.35cmを測り、重さは68.92gである。断面は隅丸方形を呈し、面取りを行う。表面には擦痕が多く残り、凹みもみられる。摘みを作り出し、2mm程の穿孔を行う。545は完形の土鍤で、31.15gを量る。546は土師質の丸瓦、547は銅製の帯の金具で、中は真空と思われる。

SE9220 (Fig.53 Ph.90・91) II区の中央で検出した。北側・南側は調査区外へ延びる。掘方は東西方向が現存長2.85mを測る。覆土の違いから標高2.3m付近で、西寄りに取り付けられた直径95～115cmの井側掘り方を確認した。標高1.35m付近で、縦方向に走る木質を検出したが、遺存状況は悪く、南東側に高さ33cmほどが残る。そのほぼ中央に深さ10cmほどの掘り込みを確認し、水溜が据えられていたと思われる。出土遺物は土師器、白磁、施釉陶器、滑石製石鍋、滑石製品、繩目叩きの瓦、粘土塊、鉄釘が出土する。遺構の時期は12世紀中頃と思われる。

出土遺物 (Fig.53・54 Ph.93) 548は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径8.9cm、器高

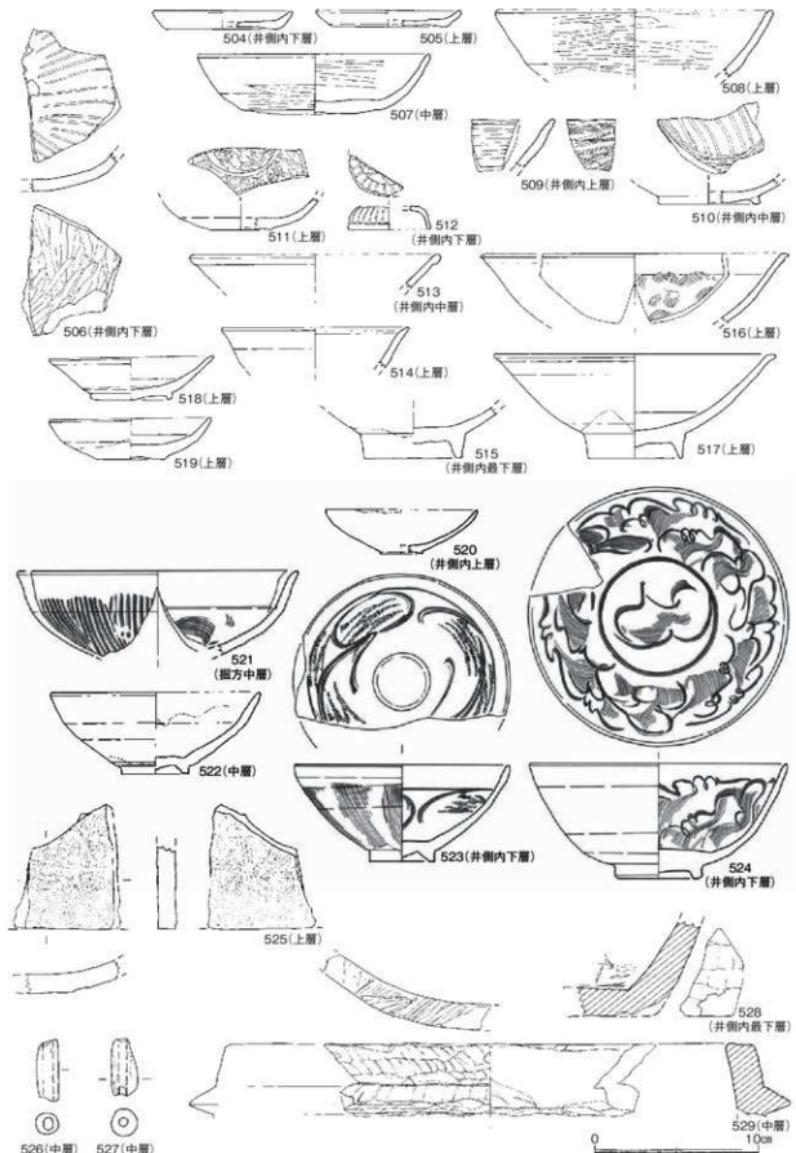


Fig.50 SE9048出土遺物実測図① (1/3)

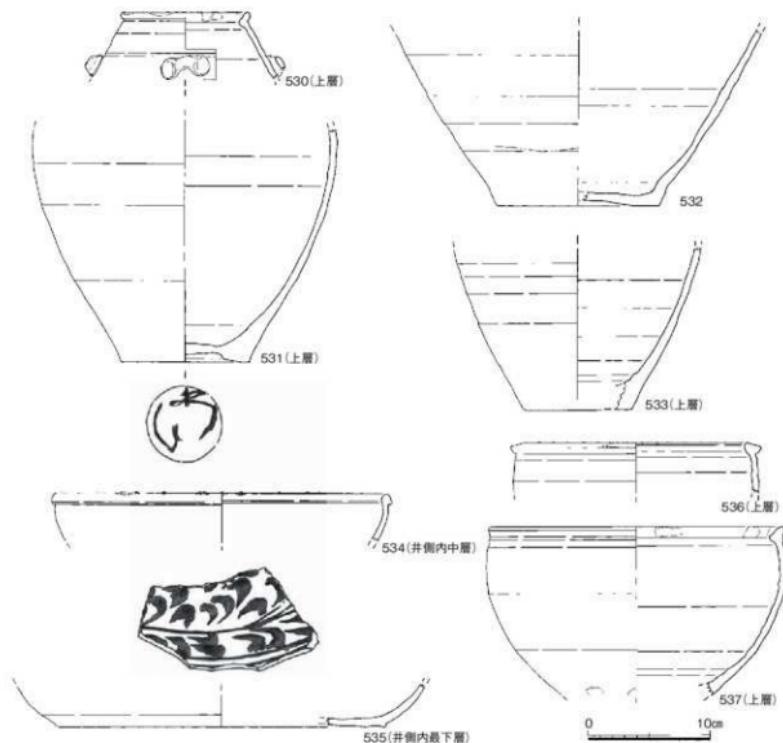


Fig.51 SE9048出土遺物実測図② (1/4)

1.3cmを測り、色調は明褐色を呈する。549は瓦器椀の口縁部片で、金雲母を含む。550は土師器の皿で、金雲母を含み、明褐色を呈する。外面は横方向の磨き、内面は丁寧にナデ調整をおこなった後、縱方向の暗文を施す。551は土師器の坏で、体部は中位で屈曲し、立ち上がる。赤褐色粒を含み、胎土は明橙色を呈する。内面はナデ、外面は削り、口縁部は横方向のナデで調整する。552は楠葉型の瓦器椀で、器壁は厚く、口縁内面に沈線を巡らす。553～563は合子の身で、553は青白色、563は緑色を帯びた釉がかかる。554・555は碗IV類、557は碗Ⅴ類、558・559は碗V類、556・560・561は皿III-1類である。562は小碗で、口縁部には輪花を有し、丸みをもって立ち上がった体部は口縁部で強く外反する。白色の胎土に縁がかった釉がかかる。564～568は中国陶器である。564は天目茶碗で、灰色の胎土に黒色、茶褐色の釉がかかる。565・566は鉢で、565は砂粒を含んだ褐色の胎土に灰緑色の釉がかかる。566は白色砂粒を大量に含んだ赤褐色の胎土で、釉は施されない。567・568は壺の底部片である。567は砂粒を多く含んだ胎土で、綠褐色の釉がかかる。底部は被熱により、黒色、褐色を呈する。また、内面も被熱により釉が変色する。568は黒色粒を含んだ赤色の胎土に緑灰色の釉がかかる。569は瓦質、570は須恵質の平瓦で、凸面は繩目叩きの後、部分的にナデを

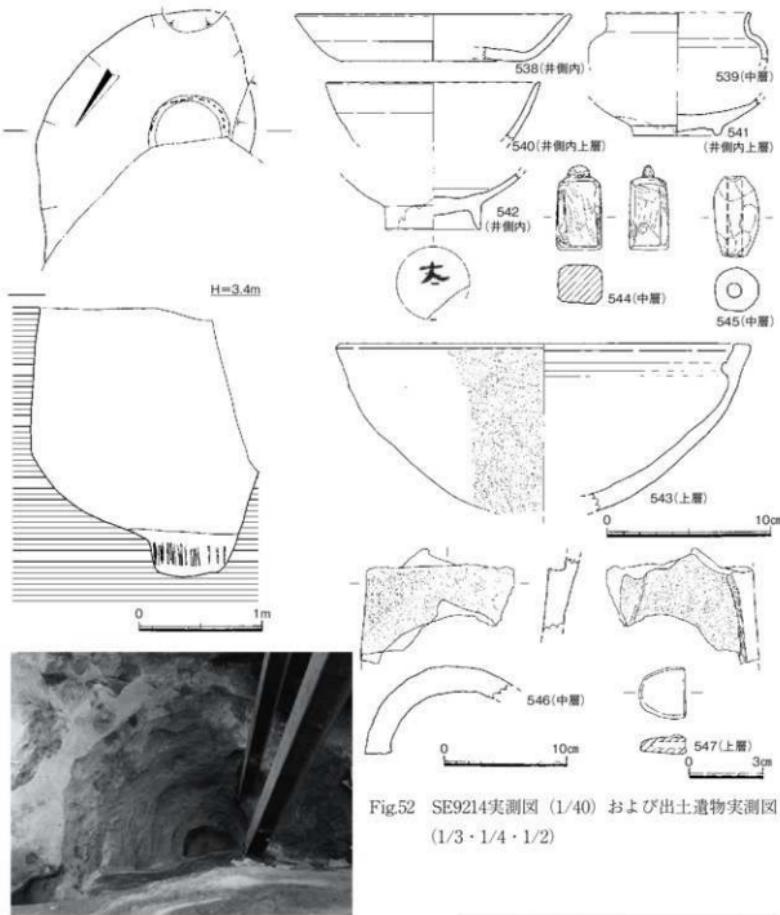
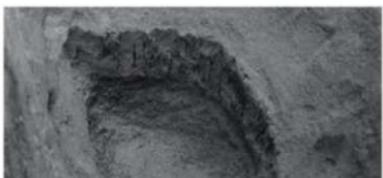


Fig.52 SE9214実測図(1/40)および出土遺物実測図
(1/3・1/4・1/2)

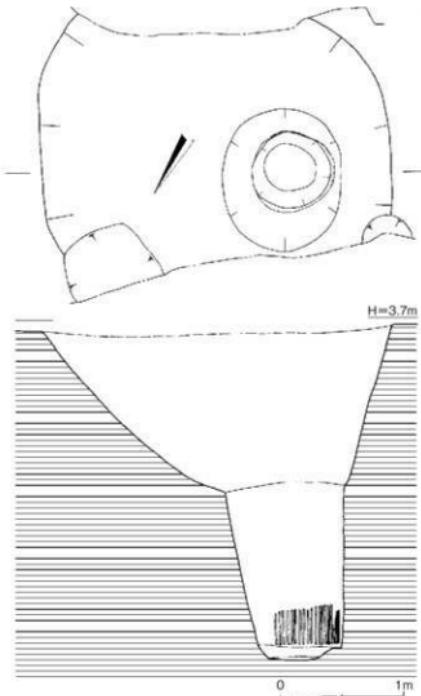
Ph.87 SE9214(北西から)



Ph.88 SE9214井側検出状況(西から)



Ph.89 SE9214出土遺物



Ph.90 SE9220 (北西から)



Ph.91 SE9220井側検出状況 (北西から)

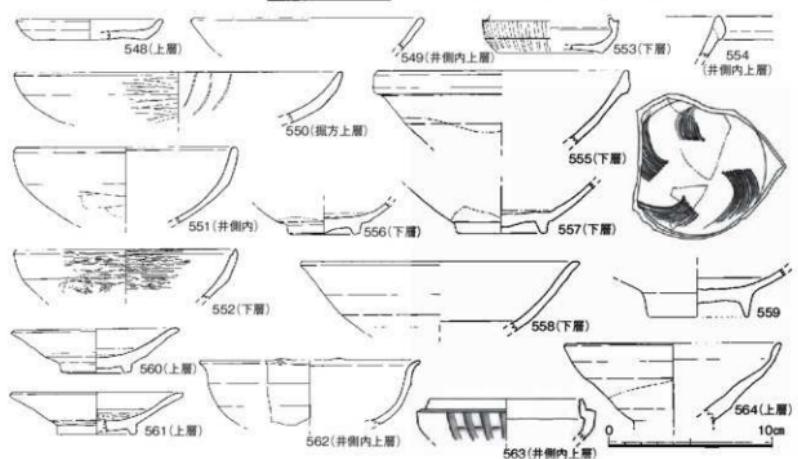


Fig.53 SE9220実測図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)

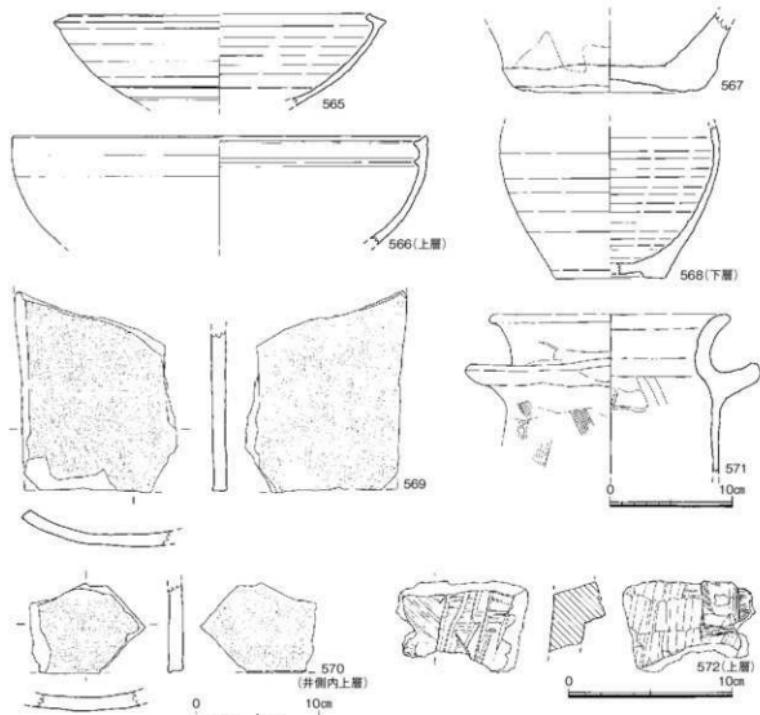


Fig.54 SE9220出土遺物実測図② (1/3・1/4)

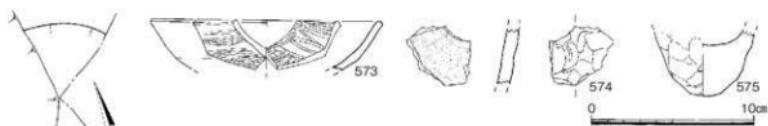
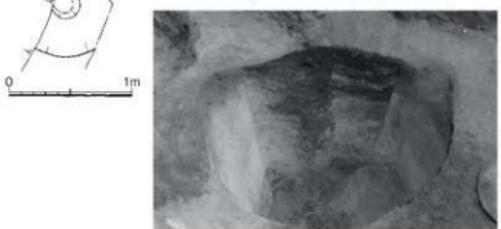


Fig.55 SE9221実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



Ph.92 SE9221土層 (西から)



Ph.93 SE9220出土遺物

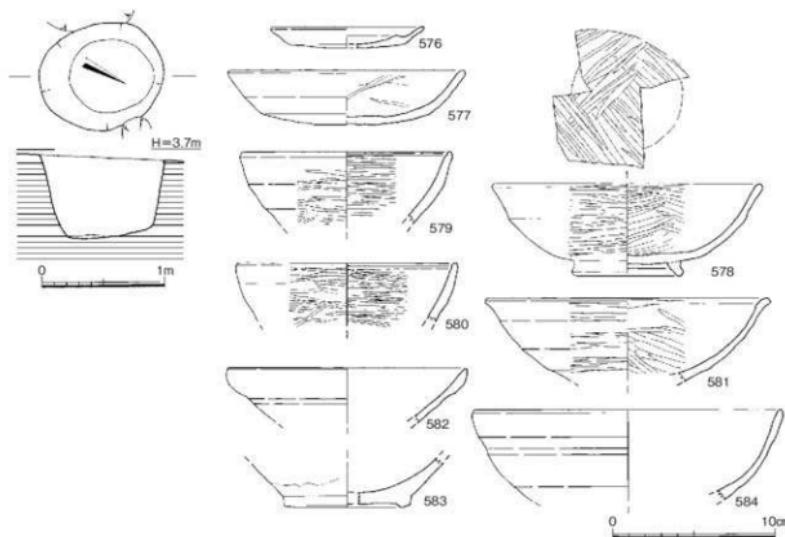


Fig.56 SK9040実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

施し、凹面は布目が残る。571は土師器の鉢付きの甕である。口縁部は横方向のナデ、鉢は指ナデ、指押さえ、内面は削り、外面は刷毛目で調整する。鉢の下面から体部に掛けては多量の煤が付着する。572は滑石石鍋の転用の石鍤である。重さは155.35gである。

SE9221 (Fig.55 Ph.92) I区の西側で検出した。西側はSE9038に削平され、東側は調査区外へ延びる。掘方は1.5mの円形を呈する。調査の安全性から完掘はできなかった。一部、井側と掘り方を掘削したに留めた。井側、掘り方からは瓦器、ヘラ切り底の土師器、須恵器、焼塙甕が出土する。完掘していないため詳細は不明であるが、時期は11世紀後半から12世紀前半頃と思われる。

出土遺物 (Fig.55) 573は土師器の坏で、内外面ともに研磨を施す。胎土は精良で、淡橙色を呈する。574・575は焼塙甕で、574の内面には布目が残り、外面は指押さえで調整される。575は底部片で、底部は厚く、内外面ともに指押さえで調整する。

SK9040 (Fig.56) I区の中央で検出した。平面プランはほぼ円形を呈し、直径0.85~1.0mを測る。床面は平坦で、深さは65cmである。覆土は灰褐色砂質土である。土師器、青磁、白磁、瓦器椀、綠釉陶器、鉄釘、鐵滓が出土する。遺構の時期は11世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig.56) 576~578は土師器である。576はヘラ切りの底の小皿で、底部に板状圧痕を有する。口径は9.4cm、器高1.3cmを測る。577は丸底坏で、口径14.4cm、器高4.0cmを測る。ともに橙色を呈する。578は椀で、内外面ともに丁寧な磨きを施す。胎土は赤褐色粒を含み、明橙色を呈する。579~581は瓦器椀である。579・580は桶葉型で、内面と体部上位は横方向の丁寧な磨き、体部下位は斜方向の磨きを施す。581の内面は斜方向の磨き、外面上位は回転などを施し、口縁部は短く外反する。582・583は白磁椀IV類、584は同安窯系青磁の碗である。

SK9223 (Fig.57 Ph.94) II区の中央で検出した。遺構の大半は調査区外へと延びる。平面プラ

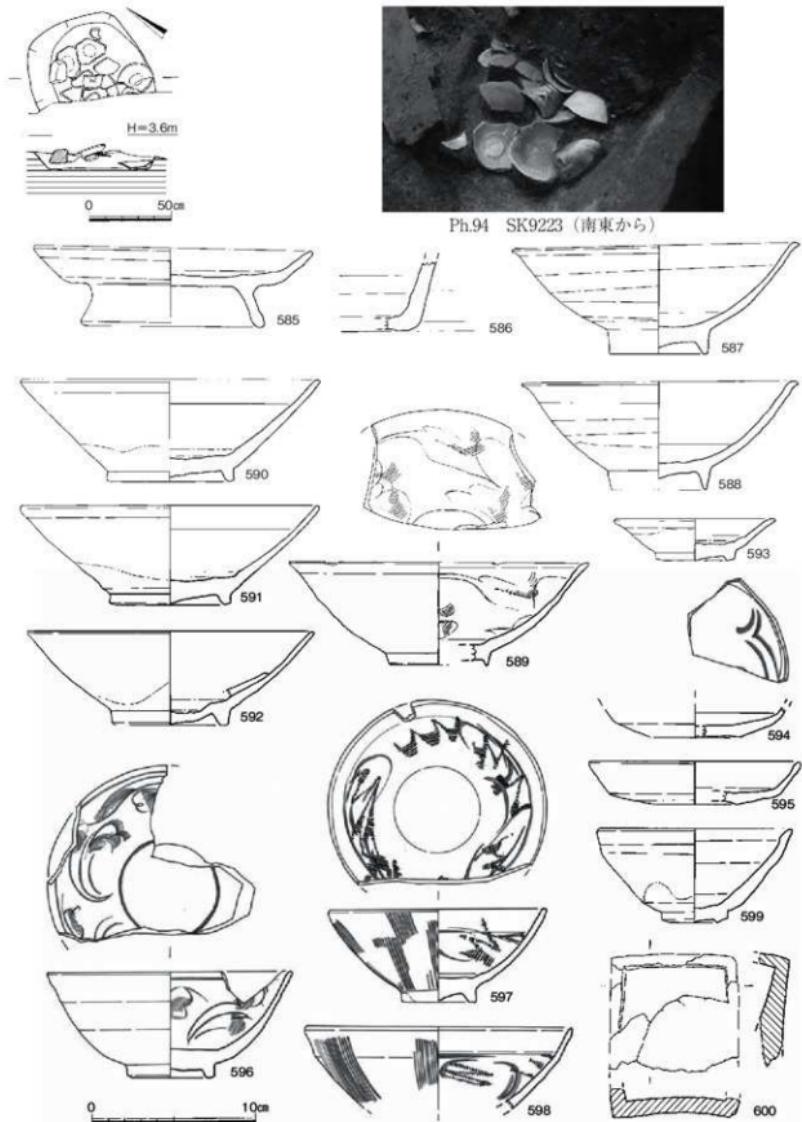


Fig.57 SK9223実測図(1/30)および出土遺物実測図①(1/3)

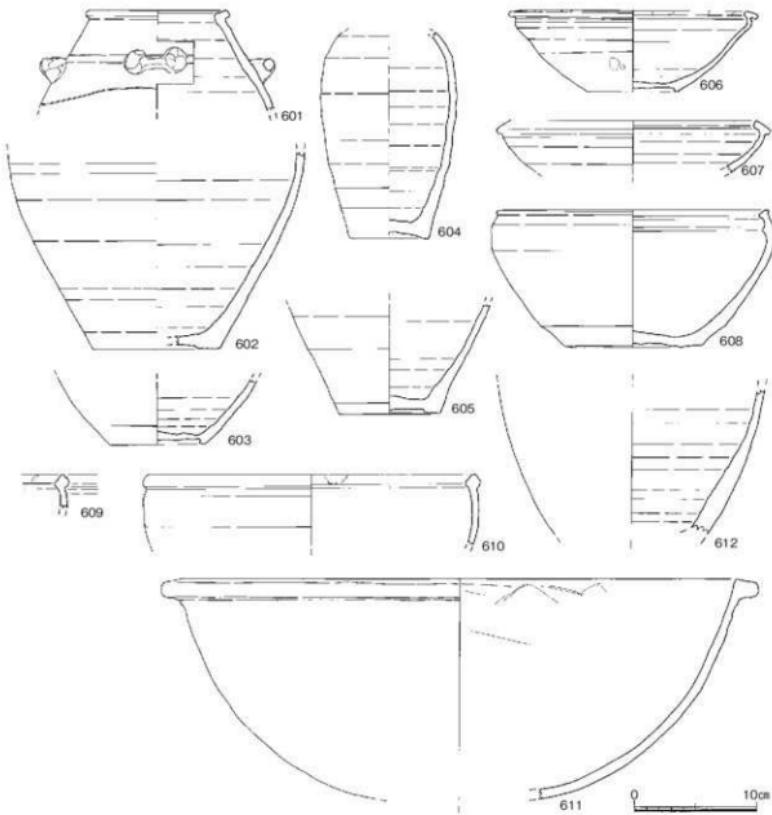


Fig.58 SK9223出土遺物実測図② (1/4)

ンは楕円形を呈すると思われ、東西方向の幅は0.65m、南北方向の長さは現存で0.47mである。床面は平坦であり、深さは10cmを測る。土坑の中には土師器、黒色土器B類、瓦器、白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、中国陶器が多量に廃棄されていた。他に石製の硯が出土する。時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

出土遺物 (Fig.57・58) 585は土師器の高台付き壺である。口径17cm、高台径10.7cm、器高5.0cmを測り、胎土は赤褐色粒、金雲母を含み、明橙色を呈する。586は須恵器の鉢の底部片である。587～595は白磁である。587・588は碗V-4a類、589は碗VI類、590～592は碗VII-2類である。592は内面下位に別個体の白磁が釉着する。593は皿III-1類、594は皿VII-1b類、595は皿VII-1a類である。596は龍泉窯系青磁碗I-3a類、597・598は同安窯系青磁碗I-1b類である。599は天目茶碗で、砂粒を多く含んだ赤色の胎土に茶褐色の釉がかかる。600は細粒砂岩製の硯である。長方形を呈し、硯尻を欠損する。底面は長方形を呈し、よく使用され、滑らかである。逆の面も四状に窪む。601～

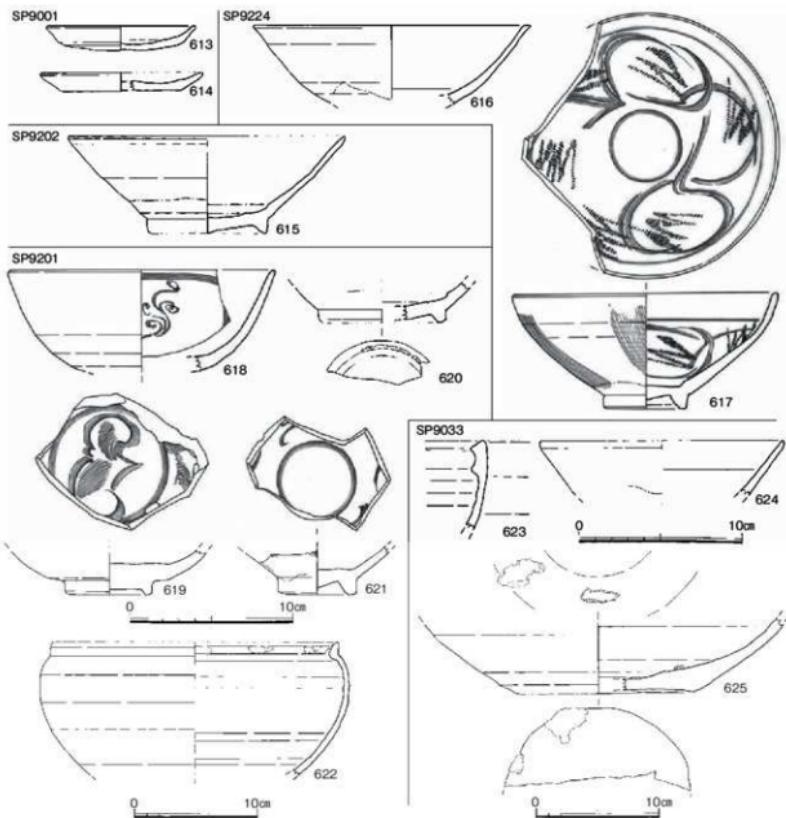


Fig.59 第9面SP出土遺物実測図 (1/3・1/4)

611は陶器である。601～605は壺である。601は四耳壺の口縁部片である。黒色粒を多く含んだ赤色の胎土に灰緑色の釉がかかる。602は底部片で、橙色の胎土に緑色の釉が下位まで垂れる。603は灰色の胎土に緑色釉が全面施釉される。高台付近に6箇所、胎土目がつく。604は小型のもので、灰色の胎土に灰緑色の釉が全面にかかる。605は黒色粒を含む灰色の胎土に緑色釉が高台際までかかる。606～608・611は鉢で、606は橙色の胎土に透明釉がかかる。607は赤褐色粒を含む、黄橙色の胎土に茶色の釉がかかる。606・607は口縁部上面に胎土目が残る。608・611は白色砂粒を多く含んだ赤褐色を呈する胎土の無釉陶器である。口縁部内面には工具痕が残る。611は大型で、外面には一部煤が付着する。609・610は盤の口縁部片である。ともに白色粒、黒色粒を含んだ灰黄色の胎土に灰緑色の釉がかかる。612は白磁の壺の体部片である。

その他の出土遺物 (Fig.59) 613・614はSP9001出土である。ヘラ切り底の小皿で、底部に板状圧痕を有する。613は口径9.0cm、器高1.5cmを測り、底部と口縁部の境が不明瞭で、口縁端部は外反す

る。胎土に金雲母を含み、橙色を呈する。614は口径9.8cm、器高1.1cmを測り、底部と口縁部の境は明瞭で、口縁部は直線的に開く。胎土は金雲母を含み、にぶい橙色を呈する。615はSP9202出土の白磁碗Ⅷ-2類である。616・617はSP9224出土である。616は白磁碗V-2a類、617は同安窯系青磁碗I-1b類である。618~622はSP9201出土である。618・619は龍泉窯系青磁碗I類である。618は口縁部片で、外面は無文、内面は片彫蓮花文を有する。619は底部片で、内面と見込みに片彫り文と横目を入れる。620は白磁碗Ⅸ類の底部片である。621は同安窯系青磁小碗で、底部外面中央は凸状に削られる。内面には箆状の工具による花文が残る。622は施釉陶器の鉢である。黒色粒、白色砂粒を含む灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。口縁部内面と上部には胎土目が残る。623~625はSP9033出土である。623・625は無釉陶器の鉢である。623は白色砂粒を多く含んだ胎土で、内面は比較的滑らかである。625は黒色粒と白色砂粒を多量に含む灰黒色の胎土で、表面は赤褐色を呈する。見込みには細長い胎土目が付着し、底部には粗い砂が付着する。624は白磁碗V-1a類である。

10) 第10面の調査 (Fig.60 Ph.95・96)

第10面はⅠ区・Ⅱ区ともに第9面を20cm程掘削した地山である黄褐色砂で検出した。標高はⅠ区で35m、Ⅱ区で34mを測り、ほぼ平坦である。第9面で調査区の大半は井戸により削平され、第10面で検出した遺構は柱穴のみである。第10面の遺構の時期は8~9世紀である。

SP10029 (Fig.61 Ph.97) Ⅰ区の中央で検出した。平面プランは直径35cmを測る円形を呈し、深さは15cmである。甕の口縁部は一部破損し、蓋も割れて甕の内部に落ち込んでいる状況であった。甕は座った状況で出土しており、胞壺の可能性も考えられる。時期は9世紀後半である。

出土遺物 (Fig.61 Ph.98) 626は土師器の蓋で、1/4枚欠損する。天井部に扁平なボタン状の直径3cmのつまみを有し、口縁端部は折り曲げる。口径19.8cm、器高4.3cmを測る。細かい金雲母を多量に含み、胎土は精良である。色調は明橙色を呈する。外面は回転ヘラ削りを行った後、回転ナデで調整する。つまみ部分には墨で花押が描かれる。627は土師器の甕で、口縁部を一部欠損する。底部は丸く、頸部から大きく外側に開く。口縁部内面は横方向の刷毛目、口縁部外面は雑なナデ、体部外面は底部に至るまで全面に縱方向、斜方向の刷毛目、内面は粗い削りで調整する。胎土に金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。

その他の出土遺物 (Fig.61) 628はSP10014出土の越州窯系青磁の底部片である。黒色粒を含む灰色の胎土に全面施釉される。豊付にはわずかであるが、胎土目が残る。629はSP10034出土のヘラ切り底の土師器の小皿である。口径10.0cm、器高2.0cmを測り、丸みを帯びた底部から緩やかに口縁部に至る。底部中央には焼成後、穿孔を施す。穿孔は直径5mm程度、内面から行う。胎土は精良で、黄橙色を呈する。630はSP10036出土の須恵器の蓋で、口縁端部をわずかに引き出す。631はSP10025出土の土師器の蓋で、金雲母を多量に含み、明橙色を呈する。632~635はSP10210出土である。632は須恵器の蓋である。633は土師器の坏で底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。胎土には金雲母を多量に含み、明橙色を呈する。634は焼塙壺である。体部から口縁部はそのまま引き出して作られ、端部は非常に薄くなる。内面は粗い横方向の刷毛目、外面は指押さえで調整される。粗い整形のため、粘土巻き上げがそのまま残る。635は砂岩製の砥石である。636はSP10220出土の返りを有する須恵器の蓋である。637・638はSP10221出土である。637は須恵器の坏蓋で、白色砂粒を含む。638は土師器の坏である。砂粒を多く含み、明橙色を呈する。

11) 包含層他出土遺物 (Fig.62~66 Ph.66)

(1~2面) 639~644は土師器、645は白磁のミニチュア容器、646・647は朝鮮時代の灰青陶器皿と白磁碗、648は中国の染付皿C群である。649は瓦質土器の湯釜、650は銅製の椀の口縁部片、651は

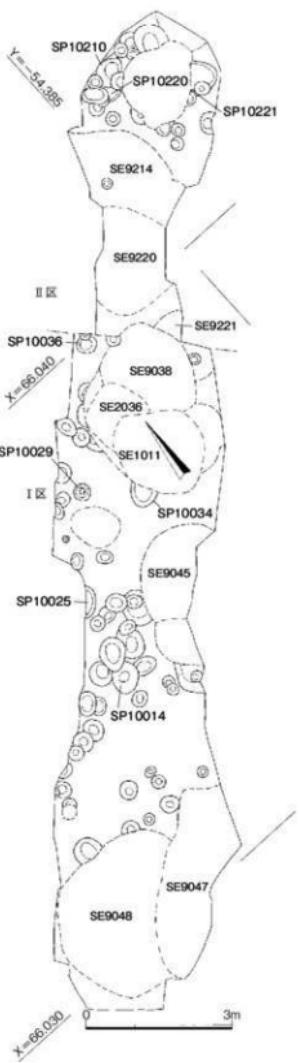


Fig.60 第10面全体図 (1/100)



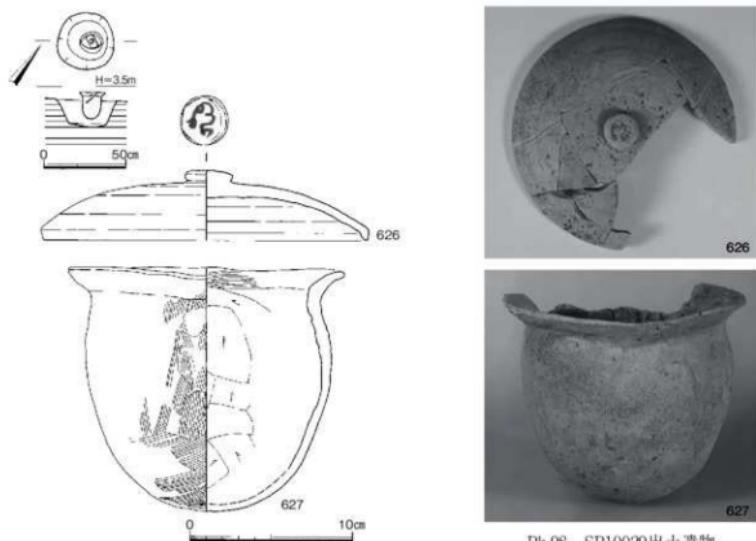
Ph.95 第10面 I 区全景 (南西から)



Ph.96 第10面 II 区全景 (北東から)



Ph.97 SP10029遺物検出状況 (南西から)



Ph.98 SP10029出土遺物

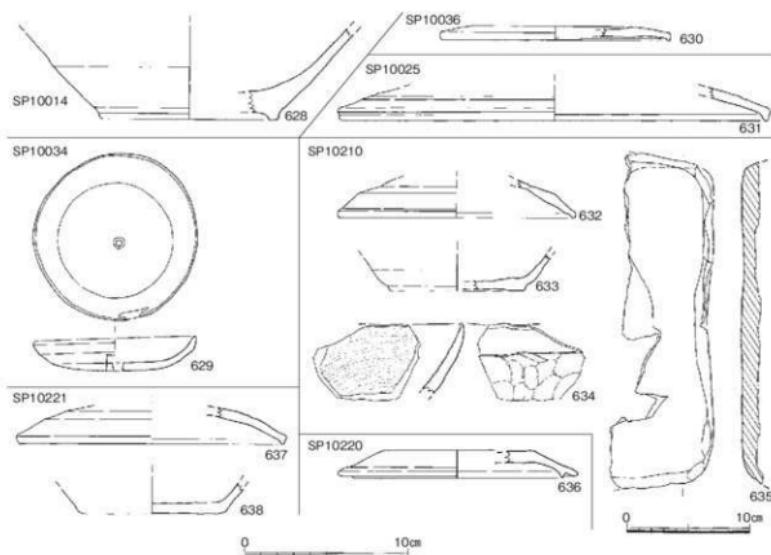


Fig61 SP10029実測図 (1/30) および第10面SP出土遺物実測図 (1/3・1/4)

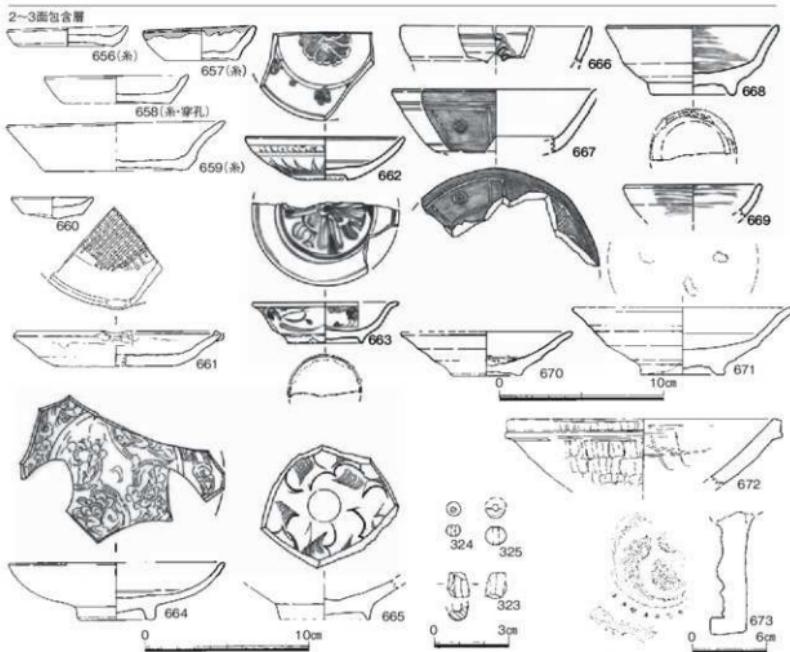
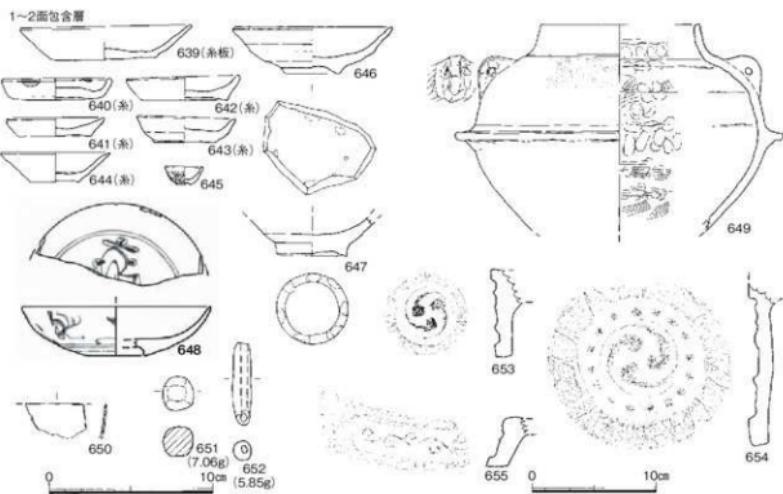


Fig62 第1~3面包含層出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/2)

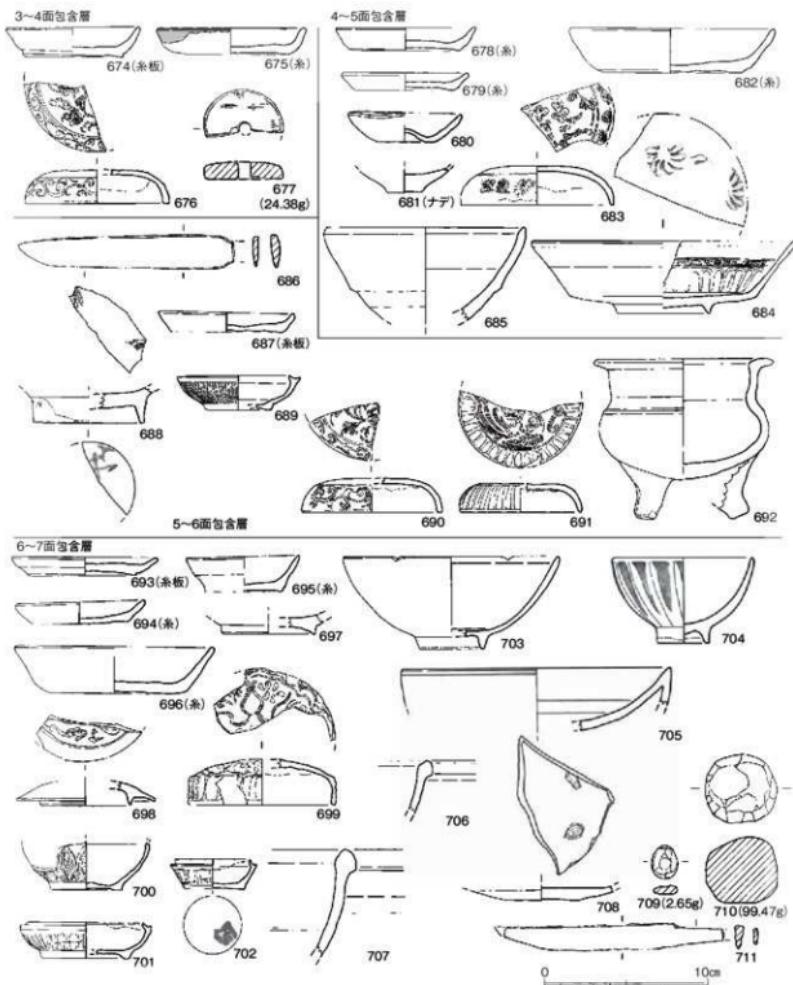


Fig.63 第3~7面包含層出土遺物実測図 (1/3)

石球、652は土錐、653・654は軒丸瓦、655は軒平瓦である。(2~3面) 656~659は土師器、660・661は瀬戸美濃焼の紅皿と片口の卸皿である。662は染付皿C群、663は染付皿B群、664は白磁壺、665は白磁碗である。666~671は朝鮮時代の666は象嵌青磁、667~669は粉青沙器、670は軟質白磁皿、671は硬質白磁皿である。672は滑石石鍋、673は軒丸瓦である。ケイ素、鉛の他、カリウム、銅、鉄を含んだカリウム鉛ガラスの323は容器、324・325は小玉である。(3~4面) 674・675は土師器、676は白磁の合子、677は片岩製の紡錘車である。(4~5面) 678~682は土師器、683・684は青白磁

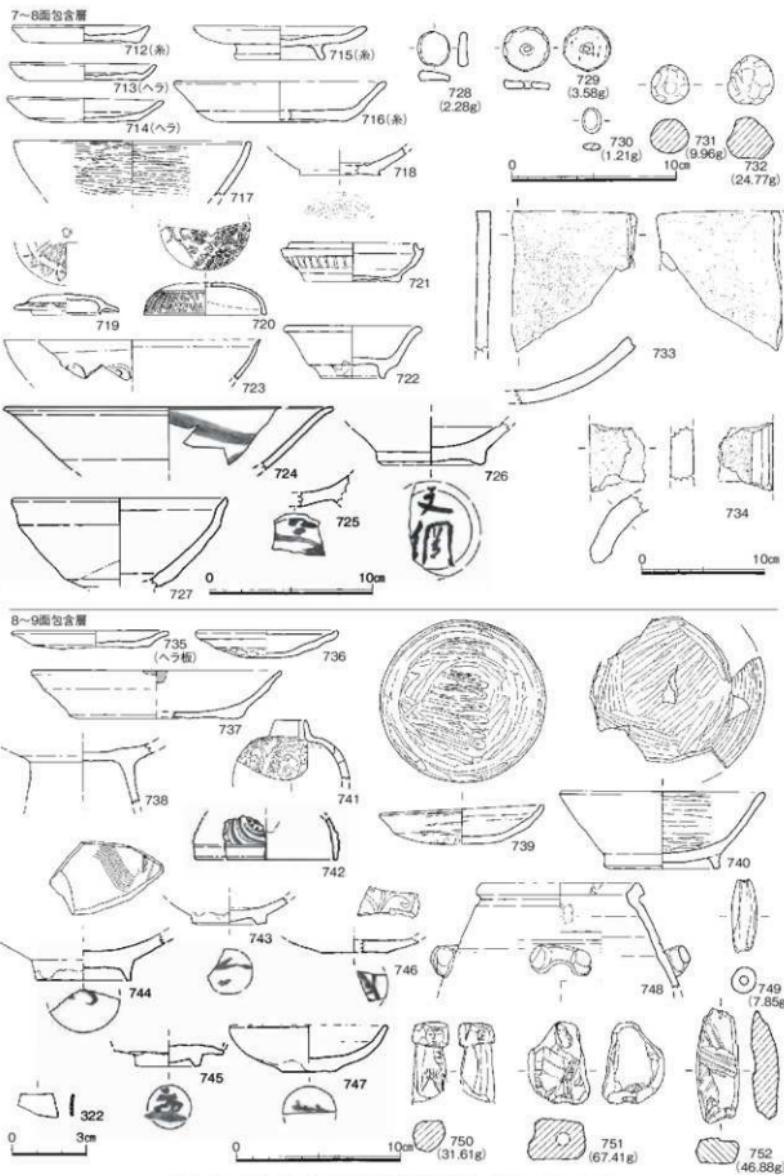


Fig.64 第7~9面包含層出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/2)

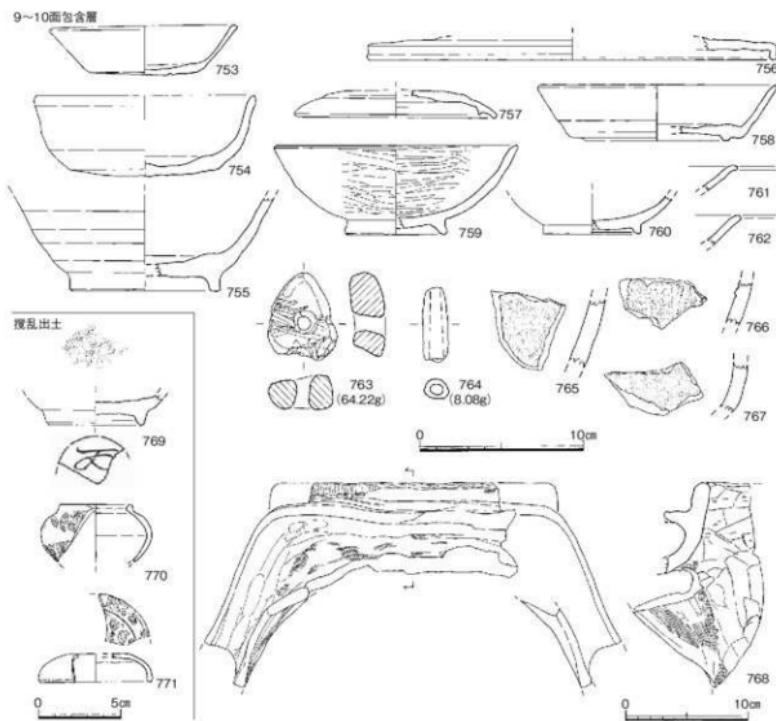


Fig.65 第9～10面包含層・搅乱出土遺物実測図（1/3・1/4）

の合子と坏、685は天目茶碗である。(5～6面) 686は刀子、687は土師器、688は白磁碗V類、689・690は白磁の合子、691は青白磁の合子、692は龍泉窯系青磁の香炉である。(6～7面) 693～696は土師器、697は緑釉陶器、698～702は青白磁・白磁の合子である。703～705は龍泉窯系青磁で、703は碗III-1b類、704は小碗III-2c類、705は双層碗、706・707は磁灶窯系の盤、708は朝鮮時代の硬質白磁皿である。709は黒の碁石、710は石球、711は刀子である。(7～8面) 712～716は土師器、717は楠葉型瓦器椀、718は須恵質土器の椀である。719～721は白磁の合子、722は龍泉窯系青磁坏III-1a類、723は青白磁の碗、724は陶器の碗、725・726は白磁碗IV類、727は天目茶碗である。728・729は円盤状土製品、730は黒の碁石、731・732は石球、733は平瓦、734は丸瓦である。(8～9面) 735～738は土師器、739は瓦器皿、740は黒色土器A類の椀である。741は青白磁の小壺、742は白磁の合子、743～747は白磁で、743は碗VI類、744は碗V類、745は見込みの釉は搔き取る。746・747は皿VI類、748は施釉陶器の四耳壺である。749は土鍤、750～752は滑石製品で、750は人面をもち、他は鍤である。322は青色のガラス容器の小片である。(9～10面) 753～755は土師器、756～758は須恵器、759は瓦器椀、760～762は緑釉陶器である。763は滑石石鍤、764は土鍤、765～767は焼塙壺、768は竈である。(搅乱) 769は龍泉窯系青磁碗、770は白磁の袋合子、771は青白磁の合子である。

Tab.1 西暦別出土銅錢一覧表

錢文	初鑄年	時代	枚数	錢文	初鑄年	時代	枚数	錢文	初鑄年	時代	枚数
開元通寶	621	唐	14	天聖元寶	1023	北宋	5	聖宋元寶	1101	北宋	5
乾元重寶	758	唐	2	景祐元寶	1034	北宋	1	政和通寶	1111	北宋	5
宋通元寶	968	北宋	1	皇宋通寶	1039	北宋	5	淳熙元寶	1174	南宋	2
太平通寶	977	北宋	2	至和元寶	1054	北宋	2	紹定通寶	1228	南宋	1
至道元寶	995	北宋	1	治平元寶	1064	北宋	2	景德元寶	1260	南宋	1
咸平元寶	999	北宋	1	熙寧元寶	1068	北宋	6	永樂通寶	1408	明	1
祥符通寶	1002	北宋	1	元豐通寶	1078	北宋	16	寬永通寶	1636	江戸	12
景德元寶	1005	北宋	3	元祐通寶	1093	北宋	9	無文錢			1
祥符元寶	1008	北宋	6	紹聖元寶	1094	北宋	3	近代錢			1
天禧通寶	1018	北宋	6	元符通寶	1098	北宋	1	判読不能			72

計188枚

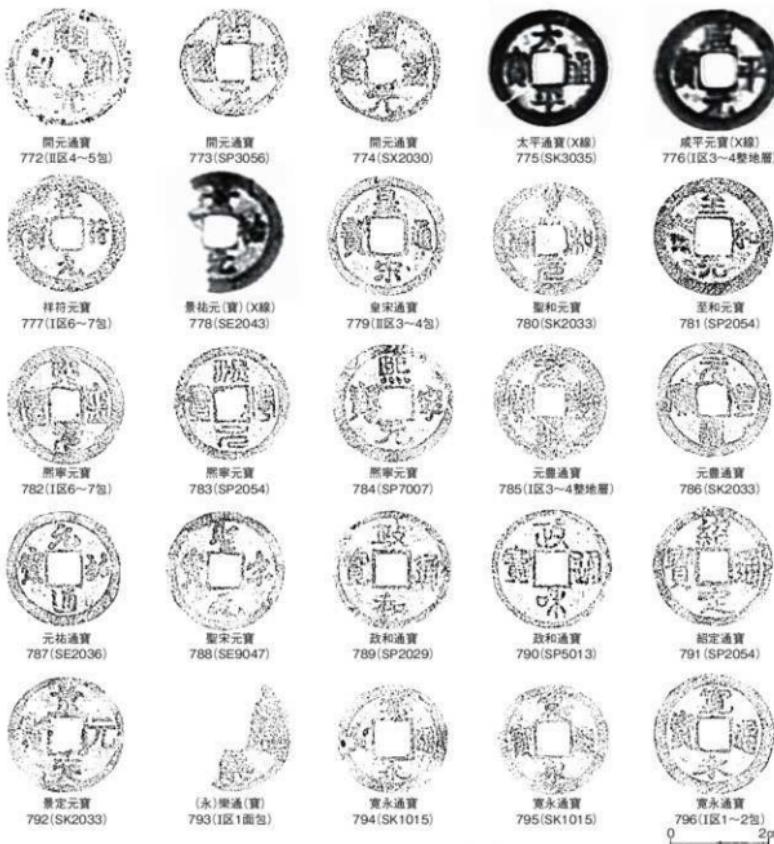


Fig.66 出土銅錢実測圖 (1/1)

IV.まとめ

今回の調査区では、8世紀から現代に至る遺構を検出した。遺構は井戸、土坑、柱穴、道路状遺構である。近接する第35・84・104次調査などで、古くは7世紀後半の堅穴住居跡が営まれ、調査地点一帯に集落が形成されていたことが確認されている。その後、奈良・平安期を経て中世に至るまで、連縦と遺構が営まれ、博多の町並みを形成している。博多の街区については既にまとめられており、博多に街区が出現したのは8世紀頃、最も内陸に位置する砂丘列「博多濱」の南側の砂丘においてである。東西・南北方向の溝で、この区画は官衙に関わるものと推測されている。この溝に規制された建物・遺構は13世紀代まで作られている。その後、13世紀末頃から14世紀初頭に道路整備が実施され、南東～北西方向の基幹道路とそれに平行・交わる道路、支線道路が作られる。これらの道路は、地形に対応してきており、整然と平行・直交するものではなかった。16世紀末まで、嵩上げを繰り返しながら存続し、太閤町割によって廃絶した。今回の調査でも太閤町割とそれ以前に行なわれていた区画の方向を示す遺構が検出されている。最後に遺構の時期について、簡単にまとめをおこなう。

遺構はまず、黄褐色砂層の基盤層で検出された。大部分の遺構は後世の井戸や土坑により削平されていた。柱穴を主体とするものである。南側の第104次調査では9世紀の博多濱北東部を走る溝の存在を指摘しているが、今回の調査区では確認できなかった。11世紀になると、井戸が掘られ、柱穴・土坑が検出された。13世紀になると、遺構の数は激増し、井戸・土坑が密な状態で検出された。これは14世紀前半まで続く。この時期は焼土層と整地層が層状に堆積しており、各面から遺構が掘り込まれていることを確認した。この時期の遺構については後述する。しかし、15世紀には遺構・遺物ともに減少し、その傾向は16世紀まで続く。再び、活発に遺構が営まれるのは、17世紀になってからで、近世にかけては、大量の遺物が廃棄されている。遺物は肥前系陶磁器を始めとして、人形やその型、鉄鋤や羽口、埴輪などの鋳造関連遺物が出土する。墨書きも多く、「安政三年 戊午二月吉祥 楠屋中兵衛」のように1856年の年号をもつ陶器が出土している。この桶の文字は他の陶磁器にも書かれており、この地と深い関わりが想起される。

今回の調査区で最も多く検出した遺構・遺物の時期は13世紀から14世紀にかけてのものである。前述した太閤町割以前の基幹道路と支線道路が、隣接する第35・74・84次調査区で検出されており、これに付随するとされる廊状遺構（148号遺構）が第104次調査区で見つかっている。今回検出した道路状遺構（SX5210）はこの148号遺構と同一のものではないかと思われる。SK7035が13世紀中頃から後半に作られ、その後、道路状遺構が築かれる。道路状遺構は土層から確認できたものであり、調査区の狹さと後世の削平により、その幅・方位等は明確にできなかった。これは、2面から6面まで存続し、標高4.3mから5.2mまで約1mと厚く、黄褐色土、橙色土、シルト、粘質土、砂と炭化物層が細かく互層になって堆積していた。しかし、第2・3面で検出したものは、北壁・南壁土層から太閤町割に近い方位でないかと思われる。また、この道路状遺構の東側と西側には繰り返し整地が行なわれた様相が見てとれる。整地はオリーブ灰色粘土で行なわれ、部分的な検出にとどまったが、土間等に用いられたものもあると思われる。また、焼土層の直上を整地層が覆っていることから、火事等で焼失した直後に整地を行い、すぐさま復興を行ったものと思われる。特筆すべき遺構として大量の炭化種子が出土した13世紀中頃のSK8001がある。オオムギが主体であり、他に少数であるがマメ類・コメ・不明種子が出土する。博多遺跡群における炭化種子の状況を考えるうえでも重要な資料である。

池崎謙二「町割の変遷」川添昭二編『よみがえる中世（1）東アジアの国際都市博多』1988平凡社

大庭康時「聖福寺前一丁目2番地」「法哈堀」第2号 1993博多多研究会

本田浩二郎「博多67」福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第594集 1999福岡市教育委員会

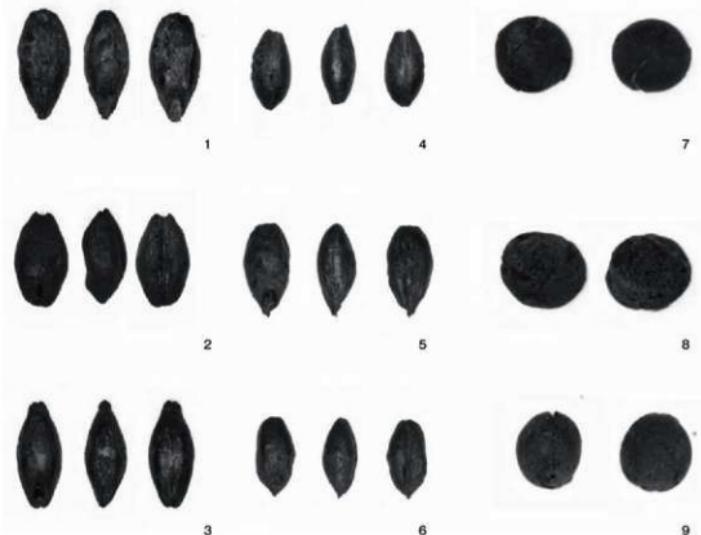
付録

福岡市博多遺跡群第149次調査出土の炭化種子について

山崎純男（福岡市教育委員会文化財部）

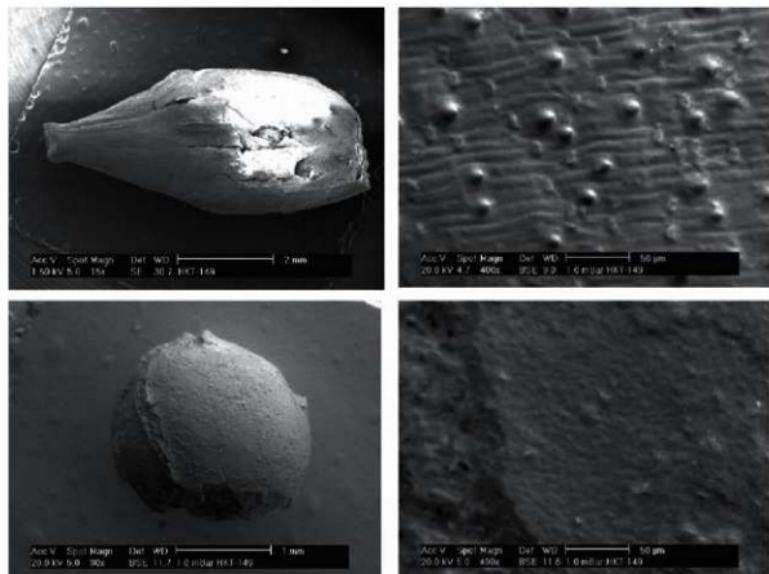
博多遺跡群第149次調査において、13世紀の遺構から炭化種子（穀類）が少なからず出土している。今回は時間の都合からその概要を述べ、詳細については後日を期す事にする。炭化種子が出土した遺構とその種類を以下にまとめる。

遺構名	時期	種類	量	その他
SK-7305	13世紀中頃～後半	コメ・オオムギ	少量	タイ類菌
SK-7214	13世紀後半	オオムギ・コメ・マメ類・不明種	少量	
SK-8001	13世紀中頃	オオムギ・不明種・コメ・マメ類	多量	
SK-8201	13世紀後半	コメ・マメ類・不明種	少量	
SK-8202	13世紀中頃～後半	コメ・マメ類・不明種	少量	



第1図 炭化種子の実体顕微鏡写真（1～6 オオムギ・7～9 不明種）縮尺不同

SK-7305・7214・8201・8202から出土した炭化種子は量がSK-8001に比較して極端に少ない。ただし、炭化種子の構成が異なりコメが優勢である。それに比較して、SK-8001はオオムギがその構成の99%を占めている。この構成の違いが何を意味しているかは現時点では決めがたいが、炭化した要因、あるいは炭化する以前の状態を反映していると考える事もできる。博多遺跡群の他の調査区の炭化種子の状況を含めて検討したいと考えている。なお、オオムギには第1図に示すように普通の大きなもの（第1図1～3）と細く小さいもの（第1図4～6）がある。従来からその存在は指摘されている。今後検討を要する課題である。



第2図 オオムギ（上）・不明種（下）の走査電子顕微鏡写真

第2図にオオムギと不明種の走査電子顕微鏡写真を示した。オオムギには穎が残っている。第2図の左上は全形、右は穎果の拡大写真、突起列や細胞のあり方はオオムギであることを良く示している。下は不明種の写真である。左は全形、種子に加熱によるヒビ割れがみられ果皮が覆っているよう観察できる。右は表皮の拡大写真である。顆粒状の突起が観察できるが判然としない。今後の検討にゆだねたいと思う。なお、この種子はオオムギに混入した状態で出土しているので、栽培種である可能性が強い。

報告書抄録

ふりがな	はかた ひやくじゅう					
書名	博多110					
副書名	博多遺跡群 第149次調査報告					
卷次						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第940集					
編著者名	星野 恵美／山崎 純男					
編集機関	福岡市教育委員会					
発行機関	福岡市教育委員会					
発行年月日	西暦2007年3月30日					
作成機関ID	40130					
郵便番号	810-8621 電話番号 092-711-4667					
住所	福岡県福岡市中央区天神1-8-1					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村：遺跡番号	世界測地系 北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
福岡県福岡市博多区 上井脇町116,117,118番	40130	0121	33° 35' 51" 130° 24' 41"	2005.1.11 ～ 2005.4.28	110m ²	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
博多遺跡群	集落（都市）	古代／中世／近世	井戸 11 石積遺構 4 土坑 58 溝 10 柱穴 多数	土師器、須恵器、黒色土器 A、B類 瓦器、国産陶磁器、白磁、龍泉窯系青磁、青白磁、染付、中国陶器、朝鮮陶磁器、瓦・土製品、石製品、金属製品、鍛造関連遺物、獸骨、魚骨		
要約	第149次調査区は「博多湊」の北東線に当たり、遺構検出を行った標高は34～60mを測る。10面の調査を行い、8世紀から現代に至る遺構を検出した。8世紀の遺構は柱穴が主体で、11世紀になると、井戸・柱穴・土坑を検出した。13世紀になると、遺構の数は激増し、井戸・土坑が密な状態で検出され、道路状遺構が構築されていた。この道路状遺構の東側と西側では繰り返し整地が行なわれ、この状況は14世紀前半まで続く。しかし、15・16世紀には遺構・遺物とともに減少し、再び活発に遺構が形成されるのは、17世紀になってからである。近世においては、大量の遺物が発掘されている。また、特筆すべき遺物として13世紀の土坑から大量の炭化穀子が出土した。					

博多 110

—博多遺跡群 第149次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第940集

2007年（平成19年）3月30日

発行 福岡市教育委員会

福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 ダイヤモンド印刷株式会社

福岡市東区松田3丁目9-32

